大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（9）
町内遺跡発掘調査等事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

横瀬古墳（よこせこふん）

２０１６年３月
鹿児島県大崎町教育委員会

横瀬古墳西側上空より志布志湾を望む（株式会社ふじた提供）

昭和 23 年の横瀬古墳及び周辺環境（昭和 23 年 4 月 6 日　米軍撮影）

序　　文

この報告書は，大崎町教育委員会が町内遺跡発掘調査等事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものです。

横瀬古墳の正確な範囲については，以前から不明な部分も多く，詳細な範囲について調査を行うことが課題でありました。そこでようやく，平成 22 年度から 23 年度の２ヶ年にわたって確認調査を本町の埋蔵文化財専門員が中心となって実施いたしました。

当教育委員会の調査体制が十分に整っていないため，調査にあたっては，各関係機関，団体の皆様に多大なご支援とご指導を賜りました。

横瀬古墳に関しては，まだまだ解明されない課題がありますが，郷土の歴史を知る貴重な資料となりました。この報告書が南九州における古墳文化の様相を究明していく資料として，お役にたてば幸いです。

ここに調査担当者，指導者，作業協力者をはじめ，ご協力とご理解をいただいた地域住民の皆様に，心からの感謝を申し上げます。

平成２８年３月

大崎町教育委員会
教育長　藤　井　光　興

報 告 書 抄 録

ふりがな	よこせこふん
書名	横瀬古墳
副書名	町内遺跡発掘調査等事業に伴う埋蔵文化財調査報告書
シリーズ名	大崎町教育委員会発掘調査報告書
シリーズ番号	9
編著者名	内村憲和　大野泰輔
編集機関	大崎町教育委員会
所在地	〒899－7305　鹿児島県曽於郡大崎町假宿1029番地　TEL/FAX　099－476－0548
刊行年月日	2016年3月

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	面積㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
横瀬古墳	鹿児島県 曽於郡 大崎町 大字横瀬 小字 大塚 エサイ町 溝下 池田	464686	468-35	31° 24′ 48″	131° 0′ 54″	第1次調査 ・確認調査 20100818 ～20100921 ・地中レーダー探査20110216 第2次調査 ・確認調査 20110817 ～20111006 ・土壌サンプリング 20120203 ～20120204	昭和52・53年度 約360㎡ 平成22・23年度 約130㎡ 計　490㎡	範囲確認調査

所収遺跡名	種別	時代	遺構	遺物	特記事項
横瀬古墳	史跡	古墳時代 中世	古墳，周溝 土坑，溝状遺構？	埴輪片，須恵器 青磁，青花	

要　約

昭和52,53年度に鹿児島県教育委員会が実施した横瀬古墳確認調査で周溝が確認された。この成果については鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(29)『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報』に報告されているが，今回は当時の調査原図に基づきトレンチの様相を詳細報告する。また，平成22，23年度に大崎町教育委員会が実施した確認調査で，横瀬古墳の周堤及び外濠の存在が明らかになったので，これについても報告する。

至野神
至雲於市
至野方
持留小
至恵屋市
至志布志市
大隅クリーンロード
県道513号
県道512号
県道64号
国道220号
国道519号
国道448号
横瀬古墳
志布志湾
0 (1:50000) 1000 2000m

横瀬古墳の位置図

横瀬古墳の位置と周辺地形

例　　言

1．本書は，町内遺跡発掘調査等事業に伴う横瀬古墳の発掘調査報告書である。
2．本遺跡は，鹿児島県曽於郡大崎町横瀬に所在する。
3．発掘調査及び報告書作成については，文化庁及び鹿児島県教育委員会から補助を受け，大崎町教育委員会が担当した。
4．発掘調査は平成 22，23 年に確認調査を実施し，整理作業，報告書作成は平成 27 年度に実施した。なお，昭和 52，53 年度に鹿児島県教育委員会が実施した横瀬古墳周濠確認調査の成果についても図面の整理作業，分析を行った。
5．遺物番号は通し番号とし，本文・挿図・表・図版の番号は一致する。
6．挿図の縮尺は，各図面に示した。
7．本書で用いたレベル数値及び座標は，海抜絶対高，世界座標を用いている。ただし，昭和 52，53 年の横瀬古墳周濠確認調査における海抜絶対高が不明であるため，本報告書では記載されていない。
8．実測における基準点の座標及び KBM の測量は，町道に設定されている基準点を用いた。町道に設定されている基準点は，株式会社久永が設定したものである。
9．横瀬古墳の空中撮影は株式会社ふじたが行った。
10．発掘調査における図面の作成は，内村，出原，清水，上档，鹿児島県立埋蔵文化財センター　平　美典，岩永勇亮が行った。写真撮影は内村が行った。
11．トレンチ配置図作成は出原，清水，上档が行った。また，横瀬古墳周辺地形測量は，大野，出原，清水，上档で行った。
12．トレンチの平面図及び土層断面図のトレースは出原，清水，上档が行い，遺物の実測・トレースは出原，清水，上档が行った。デジタルトレースは大野が行った。実測図面の添削は内村，大野が行い，鹿児島県立埋蔵文化財センター今村結記の支援を得た。
13．昭和 52，53 年の発掘調査に係る図面や遺物等については鹿児島県立埋蔵文化財センター　閒　明恵の支援を得た。また，鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター　中村耕治氏の協力を得た。
14．遺物の写真撮影は，鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターの吉岡康弘が行った。
15．本書の編集は内村・大野が担当した。

第１～５章　（内村）
第６章　　（南九地質株式会社）
第７章　　（内村）
第８章　　（大野）
第９章　　（内村）

16．平成 22，23 年の発掘調査では「周溝」・「外溝」表記で公表していたが，昭和 52，53 年の確認調査で「周濠」の表記を採用しているため，本報告書でも「周濠」・「内濠」・「外濠」の表記を用いた。宮崎大学名誉教授　柳澤一男氏によれば，「周堀」・「内堀」・「外堀」という表現を用いる方法もあるという助言も得た。
17．平成 22，23 年度の発掘調査及び，平成 27 年度墳丘滑落で採取した遺物は大崎町教育委員会で保管し，展示・活用する。なお，遺物注記の略号は「YKS」である。

本 文 目 次

巻頭図版
序文
報告書抄録
横瀬古墳の位置図
横瀬古墳の位置と周辺地形
例言
目次
第１章　発掘調査の経過 ・・・・・・・・・・・・１
　第１節　調査に至るまでの経過 ・・・・・・・１
　第２節　発掘調査の経過と組織 ・・・・・・・１
第２章　遺跡の位置と環境 ・・・・・・・・・・４
　第１節　地理的環境 ・・・・・・・・・・・・４
　第２節　歴史的環境 ・・・・・・・・・・・・５
第３章　発掘調査の方法 ・・・・・・・・・・・10
　第１節　発掘調査の記録方法 ・・・・・・・・10
　第２節　整理作業及び報告書における報告の方法 11
第４章　層序 ・・・・・・・・・・・・・・・・13
第５章　発掘調査の概要 ・・・・・・・・・・・14
　第１節　昭和 52，53 年度確認調査の概要 ・・・14
　第２節　平成 22，23 年度確認調査の概要 ・・・34
第６章　地中レーダー探査の概要・・・・・・・・53
　第１節　測定方法及び解析方法 ・・・・・・・53
　第２節　測量配置 ・・・・・・・・・・・・・54
　第３節　調査結果 ・・・・・・・・・・・・・56
第７章　土壌サンプリングの概要 ・・・・・・・61
　第１節　サンプリング方法 ・・・・・・・・・61
　第２節　分析結果 ・・・・・・・・・・・・・62
第８章　平成 27 年４月 30 日墳丘南滑落に伴う調査記録 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・63
　第１節　墳丘面滑落の経緯 ・・・・・・・・・63
　第２節　滑落面からみえる古墳の造成状況 ・・63
　第３節　滑落した土から採集した埴輪片 ・・・64
第９章　総括 ・・・・・・・・・・・・・・・・68
　第１節　横瀬古墳に関する過去の記録と調査 ・・68
　第２節　調査のまとめ ・・・・・・・・・・・68
　第３節　今後の課題・・・・・・・・・・・・・70
図版 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・73

挿 図 目 次

第１図　横瀬古墳周辺地形図 ・・・・・・・・・４
第２図　文政７年（1824 年）の横瀬古墳周辺地形図 ４
第３図　志布志湾岸における砂州・砂丘分布図・・５
第４図　横瀬古墳及び周辺遺跡位置図 ・・・・・８
第５図　調査前の外濠推定範囲 ・・・・・・・・・10
第６図　昭和 52，53 年の横瀬古墳範囲確認トレンチ配置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・12
第７図　平成 22，23 年の横瀬古墳範囲確認トレンチ配置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・12
第８図　本報告書におけるトレンチ番号 ・・・・・12
第９図　１，２トレンチ配置図 ・・・・・・・・14
第 10 図　１トレンチ平面図・周濠断面図 ・・・・・14
第 11 図　２トレンチ平面・断面概要図 ・・・・・15
第 12 図　２トレンチ平面図・北壁面土層断面図 ・・16
第 13 図　３トレンチ配置図 ・・・・・・・・・・17
第 14 図　３トレンチ平面・断面概要図 ・・・・・17
第 15 図　３トレンチ平面図・西壁面土層断面図 ・・18
第 16 図　４，５トレンチ配置図 ・・・・・・・・20
第 17 図　４トレンチ平面・断面概要図 ・・・・・21
第 18 図　４トレンチＡ区平面図・東壁面土層断面図 21
第 19 図　４トレンチＢ・Ｃ区平面図・土層断面図 ・22
第 20 図　５トレンチ平面・断面概要図 ・・・・・23
第 21 図　５トレンチＡ区間北壁面土層断面図 ・・・23
第 22 図　５トレンチＢ区間平面図・北壁面土層断面図 24
第 23 図　６，７トレンチ配置図 ・・・・・・・・26
第 24 図　６トレンチ平面図・北壁面土層断面図 ・・26
第 25 図　７トレンチ平面・断面概要図 ・・・・・27
第 26 図　７トレンチＡ区間平面図・北壁面土層断面図 27
第 27 図　７トレンチＢ区間北壁面土層断面図 ・・・28
第 28 図　８トレンチ配置図 ・・・・・・・・・・29
第 29 図　８トレンチ平面・断面概要図 ・・・・・29
第 30 図　８トレンチＡ区平面図・東壁面土層断面図 29
第 31 図　８トレンチＢ区平面図・東壁面土層断面図 31
第 32 図　８トレンチＣ区平面図・東壁面土層断面図 32
第 33 図　昭和 52，53 年確認トレンチ出土須恵器・・33
第 34 図　９トレンチ配置図 ・・・・・・・・・・34
第 35 図　９トレンチ平面・断面概要図 ・・・・・35
第 36 図　９トレンチＡ区平面図・東壁面土層断面図 35
第 37 図　９トレンチＢ区平面図・東壁面土層断面図 36
第 38 図　９トレンチＣ区平面図・東壁面土層断面図 37
第 39 図　９トレンチ出土遺物 ・・・・・・・・・37
第 40 図　９トレンチ遺物出土状況 ・・・・・・・38
第 41 図　10 ～ 12 トレンチ配置図 ・・・・・・・40
第 42 図　10 ～ 12 トレンチ平面・断面概要図 ・・・40
第 43 図　10 トレンチ平面図・北壁面土層断面図 ・・41
第 44 図　10 トレンチ出土遺物 ・・・・・・・・・42
第 45 図　11 トレンチ北壁面土層断面図 ・・・・・42
第 46 図　12 トレンチ平面図・北壁面土層断面図 ・・42
第 47 図　13 トレンチ配置図 ・・・・・・・・・・43
第 48 図　13 トレンチ平面図・東壁面土層断面図 ・・44

第 49 図　13 トレンチ出土遺物・・・・・・・・・45
第 50 図　14 トレンチ配置図・・・・・・・・・・46
第 51 図　14 トレンチ平面図・東・西壁面土層断面図 47
第 52 図　14 トレンチ 1 号遺構出土遺物　・・・・48
第 53 図　15 トレンチ配置図・・・・・・・・・・50
第 54 図　15 トレンチ平面・断面概要図・・・・・50
第 55 図　15 トレンチ平面図・北南壁面土層断面図 51
第 56 図　15 トレンチ出土遺物・・・・・・・・・52
第 57 図　地中レーダー探査測定概念図・・・・・53
第 58 図　地中レーダー波形記録の表示方法　・・・53
第 59 図　地中レーダー探査データ解析フロー　・・54
第 60 図　道路下における電磁波の波路と記録模式図 54
第 61 図　地中レーダー探査側線配置図・・・・・55
第 62 図　地中レーダー探査断面図代表例　・・・・57
第 63 図　地中レーダー探査異常個所平面図　・・・58
第 64 図　地中レーダー探査異常個所断面図（側線 1 ～ 6）・・・・・・・・・・・・・・・59
第 65 図　地中レーダー探査異常個所断面図（側線 6 ～ 12）　・・・・・・・・・・・・・・60
第 66 図　土壌サンプリング箇所配置図　・・・・・61
第 67 図　サンプリング試料柱状図　・・・・・・・62
第 68 図　墳丘滑落位置図　・・・・・・・・・・・63
第 69 図　墳丘面土層図・横断図　・・・・・・・・63
第 70 図　墳丘面滑落部採集遺物①　・・・・・・・65
第 71 図　墳丘面滑落部採集遺物②　・・・・・・・66
第 72 図　横瀬古墳復元想定図　・・・・・・・・・71
第 73 図　横瀬古墳周辺地理的環境想定図　・・・・72

表　目　次

第 1 表　周辺遺跡地名表・・・・・・・・・・・・9
第 2 表　報告書掲載と調査時のトレンチ名対応表・12
第 3 表　基本土層一覧表・・・・・・・・・・・・13
第 4 表　昭和 52、53 年確認トレンチ出土須恵器観察表　・・・・・・・・・・・・・・・・・33
第 5 表　9 トレンチ出土遺物観察表　・・・・・・38
第 6 表　10 トレンチ出土遺物観察表　・・・・・・42
第 7 表　13 トレンチ出土遺物観察表　・・・・・・45
第 8 表　14 トレンチ 1 号遺構出土埴輪観察表　・・48
第 9 表　14 トレンチ 1 号遺構出土青磁・青花観察表 48
第 10 表　15 トレンチ出土遺物観察表　・・・・・・52
第 11 表　地中レーダー探査　使用機器一覧表・・・53
第 12 表　地中レーダー探査結果一覧表（1）・・・56
　　地中レーダー探査結果一覧表（2）・・・57
第 13 表　土壌サンプラー基本仕様　・・・・・・・61
第 14 表　土壌サンプリング箇所一覧表　・・・・・61
第 15 表　墳丘面滑落部採集埴輪観察表　・・・・・67
第 16 表　横瀬古墳計測表　・・・・・・・・・・・70

図　版　目　次

図版 1　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・73
①9 トレンチ
②9 トレンチ外濠
③9 トレンチ外濠埋土堆積状況
④9 トレンチ北部分自然流路
⑤10 トレンチ
図版 2　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・74
①10 トレンチ北壁面土層断面状況（平成 22 年度）
②10 トレンチ北壁面土層断面状況（平成 23 年度）
③10 トレンチ周堤東側壁面掘り込み断面
④10 トレンチ墳丘築造期後の後世遺構断面
⑤11 トレンチ
⑥12 トレンチ
⑦12 トレンチ西部分掘り込み
図版 3　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・75
①13 トレンチ
②13 トレンチ外濠
③13 トレンチ外濠埋土堆積状況
④14 トレンチ 1 号遺構
⑤14 トレンチ北部分遺構群
⑥14 トレンチ 2 号遺構検出状況
図版 4　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・76
①15 トレンチ
②15 トレンチ北壁面土層断面及び砂丘形成層面地形
③15 トレンチ周堤に側壁面箇所（土層断面より）
報道発表
現地見学会
図版 5　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・77
平成 22・23 年度確認調査トレンチ出土遺物
平成 27 年墳丘面滑落に伴う採集遺物①
図版 6　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・78
平成 27 年墳丘面滑落に伴う採集遺物②

第１章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経過

平成 19 年３月に大崎町企画調整課広報係から大崎町教育委員会（以下，町教育委員会）に横瀬古墳の上空写真の提供があった。この上空写真の撮影者，撮影時期については詳細不明であるが，横瀬古墳周辺の状況や前方部の植生から，昭和終わり頃から平成初期の頃に撮影されたものと推測する。

上空写真には，横瀬古墳周囲に周濠に伴う明瞭なソイルマーク，クロップマークが映し出されていた。昭和 52，53 年に鹿児島県教育委員会が行った横瀬古墳周囲の確認調査で周濠の存在を確認しており，確認調査で得られた成果をもとに横瀬古墳の墳丘と周濠の範囲を示している。ソイルマーク，クロップマークで示された範囲は鹿児島県教育委員会が示している周濠の範囲と概ね一致していた。

この上空写真で注目されたのは，これまで確認されていた周濠の外側に周濠と並行するソイルマーク，クロップマークが見られたことである。町教育委員会は横瀬古墳が二重周濠である可能性があることを指摘し，鹿児島県教育委員会文化財課（以下，県文化財課）と遺跡の範囲の取り扱いについて協議を行った。協議の結果，将来的に史跡の範囲を拡大する方向性を視野に入れ，確認調査を行い，外濠の範囲を明確にする必要があるということになった。

平成 21 年，大崎町教育委員会は飯隈遺跡群における飯隈古墳群城内で畜産農家と鹿児島県地域振興公社による開発計画に伴い，当計画地の確認調査を行うにあたって，文化庁補助を得て実施する事業計画を立てた。これに合わせて，「町内遺跡発掘調査等事業」として，横瀬古墳の範囲確認調査も２ヶ年計画で実施することとなった。平成 23 年度は鹿児島県教育委員会から補助金を得た。

横瀬古墳の範囲確認調査は平成 22 年と平成 23 年の２ヶ年にわたって実施することになった。調査を行うにあたって，文化庁，県文化財課の指導を受け，また鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下，県立埋蔵文化財センター）の支援を得て実施した。

第２節　発掘調査の経過と組織

（平成 22 年度）

平成 22 年度は，８月から９月までの農閑期に外濠と推測されるソイルマーク，クロップマークが不明瞭な箇所を中心にトレンチを設定した。トレンチは外濠が想定される３ヶ所に設定した。今回のトレンチは後円部の東側と西側，そして墳丘の南西側に設定した。

写真１　横瀬古墳上空写真

また，12 月に横瀬古墳を中心として，周辺の地中レーダー探査も実施し，次年度の外濠の範囲を絞り込むとともに，次年度の確認調査の基礎資料を作成した。

調査責任者	町教育委員会教育長	諸木　逸郎
調査事務	町教育委員会社会教育課長	大野　達夫
	〃　課長補佐	入江田吉文
調査担当	町教育委員会社会教育課文化公民館係主任	内村　憲和
実測補助	町教育委員会社会教育課臨時職員	出原ふじ子・清水優子・上档さつき
調査指導	県文化財課埋蔵文化財係文化財主事	中村　和美・川口　雅之
	鹿児島大学総合研究博物館准教授	橋本　達也
調査支援	県立埋蔵文化財センター文化財主事	平　美典

（平成 23 年度）

平成 23 年度は，８月から 10 月までの農閑期に発掘調査を実施した。前年度の地中レーダー探査で得られた情報をもとに，外濠の可能性が確認できた墳丘北側と南側にトレンチを設定した。また前年度に後円部東側に設定

したトレンチのさらに東側を詳細に確認するため，３ヶ所のトレンチを設定した。

期間が限られているため，トレンチ調査ができなかった範囲，特に墳丘東側は調査地が泥質でトレンチ調査後の耕作地復旧が困難であると予想される箇所では，ボーリング調査を実施した。

調査責任者　町教育委員会教育長
諸木　逸郎（９月まで）
藤井　光興（10 月から）
調査事務　町教育委員会社会教育課長　大野　達夫
〃　課長補佐　東條　昭憲
調査担当　町教育委員会社会教育課主任　内村　憲和
実測補助　町教育委員会社会教育課臨時職員
出原ふじ子・清水優子・上档さつき
指導監督　文化庁記念物課調査官　林　正憲
調査指導　県文化財課埋蔵文化財係主事　川口　雅之
鹿児島大学総合研究博物館准教授
橋本　達也
鹿児島大学法文学部講師　永迫　敏郎
調査支援　県立埋蔵文化財センター文化財研究員
岩永　勇亮
〃　嘱託職員
長野　眞一

（平成 27 年度）

平成 27 年度は，文化庁と鹿児島県教育委員会の補助金を得て，横瀬古墳範囲確認調査の報告書作成を行った。また，平成 22，23 年度の調査で未作成であった横瀬古墳周辺地形の平面図作成も行った。

調査責任者　町教育委員会教育長　藤井　光興
調査事務　町教育委員会社会教育課長　中村富士夫
〃　課長補佐　谷迫　利弘
調査担当　町教育委員会社会教育課係長　内村　憲和
〃　主任　大野　泰輔
実測補助　町教育委員会社会教育課臨時職員
出原ふじ子・清水優子・上档さつき
調査支援　鹿児島県立埋蔵文化財センター文化財主事
関　明恵
〃　文化財研究員
今村　結記
調査指導　鹿児島県教育委員会文化財課文化財主事
黒川　忠広
〃　森　幸一郎
調査協力　（公財）鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター　文化財専門員　吉岡　康弘
〃　中村　耕治

なお平成 22 年度，23 年度及び 27 年度は，事務的補助において，社会教育課職員として本松健一郎，楠原薫，鎌田洋一，宮本美和子，救仁郷義達，中崎みずえ，仮水公司，稲森洋平，米永康平，長谷川勝哉，鮫島新也，古田由香，山下理香，平松典子，大野美絵の協力を得た。

日誌抄

平成 22 年度

日付	曜日	天気	作業内容
H22			
８/18	水	雨	１・３Ｔ設定。
８/19	木	晴れ	１・３Ｔ表土はぎ。
８/20	金	晴れ	基準点探し。
８/23	月	晴れ	１・３Ｔ掘り下げ作業。
８/24	火	晴れ	仮ベンチにレベル移動。
８/25	水	晴れ	仮ベンチにレベル移動。
８/26	木	雨	現場休み。
８/27	金	曇り	１Ｔ：精査後遺構検出。遺構精査。写真撮影。 ２Ｔ：設定・重機による表土はぎ。 ３Ｔ：旧表土表土はぎ・遺構検出。 県文化財課　中村和美氏支援・指導 県立埋文センター　平美典氏支援。
８/30	月	雨	現場休み。
８/31	火	曇り	１Ｔ：サブトレンチ設定。掘り下げ。 ２Ｔ：西側掘り下げ。精査。 ３Ｔ：遺構埋土掘り下げ。
９/１	水	雨	現場休み。
９/２	木	晴れ	１Ｔ：トレンチ北壁面精査。分層後，土層断面図作成。 ３Ｔ：遺構埋土掘り下げ。中世陶磁器出土。北側の精査。平氏支援。
９/３	金	晴れ	２Ｔ：サブトレンチ設定。掘り下げ。
９/６	月	雨	現場休み。
９/７	火	曇り	３Ｔ：北側遺構精査。平面図実測。
９/８	水	曇り	１Ｔ：清掃。写真撮影。 ２Ｔ：壁面清掃。
９/９	木	晴れ	１Ｔ：土層断面図作成。 ２Ｔ：床面清掃写真撮影。
９/10	金	晴れ	３Ｔ：記録写真。サブトレンチ設定。掘り下げ。土層分層。
９/11	土	晴れ	１Ｔ：トレンチ配置図作成。 ２Ｔ：土層断面図作成。
９/13	月	曇り	２Ｔ：トレンチ配置図作成。 鹿大　橋本達也氏現地指導。
９/14	火	晴れ	２Ｔ：土層記録写真撮影。
９/15	水	曇り	３Ｔ：遺構写真撮影。トレンチ配置図作成。重機で１・２Ｔ埋め戻し。
９/16	木	雨	現場休み。
９/17	金	晴れ	３Ｔ：遺構平面図作成。レベル実測。
９/19	日	晴れ	３Ｔ：土層断面図作成。
９/20	月	晴れ	３Ｔ埋め戻し準備。
９/21	火	晴れ	重機で３Ｔ埋め戻し。
H23			
2/16	水	曇り	地中レーダー探査実施。

平成 23 年度

日付	曜日	天気	作業内容
H23			
8/17	水	曇り	4・5・6・7・8T設定・表土はぎ。
8/18	木	晴れ	4・5・6・7・8T表土はぎ
8/19	金	曇り	現場休み。
8/22	月	晴れ	4・8T：トレンチ精査。県立埋文センター　岩永勇亮氏支援。
8/23	火	晴れ	4・8T：トレンチ精査。サブトレンチ設定後，掘り下げ。8Tは紫コラ上面で精査。岩永氏支援。
8/24	水	晴れ	4T：トレンチ北側精査・写真撮影。サブトレンチ設定。掘り下げ。 8T：サブトレンチ紫コラ堆積状況写真撮影後，サブトレンチ掘り下げ。
8/25	木	雨	現場休み。
8/26	金	晴れ	4T：外濠と思われる遺構検出。掘り下げ。
8/29	月	晴れ	8T：外濠思われる遺構の掘り下げ。
8/30	火	晴れ	4T：外濠土層断面図作成。岩永氏支援。 5・7T：精査。 6T：掘り下げ。
8/31	水	晴れ	6T：掘り下げ。 4T：外濠完掘写真
9/1	木	曇り	5・6・7T：写真撮影。 8T：外濠完掘。岩永氏支援。
9/2	金	曇り	5～7T：北壁面精査・分層。土層断面実測図作成。
9/5	月	晴れ	4T：清掃・写真撮影。 8T：外濠完掘写真撮影。 県文化財課　川口雅之氏指導・支援。
9/6～8	火～木	晴れ	5～7T：北壁面土層断面図実測図作成。 8日，岩永氏支援。
9/9	金	雨	現場休み。
9/12	月	晴れ	4T土層精査
9/13	火	曇り	5～7T土層記録。 8T：外濠土層断面精査。
9/14	水	晴れ	文化庁記念物課　林正憲氏，県文化財課　川口氏，鹿大　橋本達也氏，永迫俊郎氏による現地検討及び指導。
9/15	木	曇り	4T：平面図実測。 8T：土層断面図作成。
9/16～20	金ー火	雨	台風接近による大雨により現場休止。
9/21・22	水・木	曇り	8T土層断面図作成。
9/23	木	晴れ	マスコミ発表準備。
9/23	金	晴れ	マスコミ発表。
9/26・27	月・火	雨	現場休止。
9/28～30	水ー金	晴れ	現地説明会準備。
10/1	土	晴れ	現地説明会。岩永氏ボランティア協力。
10/3～6	月～木	曇り	各トレンチの配置図作成。
10/7	金	晴れ	重機で各トレンチ埋め戻し。
H24 2/3・4	金・土	晴れ	土壌サンプリング調査。鹿大　永迫俊郎氏指導。

平成 27 年度

日付	曜日	天気	作業内容
H27 4/30	木	雨	横瀬古墳後円部西側一部滑落。 文化財課黒川忠弘氏来跡。崩壊対策と現地協議。
5/13～25	水ー月		随時，横瀬古墳周辺地形測量。滑落部位置図作成。
6/29	金	晴れ	横瀬古墳滑落部の土層分層。実測。
7/6～8/21	月ー金		随時，横瀬古墳滑落部分の埋戻し作業。
8/31	月	晴れ	横瀬古墳復旧部分の芝貼り。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

大崎町は鹿児島の東部，大隅半島の南西部に位置し，総面積は 100.67 ㎢，東西に約 8 ㎞，南北に約 18 ㎞となっている。東は志布志市，南は肝属郡東串良町，西は鹿屋市，北は曽於市と接し，南東は志布志湾に面している。

北部を大鳥川が西から東へ流れ，曽於市大隅町，志布志市有明町で南流しながら菱田川として志布志湾に注いでいる。また，本町東部を田原川，中央部を持留川が南流し，これらも志布志湾に注いでいる。これらの河川によって本町の地勢は概ね２地区に分けられる。北端部は，菱田川の上流となる大鳥川を中心として，河川が溶結凝灰岩を切り開き，谷間の多い起伏の激しい渓谷を構成している。

本町の大部分はシラス土壌の上に形成された黒色火山灰土壌が広がる台地となっている。シラス台地の大部分は今から約 29,000 年前に姶良カルデラを起源とする破局噴火による入戸火砕流堆積物で構成されている。そのため本町は北部から南部の志布志湾に向けて緩やかな下り勾配となっている。しかし，本町においては北部の台地と中部以南の台地を分断するかのように丘陵地帯となっている。本町と志布志市有明町との境にある草野丘は代表的である。いずれの丘陵部も粘板岩で構成されている。入戸火砕流の埋没を免れた山の頂部が丘陵地帯を形づくっている。

中部から南部地帯は北西から東南の海岸線に向かって，緩やかに傾斜している起伏の少ない平坦な地帯であり，場所によって志布志湾まで見通せる。志布志湾に注ぐ河川によって台地は区切られ，本町西部から永吉台地，仮宿台地，飯隈（中神）台地に分類される。永吉台地の西側を串良川，永吉台地と仮宿台地間を持留川，飯隈台地の東側を菱田川が流れている。入戸火砕流原を現在の河川の本流であった古肝属川，古菱田川により削剥，開析されて現在の地形の基礎が出来上がった。なお，本町飯隈台地東部に位置する菱田・中神地区及び志布志市有明町蓬原地区までは一段低い菱田原台地が広がっており，菱田川によって形成された河成段丘が形成されていたことを示す。同じく菱田川対岸の志布志市有明町野井倉地区でも同じような河成段丘が見られる。

縄文海進最盛期の頃まで志布志湾に突出していたシラス台地の先端部が約 5,500 年～ 5,000 年前の離水時までに海の浸食を受け，海岸線に沿うように浸食を受けた。肝属郡東串良町～志布志市に至ってこの時に形成された海食崖を見ることができる。約 5,700 年～ 5,500 年前には，串良川下流域に河川堆積による大塚砂州が形成され，砂州の背後は閉塞を受け，広大な湿地が現れ，後に泥炭層を形成することになる。約 5,500 年～ 4,500 年前には横瀬砂州が形成され，同じく砂州の後背に湿地が形成された。永吉台地と仮宿台地間の低湿地には広域に泥炭層が厚く堆積しており，現在も非常に脆弱な地盤となっている。

横瀬砂州成立後も断続的に志布志湾岸に砂州が形成されていった。さらにそれぞれの砂州形成時期後間もなく海浜からの飛砂による砂の再堆積があり，砂丘を形成されていった。約 1,700 年前以降，砂丘が急速に発達し，志布志湾岸には大規模な砂丘帯が形成された。最も発達しているところでは，本町益丸で標高約 27 ｍの高さに及んでいる。

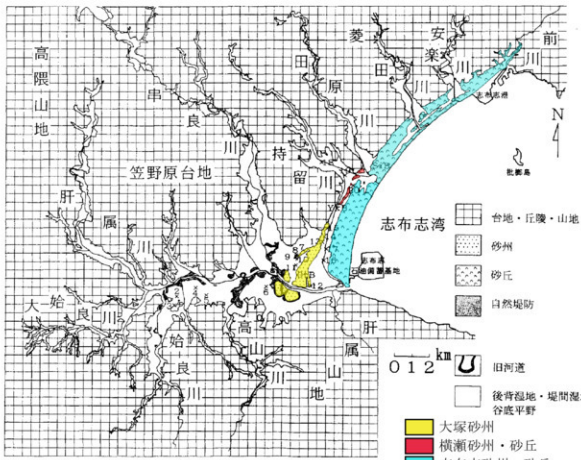
横瀬古墳は南北に延びる横瀬砂州・砂丘の尾根に沿って形成されている。横瀬古墳の西側には汐入川が南流し，肝属郡東串良町柏原に注いでいる。現在の汐入川は川幅も狭く，水量も多くないが，かつては現在より川幅もあり，仮宿台地及び横瀬砂州と永吉台地の間を蛇行しながら南流していた。かつ天井川であったために度々氾濫を起こしていた。昭和初期に河川改修が行われ，仮宿台地と永吉台地の間の低地の川底の深い新たな河川流路を造り，現在の持留川ができた。そのため，持留川が仮宿台地と永吉台地を流れる主要河川となっている。

かつての汐入川は，現在の場所よりも横瀬砂州に沿うように流れていたようで，文政７年（1824 年）描かれたとされている古地図や明治 35 年の地形図ではその様相が示されている。現在ではその流路は水路となっており，耕作地よりも高いところを流れているところは当時の名残を示しているようにも思われる。

第１図　横瀬古墳周辺地形図

※写真は Google Earth から転用

第２図　文政７年（1824 年）の横瀬古墳周辺地形図



第３図　志布志湾岸における砂州・砂丘分布図（永迫 1998 を一部改変）

第２節　歴史的環境

大崎町における遺跡の分布は，主に田原川，持留川，菱田川，大鳥川を臨む台地の縁辺部に沿って分布している。現在も東九州自動車道建設に伴う発掘調査が行われており，次第に本町の歴史を知る上で重要な資料が得られつつある。

１．旧石器時代

大崎町では旧石器時代の遺跡について記されている報告書はないが，東九州自動車道建設に伴う天神段遺跡の発掘調査で石器群が確認されている。

２．縄文時代

過去に，野方地区山間部などで耕作地から出土した縄文時代後期の土器が採集されたものしか資料がなかったが，近年の発掘調査件数の増加に伴い，縄文時代の遺構・遺物が確認されるようになった。平成 11 年に県営中山間地域総合整備事業の農道整備に伴い発掘調査を行った立山Ｂ遺跡は，本町北部の山間部に立地する。遺構は確認されなかったものの，晩期の黒川式土器を中心として縄文時代の遺物が出土した。

平成 11 年に県道黒石線改良工事に伴う二子塚Ａ遺跡の発掘調査では吉田式，石坂式，桑ノ丸式など早期の土器が出土し，集石遺構も確認された。

大隅グリーンロード建設に伴い発掘調査を行った下堀遺跡では前平式，石坂式，下剥峯式，手向山式，平栫式などの早期の土器が出土するとともに，13 基の集石遺構が発見された。また，遺構は確認されていないが指宿式を中心とする後期の土器も出土した。

下堀遺跡と同事業で発掘調査を行った細山田段遺跡では後期土器としての丸尾式，北久根式，西平式，御領式が，晩期では黒川式土器が出土し，それに伴う柱穴群と土坑２基が確認された。これまで本町の発掘調査で報告されている。縄文時代の成果は以上のとおりであるが，東九州自動車道建設に伴う発掘調査では縄文時代の遺構・遺物が多く確認されており，今後の新たな成果が期待される。

３．弥生時代

平成 11 年に民間の砂採に伴い調査を行った沢目遺跡は，本町南部志布志湾岸の「くにの松原」内に所在する。砂丘に埋没した集落遺跡である。出土遺物として入来Ⅰ・Ⅱ式から山ノ口Ⅰ・Ⅱ式の時期に相当する弥生時代中期のものと，中津野式の時期を中心とする弥生時代終末－古墳時代初頭の土器が出土している。その他軽石製の加工品や，鉄製品も確認された。

在地では見られない形式の土器も多く，山ノ口式土器と共伴して出土した須玖式土器や，布留式土器を模倣した土師器や，東九州地域から瀬戸内地域の影響を受けた土器も出土しており，広域的な交流の痕跡を窺わせる。また，沢目遺跡は約5,000年前から4,000年前に形成された砂丘と古墳時代以降に形成された砂丘との間のクロスナ層を包含層としており，この2時期の砂丘の形成時期を示す手がかりとなった。

先述した下堀遺跡でも中期の遺構・遺物が確認された。山ノ口Ⅱ式を中心とする集落跡で，13基の住居跡のほか，大型住居跡が2基発見された。また，5基の土坑を伴う掘立柱建物跡が計画的な配列で出土している。

平成19年に調査を行った麦田下遺跡は，弥生時代後期初頭に位置付けられる在地系土器が発見された。高付式土器の初段階と考えられる。その他西南四国型土器がまとまって出土しており，西南四国との関連を裏付ける貴重な成果を得ている。また，下堀遺跡・麦田下遺跡の立地する仮宿台地の持留川を挟んだ対岸の永吉台地に立地する高久田A遺跡では，平成21年度の調査で弥生時代後期～終末期に相当する集落跡が確認された。

現在のところ本町北部では弥生時代の遺跡についてまとまった成果はないが，立山B遺跡でも山ノ口式土器が出土している例があることや，分布調査，確認調査，工事立会でも弥生期の遺物が確認されていることから，北部台地及び山間部における弥生時代の集落が形成されている可能性は充分にある。

4．古墳時代

本町の古墳時代の遺構として中心的存在であるのは，横瀬古墳である。横瀬砂州上の砂丘帯を利用して5世紀半ばに構築された九州でも有数の大型の前方後円墳で，昭和18年に国の指定史跡となった。

昭和53～54年に行われた鹿児島県教育委員会文化財課の範囲確認調査で墳丘を廻る周溝の存在が明らかとなっている。周溝幅は約12 mへ約25 mと推定されている。平成2年に行われた鹿児島大学と琉球大学の墳丘測量調査によれば，墳長132 m，前方部幅72 m，前方部長68 m，後円部径64 m，くびれ部幅48 mを測ると報告されている。

平成22年～23年に大崎町教育委員会が行った範囲確認調査では，これまで確認されていた周溝の北側と南側に外側にさらに廻らされている幅約4 mの周溝の存在が明らかとなった。

鹿児島県教育委員会の範囲確認調査では周溝の埋土から大阪陶邑産の須恵器が出土している。また墳丘では円筒埴輪，形象埴輪片が採集されている。

明治35年に盗掘を受けている。盗掘者の証言により腐食した直刀や甲冑，勾玉類が出土し，石室内は朱塗りであったと記録されている。

仮宿台地南端部に位置する神領遺跡群には神領古墳群が立地する。前方後円墳4基（6号墳，10号墳，11号墳，13号墳。うち6号墳は宅地造成のため消失。11号墳は国鉄建設により半壊），円墳9基（1～5号墳，7～9号墳，12号墳。7号墳は平坦化。8・9号，12号については墳丘の形状が不明）が存在する。また古墳群域には地下式横穴墓も点在し，過去に調査が行われたものだけで8基は確認されている。13号墳を除いて，ほとんどが田原川を臨む台地の縁辺部に点在する。

6号墳では彷製獣帯鏡が出土し，宅地造成に伴い河口貞徳氏らによって昭和43年になされた調査では，石棺は花崗岩製の板石6枚を組み合わせたものと言われている。また，地下式横穴墓では，鉄剣，イモガイ製貝輪，内向花文鏡が出土している。

平成18年～20年にかけて鹿児島大学総合研究博物館による神領10号墳の発掘調査が行われた。この調査で神領10号墳が全長約50 mの前方後円墳であることが判明し，周溝に4基の地下式横穴墓が存在することが分かった。周溝から盾持人埴輪が発見された。またくびれ部では市場南組窯産の初期須恵器を大量に含む祭祀土器群が出土した。

埋葬施設の調査では，入戸火砕流の溶結凝灰岩製の刳抜式舟形石棺が確認された。この石棺には6ヶ所の縄掛け突起があり，突起を含む最大長は277 cm，最大幅128 cmに及ぶ。石棺内は盗掘によりほとんどの副葬品は失われていたが，棺外に鉄剣，短甲の一部と，鉄鏃束などが発見された。これらの調査の成果から神領10号墳の築造時期は5世紀前半と推定されている。

同じ仮宿台地内の古墳群では，田中古墳群が存在する。3基の円墳が確認されているが，これについては未調査である。これらも田原川を臨む台地の縁辺部に立地している。仮宿台地内で確認されている古墳時代の墓域としては他に下堀遺跡がある。平成14年の大隅グリーンロード建設に伴う発掘調査では，地下式横穴墓が7基確認されている。副葬品として鉄剣，異形鉄器，鉄鏃が出土し，墓周辺から大阪陶邑産の須恵器が確認された。

飯隈台地内には飯隈古墳群が存在する。神領古墳群とは異なり，台地の縁辺部ではなく，主に台地内部の小高い丘の頂部または微高地に点在するのが特徴である。1～3号墳は台地の平坦部もしくは微高地に立地する。4・5号と8・9号は『大崎名勝誌』で記すところの「鷲塚山」に立地する。鷲塚山とは，南北約500 mにわたって延びる台地上の丘陵で，古墳はその尾根に点在する。また6・7号は鷲塚山より北西へ約400 m離れた丘陵の頂上に立地する。

3号・4号・8号・9号は全壊もしくは半壊の状態である。8号は前方後円墳であったが，「戦時中に分かれ円墳化」と大崎町文化財要覧に記されているが，鷲塚山が半分造成をうけたため，8号墳の本来の姿をうかがい知ることはできない。

また永吉台地南端部の東串良町境近くには鷲塚地下式

横穴墓が存在する。昭和59年に町道拡幅で発見され，河口貞徳氏によって調査された。

古墳時代の調査で集落跡の調査を行った例は多くないが，二子塚A遺跡では古墳時代の住居跡が確認されている。

5．古代

本町において古代の様相をうかがい知る遺構・遺物が確認された発掘調査の報告書は現在無いが，妻萬神社（現都萬神社）が古代日向国の5郡（臼杵郡，児湯郡，那珂郡，宮崎郡，諸県郡）ごとに設けられたことや，743年には聖武天皇によって勅願所とされたと伝えられている飯隈山三権現社が存在していたことなどから，古代期にも主要な地域であったと推測され，今後の調査成果が期待される。

6．中世～近世

中世の山城として，神領遺跡群に所在する井出田城跡，龍相城跡，旧大崎城がある。文明13年（1488年）に，肝付本家を離反した肝付兼光によって龍相城より北側に中心を移し，大崎城（後に新に築城される大崎城に対して「旧大崎城」と呼ぶ。）を構えた。井出田城跡，龍相城跡の築造時期は不明であるが，鎌倉期に構築されたものと推測されている。南北朝時代に龍相城は，南朝方の楠井氏が拠った城で，後述する胡摩ヶ崎城の南方を固めていたと伝えられている。

肝付氏が島津氏に降伏した後の，天正5年（1576年）大崎城は島津方の武将の支配を受けるが，翌年に現在の大崎小学校北側に拠点を移し，新に大崎城を築城した。ここは近世以降大崎郷の地頭仮屋となった。

仮宿台地の西側に南に突き出た舌状台地がある。この舌状台地の一部が胡摩ヶ崎城で，鎌倉期築城と推定している。南北朝時代には，楠井頼重が拠った城であり，頼重は北朝方の武将に攻め込まれ，この地で命を落としたと伝えられている。

胡摩ヶ崎城西方の持留川対岸にも，永吉台地から突き出た舌状台地があって，ここには野副城があった。現在は大半が現代のシラス採取で破壊されている。ここは胡摩ヶ崎城の西方を固める城であったと考えられる。本町の菱田地区にも菱田川を見下ろす台地の縁片部に立地する天守城は胡摩ヶ崎城の東方の防御を担っていたと考えられている。胡摩ヶ崎城の北方を固めていたと言われている天ヶ城は関別府にあったと伝えられる。

永吉台地南部の横瀬古墳を臨む舌状台地は，榕谷城があったと推定される場所である。荘園の弁済使であった肝付氏に対して，鎌倉期に新に配置された幕府の地頭　名越氏が築城した城と考えられている。

金丸城は田原川上流域の仮宿台地縁辺部，志布志市有明町瀬に立地する。志布志市有明町蓬原にある救仁郷氏の居城である蓬原城と関連していたと言われている城で，延文4年（1359年）に蓬原城が島津氏久に攻められ落城した時に，この城も落城したと言われている。平成12年に大隅グリーンロード建設に伴う金丸城跡の調査が行われた。台地で環状に配列する掘立柱建物跡が確認された。遺物はいずれも近世の陶磁器類が出土したのみで，城の時期に相当する遺物が無かったため，掘立柱建物跡が城に関する施設かどうかは判断できなかった。その他，近世墓が出土している。また，台地麓は田原川より小高い地形を呈しており，ここでは焼土を伴う土坑，貯水に用いられたと推測される土坑，多数の柱穴が出土した。焼土を伴う土坑は「カマド」に類する形状を呈している。この土坑が連なる場所の近くに軽石や破砕した土坑の炉部分の集積が認められ，その中に鉄滓や羽口が出土したことで，鉄製産関連の遺構も想定したが，焼土を伴う土坑そのものが鉄を扱っている痕跡は見つからなかった。

現在も東九州自動車道建設に伴う発掘調査が行われており，次第に本町の歴史を知る上で重要な資料が得られつつある。

（参考文献）
・大崎町教育委員会（1989年）『神領地下式横穴群5号』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（1）
・大崎町教育委員会（1992）『神領地下式横穴群6号』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（2）
・大崎町教育委員会（2001）『立山B遺跡』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（3）
・大崎町教育委員会（2004）『金丸城跡』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（4）
・大崎町教育委員会（2005）『下堀遺跡　大崎細山田段遺跡』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（5）
・大崎町教育委員会（2006）『美堂A遺跡』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（6）
・大崎町教育委員会（2014）『麦田下遺跡』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（7）
・大崎町教育委員会（2015）『高久田A遺跡』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（8）
・鹿児島県立埋蔵文化財センター（2003）『後迫遺跡』埋蔵文化財センター発掘調査報告書（66）
・鹿児島県立埋蔵文化財センター（2004）『二子塚A遺跡』埋蔵文化財センター発掘調査報告書（84）
・鹿児島大学総合研究博物館（2007）『鹿児島大学総合研究博物館News Letter　No.15』
・鹿児島大学総合研究博物館（2008）『鹿児島大学総合研究博物館News Letter　No.19』
・鹿児島大学総合研究博物館（2009）『鹿児島大学総合研究博物館News Letter　No.22』
・救仁郷断二（1951）『大崎町史』（株）ぺりかん社
・永道敏郎・奥野充・森脇広・新井房夫・中村俊介（1998年）『肝属平野の形成史－テフラとAMS 14 C年代による』
・中村耕治他（1990）「大隅地方の古墳調査－墳丘測量を中心として（1）曽於郡大崎町　横瀬古墳」『鹿児島考古』第23号　鹿児島県考古学会

第４図　横瀬古墳及び周辺遺跡位置図

第１表　周辺遺跡地名表

No.	遺跡名	所在地		地形	主な時代	遺物・遺構	備考
1	稲荷堀A	菱田	稲荷堀	台地	弥生・古墳		H25 東九州自動車道建設に伴う確認調査。遺構・遺物無
2	稲荷堀B	菱田	稲荷堀ほか	台地	古代		H11 農政分布調査。
3	牛ヶ迫	神領	牛ヶ迫・家戸原	台地	弥生・古墳		H11 農政分布調査。
4	飯隈遺跡群	神領		台地	弥・古墳・中世	飯隈古墳群 円墳９基（1～９号 地下式横穴墓群 飯隈鷲塚地区１～22 号地下式横穴墓群	１号一部宅地で削られる。3・4 号畑地造成で大半消失。5・8・9 号鷲塚山山頂にあり。8・9 号シラス採取で半壊。 S37 耕地整理で４基調査。２基舟形軽石製組合石棺、人骨、直刀、刀子出土。 H22・23 年鷲塚地区の確認調査（1～19 号）、H27, 20 ～ 22 号発掘調査。刀子・剣・人骨・貝釧出土。
5	高尾B	神領	高尾	台地	古墳		H8 年農政分布調査。
6	高尾A	神領・菱田	高尾・馬見岡	台地	縄文（後）		「資料科学研究所報告」49 号。H25 県営農総事業農道整備に伴い確認調査。遺構・遺物無し。
7	大園・濱牧・蓼池	益丸・神領	大園・濱牧・蓼池	台地	弥生・古墳・平安	成川式土器・住居跡１	H25 県営畑総事業農道整備工事立会いで、住居跡１基調査。
8	沢目	益丸	松原	砂丘	縄文・弥生・古墳初頭	人来Ⅰ・Ⅱ式土器・山ノ口Ⅰ・Ⅱ式土器・中津野式土器・須玖式土器・集落跡	H11 砂採取事業に伴い発掘調査。
9	田原B	益丸	川路	台地	古墳		
10	王子脇	益丸	王子脇・川路	台地	古墳		H18 農政分布調査。
11	別府下	益丸・神領	別府下・桶渡	沖積地	古墳	土師器片	H17 農政分布調査。H18 県営経営体事業に伴い、確認調査。
12	平良宇都B	井俣	平良宇都	沖積地	弥生（前・中）、古墳		H17 農政分布調査。H18 県営経営体事業に伴い、確認調査。
13	平良上C	井俣	平良上	台地	弥生・古墳	集石遺構・住居跡等	H25 ～ 26 東九州自動車道建設に伴い発掘調査。
14	平良宇都A	井俣	平良宇都・平良上	沖積地	古墳		H17 農政分布調査。H18 県営経営体事業に伴い、確認調査。
15	平良上A	井俣	平良上・平田	台地	縄文・古墳		
16	平良上B	井俣	平良上	台地	古墳		
17	井俣和田	井俣	和田	沖積地	古墳	成川式土器	H17 農政分布調査。H18 県営経営体事業に伴い、確認調査。
18	井俣牧	井俣	牧	台地	弥生・古墳	土器	H11 農政分布調査。
19	金丸城跡	井俣	小牧・金丸	台地・沖積地	中世	縄（早）・古墳・古代・中世・近世の土器・陶磁器類　焼土を伴う土坑・柱穴群等。	大隅グリーンロード建設に伴い H11 ～ 12 に本調査。
20	干浅	井俣	干浅	台地	弥生・古墳		
21	堂園堀	井俣	堂園堀	台地	弥生・古墳		
22	宮脇	井俣	宮脇	台地	古墳・古代		
23	坂上	井俣	坂上	台地	弥生・古墳		
24	柿木	井俣	柿木	台地	弥生・古墳		
25	田中古墳群	井俣・神領	田中・堂地	台地	古墳	円墳３基	
26	田原A	神領	田原	沖積地	弥生（中・後）		
27	神領遺跡群	神領・横瀬		台地	弥・古墳・中世	神領古墳群 円墳９基（1 ～ 5, 7 ～ 9, 12 号）、前方後円墳４基（6・10・11・13 号） 地下式横穴墓群 井出田城跡 龍相城跡 旧大崎城跡	６号は宅地造成で消失。10 号は H18 ～ 20 に鹿児島大学総合研究博物館発掘調査。11 号は国鉄のために半壊。 これまでに８基調査。 文明初期肝付兼光築城。
28	穂園	横瀬	穂園	沖積地			旧「横瀬遺跡」
29	栗之峰A	横瀬	溝下	沖積地	弥（中）		旧「栗之峰遺跡」
30	栗之峰B	横瀬	栗之峰・宇田貫	砂丘	古墳		旧「横瀬遺跡」
31	横瀬古墳	横瀬	エサイ町	砂丘	古墳	円筒埴輪・形象埴輪・大阪陶邑産須恵器など	S18 国指定。 S52・53 鹿児島県教育委員会周濠確認。 H22・23 大崎町教育委員会外濠確認。
32	大塚	横瀬	大丸	砂丘	弥生・歴史		
33	浜田	横瀬	浜田	砂丘	古墳		
34	鷲塚地下式横穴墓群	永吉	小牧	台地	古墳	人骨・刀子	S59, 2, 25 町指定
35	堂地迫	永吉	堂地迫	台地	古墳・中世		
36	京ノ峰	永吉	京ノ峰	台地	縄文・弥生・古墳	山ノ口式土器	H14 町道拡張のため工事立会。旧「桜迫遺跡」
37	栫谷城跡	永吉	枝迫	台地・沖積地	弥（中）・古墳・中世		鎌倉期に大隅守護式名越氏築城か？
38	大崎城跡	仮宿	城内ほか	台地	中世末・近世		
39	胡摩ヶ崎城跡	仮宿	古城	台地	中世（室町）		楡井氏の城
40	美堂B	仮宿	胡摩	台地	古墳		
41	美堂A	仮宿	美堂	台地	古墳・中世・近世	成川式土器。古道	大崎中央農道建設に伴い H14 本調査。

第３章　発掘調査の方法

第１節　発掘調査の記録方法

１．トレンチの設定（第５図）

確認調査の時期は，早期水稲の収穫後の８月下旬以降から実施し，二期作開始の９月下旬までの約一ヶ月実施した。

トレンチは，調査期間中に二期作を開始した場合や，あるいは調査期間の延長の場合に，調査中でも二期作の作付が可能な範囲を確保するため，耕作地の端に設定した。また，耕作地が水田であるため耕作基盤の損傷を最小限にするため，平面プランで遺構を検出した後，サブトレンチを設定し，下層の確認を行った。

平成 22 年度は，ソイルマーク，クロップマークでは外濠の範囲が特定できない場所を中心にトレンチを設定した（１～３T）。平成 23 年度は平成 22 年度に実施した地中レーダー探査の結果を参考にして，外濠の可能性が想定されている範囲を選定してトレンチを設定した（４，８T）。５T は１T で確認されたプランを詳細に把握するため，１T を東側に延長させたトレンチである。また外濠の確認だけでなく，墳丘東側の築造時の旧地形を観察するため，後円部から東方向に長くトレンチを設定した（６，７T）。

２．発掘作業

耕作土および旧表土と判断できる範囲は重機で剥ぎ取り，その後，人力による遺構精査を行った。平面プランが検出できたところは，検出写真撮影後に埋土の掘り下げをおこなったが，平面プランが不明瞭なところはサブトレンチを設定して下層確認を行った。また耕作地が水田である場所は，耕作基盤の損傷を最小限にするため，サブトレンチで遺構を確認した後もサブトレンチの掘り下げを行った。

第５図　調査前の外濠推定範囲

３．発掘調査記録

各トレンチについては，土層の断面図を作成した。遺構を伴うトレンチについてはトレンチの平面図を作成した。土層断面及び遺構平面図については１/20 スケールで作成した。

調査用の基準杭は，各トレンチから見渡せる墳丘裾部及びその周辺で，後々耕作等に影響のない箇所に任意で設定した。これらの杭には，横瀬古墳から東へ約 180 m のところにある町道及び大丸保育園隣接町有地に据えてある基準点（H174-29, K0U. 1, H173-4）からレベル移動をした。なお，３つの基準点は世界測地系による公共座標を与えられている。平成 27 年度に基準点からトータルステーションを用いて各調査基準杭に公共座標を与えた。なお，基準点 H174-29, K0U. 1, H173-4 及びこの３つの基準点から移動させた基準点 a, b の位置と公共座標は写真３のとおりである。調査の記録については，実測図のほか一眼レフデジタルカメラのほかフィルムカメラでモノクロおよびリバーサル写真で撮影を行った。

平成 27 年度に，横瀬古墳周辺の地形平面図を作成した。基準点は町道に据えてある基準点を基に，横瀬古墳周辺の耕作地・農道等を含めて測量をした。

４．地中レーダー探査

平成 22 年度の確認調査で，想定していたよりも外濠の検出が困難であることが判明したため，平成 23 年度の第２次確認調査の基礎資料を得るために地中レーダー探査を実施した。

地中レーダー探査は１日のみ実施可能であったため，横瀬古墳周辺をなるべく広い範囲で探査を行うことにした。そのため，探査は農道，畦道，耕作地と耕作地の間の土手などに側線を設定して実施をした。側線設定については第６章にて述べる。

写真２　発掘調査風景

写真３　調査基準点の位置　※写真はGoogle Earthから転用

写真４　地中レーダー探査実施風景

写真５　土壌サンプリング実施風景

５．土壌サンプリング調査

確認調査で外濠の範囲が不明瞭な箇所で，トレンチの設定ができなかった箇所に土壌サンプラーを用いて土壌サンプリングを行った。土壌サンプリングのサンプリング箇所については第７章に述べる。

サンプリングされた柱状の土壌は，鹿児島大学の永迫俊郎氏の指導を得ながら，現地で分層し，堆積状況を記録した。

４．墳丘面滑落に伴う記録

平成 27 年４月 30 日の，大隅半島南部を襲った短時間の局地的集中豪雨で横瀬古墳後円部西側の墳丘面の一部が滑落した。

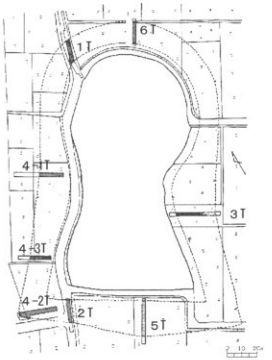
これに伴い，復旧作業の一環で露になった墳丘の断面を実測し，墳丘の構築されている状況の記録を行った。写真は一眼レフデジタルカメラで撮影を行い，土層断面は１/20 の実測図面を作成した。また滑落した範囲を測量し，公共座標に反映させた。

第２節　整理作業及び報告書における報告の方法

各トレンチで出土した遺物については原寸実測を行い，製図用ペンでトレースを行った。報告書においては，墳輪，土器片については 1/3 で，陶磁器類については 1/2 で表示した。

トレンチについては，1/20 原図を製図用ペンを用いてトレースを行い，報告書では 1/60 のスケールで報告することを基本とした。ただし，各トレンチは比較的長いため，１つのトレンチを分割する形で表示されている。また，平成 22，23 年度の確認トレンチで，周堤，外濠など細かな土層観察が必要な箇所は別途 1/40 スケールで表示している。

本報告書では，平成 22，23 年度の確認調査の成果に加え，昭和 52，53 年度の確認調査についても成果をまとめ，考察を加えることにした。そのため本報告書では，報告の便宜上，各調査時に用いたトレンチ名ではなく，昭和 52，53 年の確認調査から，平成 22，23 年の確認調査に至るまでのトレンチを連番で表記することにした。また報告書におけるトレンチ番号は墳丘北側トレンチを起点に時計回りに順に充てている。トレンチ名の読み替えについての詳細は，第６図～第８図及び第２表に示すとおりである。



第６図　昭和 52，53 年の横瀬古墳範囲確認トレンチ配置図
※鹿児島県埋蔵文化財報告書（29）『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報』P60 第 38 図を改編

第７図　平成 22，23 年の横瀬古墳範囲確認トレンチ配置図

第８図　本報告書におけるトレンチ番号

第２表　報告書掲載と調査時のトレンチ名対応表

報告書トレンチNo.	調査時期	調査時トレンチNo.	備考
1T	S52，53	6T	『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報』では「8T」
2T	S52，53	3T	『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報』では「3T」
3T	S52，53	5T	『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報』では「7T」
4T	S52，53	2T	『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報』では「2T」
5T	S52，53	4-2T	『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報』では「6T」
6T	S52，53	4-3T	『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報』では「5T」
7T	S52，53	4-1T	『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報』では「4T」
8T	S52，53	1T	『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報』では「1T」
9T	H23	4T	
10T	H22，23	1T，5T	5Tは1Tの延長のため，同一トレンチとする
11T	H23	6T	
12T	H23	7T	
13T	H23	8T	
14T	H22	3T	
15T	H22	2T	

第４章　層序

第２章で述べたとおり，横瀬古墳は横瀬砂州及び古砂丘上に立地している。Ⅸ層以下の砂丘層についてはいずれのトレンチでも相対的に基本的な層序を示していた。しかし，砂丘を形成している砂質層の上層は，古墳築造時あろいはそれ以降の削平を受けていたり，また低い場所になるとその場所の地理的環境により土層の堆積状況が異なる。そのため以下の基本層序のうち，砂丘を形成する砂質層の上層は，主に９～13 トレンチを参考に作成した。

なお，砂丘の層位は外濠の壁面で分層を行っている。Ⅴ層は平安時代の 874 年に開聞岳噴火による火山灰層と判断し，地層及び遺構の時期をある程度特定する鍵となっている。概ね遺構の埋土内で確認されることが多く，遺構埋土以外の堆積層として確認できたのは 13 トレンチだけである。そのため，Ⅴ層の上層及び下層については正確なところは判断が困難なところである。例えばⅦ・Ⅷ層は９トレンチ周堤部だけに確認されている層であるが，直接にⅤ層下層で確認できているわけではない。Ⅶ・Ⅷ層が①Ⅸ層上層に存在する。②外濠が掘り込まれている層である。③外濠の埋土にⅤ層が確認される。といった点から，Ⅴ層より古く，Ⅸ層より新しい層と判断した。ちなみに 13 トレンチでは，外濠の外側にⅤ層が明瞭に堆積するが，ここではⅤ層下はⅨ層となっており，Ⅶ・Ⅷ層は確認されない。

Ⅲ層は黄褐色の軽石粒を含む層であるが，同じような軽石を含む層にⅥ層が存在する。13 トレンチではⅤ層の上下に存在するので，Ⅲ層とⅥ層には時期差があることは明瞭である。可能性として削平によってⅥ層が顕になった時期に，新たに表土として拡散したのがⅢ層の可能性もある。そのためⅠ・Ⅱ層直下がⅢ層だけでなく，Ⅷ層である可能性もあるため，判断が難しい。

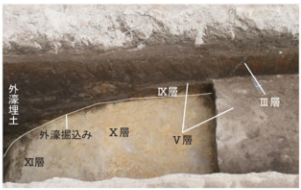


写真６　13T 外濠南側掘込み部分の土層堆積状況

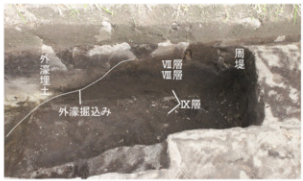


写真７　９T 外濠南側掘込み部分の土層堆積状況

第３表　基本土層一覧表

層位	色調		備考
Ⅰ層	黒褐色土層	Hue10YR3/2	現在の耕作土。
Ⅱ層	褐灰色土層	Hue7.5YR4/1	旧耕作土。酸化鉄の沈着がある。
Ⅲ層	黄褐色軽石混黒褐色砂質土層	Hue10YR3/1	軽石はⅥ層のものと酷似する。Ⅵ層が耕作等で拡散したものか？
Ⅳ層	黒色土層	Hue7.5YR2/1	酸化鉄の沈着がある。
Ⅴ層	灰褐色火山灰層	Hue7.5YR6/2	非常に硬質の火山灰層。874 年の開聞岳噴火による噴出物（紫コラ）である。
Ⅵ層	黄褐色軽石混灰褐色砂質土層	Hue10YR3/1	13 トレンチでは黒褐色砂質土。
Ⅶ層	暗褐色土層	Hue10YR3/4	９トレンチ周堤部でのみ確認。
Ⅷ層	黒色粘質土層	Hue10YR2/1	９トレンチ周堤部でのみ確認。
Ⅸ層	黒褐色砂質層	Hue7.5YR3/1	しまりのある砂層。粒子は均一であり，飛砂による砂丘を形成している層。
Ⅹ層	明黄褐色砂層	Hue7.5YR5/8	しまりのある砂層。粒子は均一であり，飛砂による砂丘を形成している層。明黄褐色砂・灰白色砂が斑状に含まれる。
Ⅺ層	暗灰黄砂層	Hue2.5YR4/2	しまりのある砂層。粒子は均一であり，飛砂による砂丘を形成している層。
Ⅻ層	灰白色砂層	Hue2.5YR8/2	しまりのある砂層。粒子は均一であり，飛砂による砂丘を形成している層。下部は水分を多く含む。

第１節　昭和52，53年度確認調査の概要

昭和52，53年の調査では墳丘主軸の南北に各１ヶ所，墳丘東側に１ヶ所，墳丘西側に３ヶ所，ほか墳丘北側と南側の町道上に２ヶ所の計８ヶ所にトレンチを設定している。

当時の図面から各トレンチは仮の基準杭をもとに高さをあたっていることが読み取れるが，基準杭の標高が記載されていないため，各トレンチの断面図における正確な標高値は不明である。

１．１トレンチの概要（第９・10図）

１トレンチは墳丘北側に設定された幅1.5ｍ，長さ19ｍのトレンチである。１/50で実測された平面図によれば，検出面上場幅約12ｍ，下端幅7.8ｍの遺構が確認されている。土層断面図の記録は無かったが，平面図に記されている標高から遺構の断面図を復元すると，検出面から底面までの深さが約1.5ｍを測る。周濠と考えられる。北側の墳端は現在の墳端よりも北側に7.5～８ｍ拡幅されることになる。

第９図　１．２トレンチ配置図

第10図　１トレンチ平面図・周濠断面図

2．2トレンチの概要（第９・11・12図）

２トレンチは前方部の東側に設定された幅１m，長さ29 mのトレンチである。現在の墳端から東へ約１.５m の地点から掘り込みが確認された。周濠と考えられる。トレンチ調査の原図では，墳丘側周濠の平面プランは検出しているが，トレンチ東側は上面プランが検出がされておらず，検出面での現存幅は不明である。底面の幅は調査時の1/200 スケールの平面図から約20 mを測るが，トレンチ東側の土層断面図から，どの部分を周堤側の立ち上がりと判断したのかは不明である。平面図で示した周堤壁面の立ち上がりについては検討が必要である。

周濠の墳丘側壁面は，なだらかな傾斜を呈している。断面図では周濠の底面が明瞭に記されていないが，調査時の 1/200 スケールの平面図には現在の墳端から４～４.５m東側に周濠の下端が記されているところから，２トレンチのところでは本来の墳端が現在の墳端よりも東側へ４～４.５m広がると言える。周濠の深さは，検出面から底面と想定されているところで約70 cmを測る。

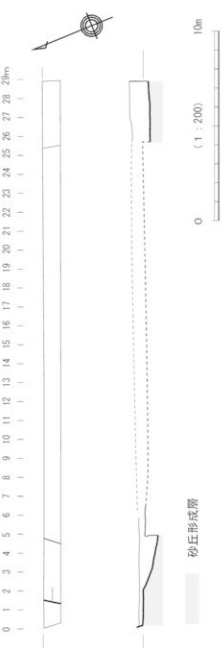
トレンチ北面の土層断面図はトレンチ西側（墳丘側）とトレンチ東側だけの記録が残されていた。墳丘側の壁面に沿って流れ込んだように黒色土混黄褐色砂層４が掘り込み面を覆っていた。砂層４は可能性としてⅨ層に相当する可能性も考えられるが，黒色土が混ざっているという点や，堆積状況からも流れ込んだものである。ちなみにこの砂層には酸化鉄も含まれていた。土層断面図の原図には，上記黒色土混黄褐色砂層４，及び底面の黒色粘質土層５を覆うように堆積している砂を多く含む黒褐色土層３について「黒褐色砂混ざり砂の量多し」と記載されている。堆積状況や，層の内容から概ね流れ込んだ砂で形成されていると想像できる。砂に含まれる黒褐色砂が斑状に混ざっているのか，あるいは水性堆積のように筋状に混ざっているのかまでは記録されていない。つまり，墳丘側からの砂の流入があった可能性が高いと考えられるが，墳端部の表面が短時間に滑落した結果，堆積した土砂なのか，少しずつ墳端部が雨風によって浸食された結果，堆積した土砂なのかは不明である。

土層３が堆積した後に堆積している層は土層断面原図には「紫がかった灰色」と表記されているが，Ⅴ層の紫コラと推測できる。874 年段階では底面から約 15 cmは土砂が堆積していたことが分かる。

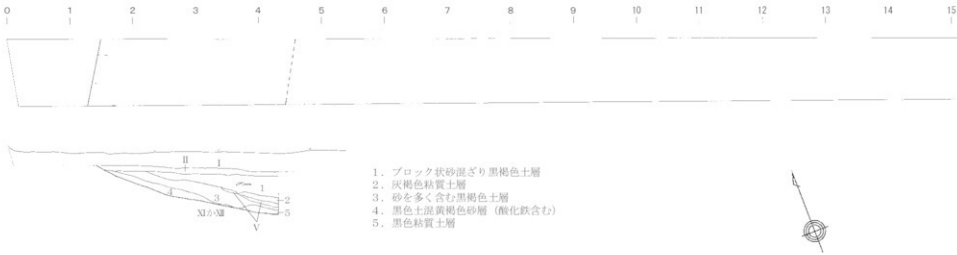
トレンチ東側は恐らく砂丘形成層上面まで掘り下げたものと考えられる。底面には粘土・砂を含んだ褐色土層12 が堆積し，その上層には黒褐色粘質土層 11 が堆積する。この層はトレンチ西側の黒色粘質土層５と連続する可能性が高いが，砂丘形成層まで掘り下げた調査は，トレンチ東西に限っており，トレンチ全体の土層堆積状況は不明であるため，正確なところは分からない。

鹿児島県教育委員会は横瀬古墳周濠の範囲を示している中で（鹿児島県教育委員会 1984 P60），このトレンチでも，周濠の東側壁面を表している。しかし，周濠は砂丘形成層を掘り下げて造られることが横瀬古墳周濠の基本的な傾向として挙げられる中で，このトレンチでは周濠東側における砂丘形成層の掘り込みが断面図では認められない。

黒褐色粘質土層 11 の上に堆積するシラス・砂・軽石を含む灰褐色土層 10 である。この層に含まれるシラスについてであるが，横瀬古墳周辺には砂丘帯であり，周辺の地形からシラスが自然に流れ込むような場所には存在しない。つまり他の場所から採取して持ち込んだものとして考える必要がある。



第 11 図　２トレンチ平面・断面概要図



第12図　2トレンチ平面図・北壁面土層断面図

3．3トレンチの概要（第13・14・15図）

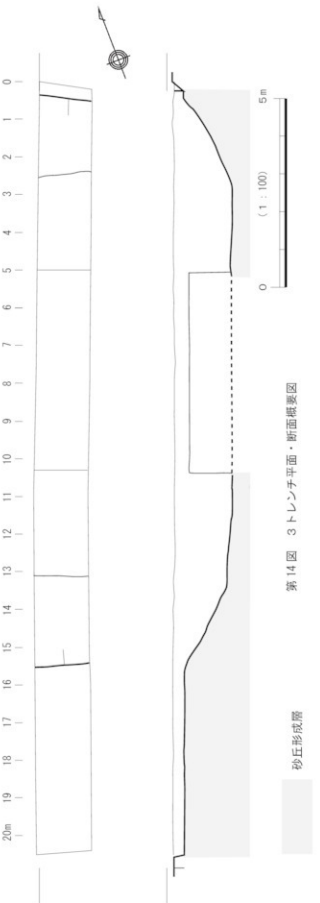
3トレンチは，墳丘南側に設定された幅1.4m，長さ20.5mのトレンチである。現在の墳端から南側へ約4mと約18mのところで掘り込みの平面プランが検出された。検出面では幅15mを測る。掘り込みの深さは検出面から約1.2mで，立ち上がりは明瞭である。周濠である。

周濠の墳丘側壁面の下端は現在の墳端から約6.5mの位置で確認されているので，本来の墳端はこの位置まで広がる。床面の幅は10.5mとなる。

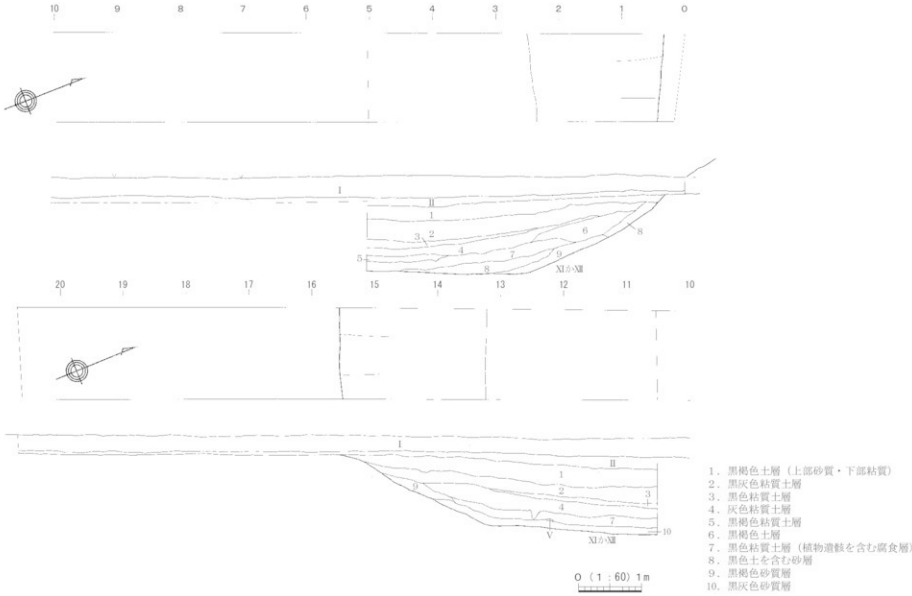
土層断面図から，床面及び壁面は10～20cmの厚さで黒褐色砂質土，黒色土を含む砂などが堆積するが，その上層は黒色粘質土層7，黒褐色粘質土層5，灰色粘質土層4など粘性のある層が継続的に堆積する。特に粘質土の最下層にある黒色粘質土層7はヨシ等の植物遺骸を含んでおり，泥炭質の層である。

粘質土は，粒子の細かいシルト質あるいはシルトよりさらに粒子のきめ細やかな砕屑物の堆積である。泥の中でもほとんど水の流れの無い池や湖などで堆積したものがシルト層，粘土層であると考えると，3トレンチ周辺の周濠内は溜池もしくは泥湿地の状態であったと推定できる。

第13図　3トレンチ配置図



第14図　3トレンチ平面・断面概要図



第 15 図　3トレンチ平面図・西壁面土層断面図

4．4トレンチの概要（第16・17図）

4トレンチは現在の前方部南西側のコーナー周辺の町道内に設定されたトレンチである。調査はトレンチを拡張しながら行っているため，L字形になっており，調査の記録ではトレンチをA，B，Cの3区間に分けている。本報告書でもこれに準じて報告する。

①A区：（第18・19図）

調査におけるA区は幅1.7ｍ，長さ17.2ｍのトレンチで4トレンチ南半分の範囲を示す。トレンチでは検出面で幅12.5ｍのプランを確認しており，これを周濠の検出プランと考えるが，床面までの確認調査を行っていないため南側だけで，北側（墳丘側）の掘り込みは検出をするまでに留めている。

A区南側に検出された周濠の土層断面図では，周濠南側の壁面は，床面から約80㎝立ち上がったところでやや屈曲している。その屈曲部分から緩やかに立ち上がっている。当時のトレンチの概略では残存する周濠の上場の幅を11.5ｍとメモしているが，恐らく屈曲部分を現存する周濠の上場として記録していると思われる。しかし，屈曲部分からさらに緩やかに立ち上がる傾斜部分まで，黒色砂層20が一連して堆積していることから，周濠の壁面は，緩やかな傾斜部分までと考えた。そのように考えると検出面から床面までの深さは約1ｍとなる。

このトレンチでも3トレンチ同様に粘質土が継続的に形成されており，かつ下層の黒褐色粘質土層19では木片を含む植物遺骸が確認されているので，この辺りの周濠も湿地か泥湿地の状態であったと推測できる。

一方墳丘側の立ち上がりについてであるが，調査は床面検出まで至っていないため，詳細は不明である。わずかに東面土層断面で周濠の掘り込みが確認できる。墳丘側周濠壁面には黒色シルト層26と黄褐色粘質土層25が堆積していることが想定される。黒色シルト層26と黄褐色粘質層25の上層に存在する灰褐色砂質層23は，墳端が削平された後に堆積している層である。

②B区（第19図）

B区はA区からさらに北側に8ｍ調査区を延長した幅80㎝のトレンチである。B区はもともと前方部の西側角の墳端部であったが，削平されている。そのため，トレンチ内に堆積する層は，削平されてから堆積している層と墳体形成層と分けて観察する必要がある。

B区の南部は四面張りの用水路がトレンチを縦断しており，それに伴う埋設時の掘削も含めると幅2ｍの範囲は損壊している。そのためA区とB区の土層堆積状況は寸断されており，それが削平後の堆積層と墳体形成層の区別を困難にさせている。

B区における上層のシラス層2は現代に持ち込まれた層である。その下層にある砂混ざりの褐色土層5及び褐色土を帯びる黒色砂質層aは墳体形成層かどうか検討してみる。検討にあたっては，A区のトレンチ北部分の土層断面図と照らし合わせて以下のとおり報告する。

まずA区では表土であるシラス層の下層にある砂・軽石混ざりの灰褐色土層4である。この層は鉄分を含む。水路埋設部を境にB区では存在しない層である。次にA区における土層4の下の層は砂を含む褐色土層5である。これがB区では表土シラス層直下に部分的に堆積する褐色砂質土層5と同一の可能性がある。そのため，この層は古墳築造時のものではないと判断する。

B区で黒色砂質層aは褐色土を帯びている層で，この層は墳体形成層の可能性がある。理由として①黒色砂質土の中に褐色土が帯びているという記載から，版築技法を用いて盛られた層である印象を受ける。②A区における灰褐色砂層23は先述のとおり，墳端が削平された後に堆積した層である。仮にB区の黒色砂質土aがこれに連続する層であれば，墳体形成層とは言えないが，色調・土質からしてもA区の灰褐色砂質層と連続しているとは言い難い。の2点が挙げられる。

B区の黒色砂質土層aの下層は，紫がかった灰色粘質土層bとなっている。3トレンチの概要でも触れたように，粘性のある層が低湿地で形成されるものと考えると，砂丘帯において，低地でない場所で粘質土が自然に形成される可能性は低いと考える。そのように考えると，この層が墳丘を造営するため持ち込んだ層と想定される。

③C区（第19図）

C区は，B区のトレンチ北端から西側に直角に4.4ｍ伸ばした幅90㎝の調査区である。B区で観察した土層の東西の堆積状況が分かるので，ここではB区で想定した内容をさらに検証したい。

調査は砂丘形成層上面まで掘り下げている。砂丘形成層上面は全体的に褐色酸化鉄が見られると記録している。X層もしくはXI層の可能性もある。

この層は墳丘側から傾斜し，やや凹んでいる。砂丘形成層と考えられる砂層の上層はB区でも述べた灰色粘質土層bが堆積する。土層bはトレンチ東端部で平坦面を持ち，トレンチ西側に向けて低く傾斜し，かつ砂丘形成層の凹みを埋めるように堆積している。この灰色粘質土層bの上層に黒色砂質土層aが堆積する。この土層aがB区で報告した褐色土を帯びた黒色砂質土層aとは連続している様相は，後世の削平を受けており不明である。しかし，ほぼ同質の層と見ていいと考える。この層は墳丘側から西側に向けて傾斜して堆積する。土層aが西側に低く傾斜する裾部分と土層bを覆うように酸化鉄を含む黄褐色砂層cが薄く堆積する。これによって砂丘面の凹みは平坦となる。

土層 a ～ c までは墳体形成層と考えられるが，判断が難しい黒色粘質土の斜面と酸化鉄を含む黄褐色砂層の上に堆積する灰褐色砂層 d である。実測図には「上層は砂層，下層はやや粘質を帯びる」と記載されている。土層 d が墳丘形成層なのか，あるいは旧道路を構築するための部分的な盛土なのかは，または自然堆積層なのかは，調査の成果では見い出せないが，検討を要する課題である。

5．5トレンチの概要（第 16・20 ～ 22 図）

5トレンチは前方部南西側に設定された幅 2 m，長さ 36 m のトレンチである。トレンチ内で，周濠の周堤側壁面が確認された。平面形から南西コーナーと判断できる。この部分に関しては幅 3．5 ～ 4 m の幅にトレンチを拡張して調査を行った。周濠の深さは検出面から約 1．2 m に及ぶ。

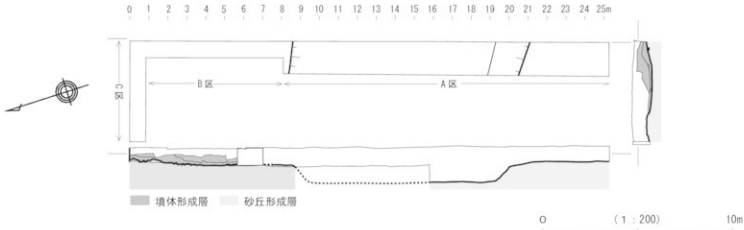
壁面掘り込みの下端にわずかに砂層 6 が堆積する。その上部に乳白色粘土質層 5 が壁面下部を覆うように堆積していた。この乳白色粘土質層 5 は人為的なものかは不明である。周濠の底面から厚さ約 30cm の厚さで，ヨシ，木片等の植物遺骸を含む黒色泥炭層 4 が堆積する。この層の堆積が周濠壁面まで及んでいる点は，築造当時に周濠内の水位を考える上で検討しなければならない。

黒色泥炭層は沼地で植物遺骸が十分分解されずに堆積して形成される。そのためこの層の形成段階は嫌気性の環境であったと考えられる。つまり黒色泥炭層の確認される範囲は水分があったと考えられる。

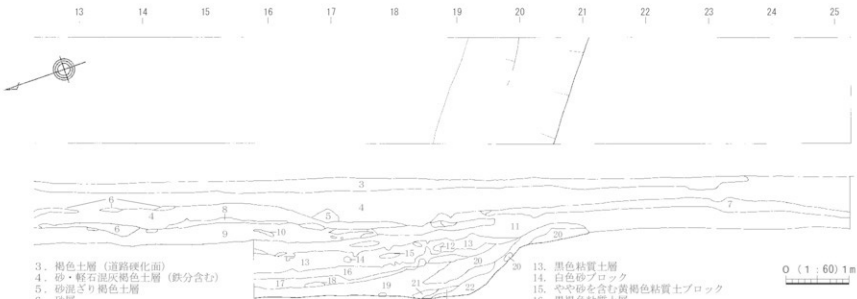
土層断面図の原図ではこの層の直上には「灰色火山灰」と記されている。これはV層の紫コラである。V層は土層 4 上に均一に堆積している。V層の上層に灰褐色粘質土層 3 が堆積する。この層が堆積する過程で，周堤側を中心に砂層 2 が堆積する。これが水の作用によるものか，飛砂によるものか，または緩徐な堆積か，急激な堆積かは不明であるが，土層断面図の状況から周堤側からの供給と思われる。

1 /50 で作成された平面図では，検出された周堤側周濠掘り込みラインから西側 10 m の箇所に，西側に向けて掘り込んでいる痕跡が記されている（第 20 図）。これに関しては平面図に記録されているだけで，どれくらいの深さで，どのような角度で掘り込まれて，どのように埋没しているのかを知る情報は残されていない。ただ，第 1 章の写真 1 に示した上空写真では，ちょうどこの部分にわずかにクロップマークが確認できるのであるが，それと関連する可能性もある。

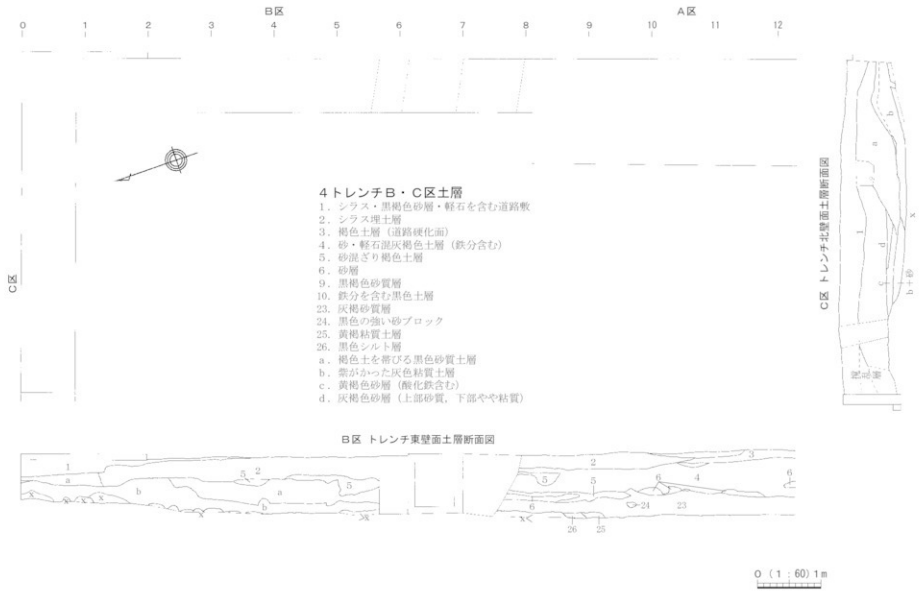
第 16 図　4．5トレンチ配置図



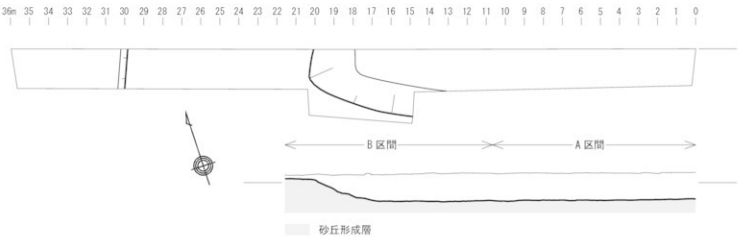
第17図　4トレンチ平面・断面概要図



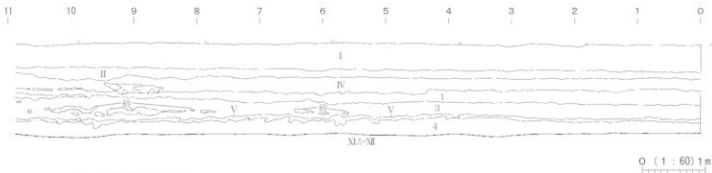
第18図　4トレンチA区平面図・東壁面土層断面図



第19図　4トレンチB・C区平面図・土層断面図

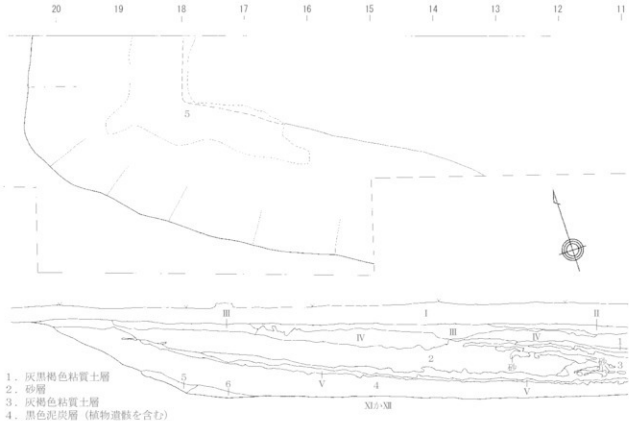


第 20 図　５トレンチ平面・断面概要図



1．灰黒褐色粘質土層
3．灰褐色粘質土層
4．黒色泥炭層（植物遺骸を含む）

第 21 図　５トレンチＡ区間北壁面土層断面図



第22図　5トレンチB区間平面図・北壁面土層断面図

6．6トレンチの概要（第23・24図）

6トレンチは前方部西側に設定された幅2m，長さ17mのトレンチである。トレンチ内で，周濠の周堤側壁面が確認された。周濠の深さは検出面から約1.2mに及ぶ。

周堤壁面下部に乳白色粘質土層7が壁面を覆うように堆積していた。この層は5トレンチで確認されているものと同様のものである。周濠の底面から厚さ約20～30cmの厚さで黒色泥炭層5が堆積していた。この黒色泥炭層形成の初期段階で，周堤壁面に砂層6が堆積している。この砂の堆積は壁面に沿うように堆積しており，壁面下部では厚さ40cm，上部で20cmであり，砂層の体積は大きい。しかし堆積層の傾斜角度が強いにも関わらず，これだけの体積の砂が底面へと堆積が及ばず，壁面に留まっている。砂の流入が周濠の底面まで至っていない原因として，周濠内に植生していたヨシなどの植物群によって底面への砂の流入が抑制されていたという想定が挙げられる。

この砂の層は，周堤壁が表層から大きく滑落したものかと考えたが，先述したように壁面下部に乳白色粘質土が覆っている状態が残っていること，乳白色粘質土に覆われている壁面の上部も断面図上はえぐれたような痕跡が認められないことから，すでに削平されていて残存していない周堤の最上部が崩れて流入した過程が1つの想定として挙げられる。ただしこの砂層6については色調や堆積状況が記されていないため，滑落による急激な堆積かは不明である。黒色泥炭層5は周堤壁面に沿って堆積する砂層6をさらに覆うように堆積しており，少なくともこの高さまで水が張った状態があったと考えられる。

黒色泥炭層5の上面には「灰色火山灰」が堆積する。V層の柴コラと考えられる。主に土層5上面の平坦面に堆積している。柴コラ堆積層上は灰褐色粘質土層4，黒褐色粘質土層3と粘性の土が連続的に堆積する。上に堆積するにしたがって，砂を含み，鉄分の沈着も見られる。

7．7トレンチの概要（第23・25～27図）

7トレンチはくびれ部西側に設定された幅2m，長さ37mのトレンチである。トレンチ内で，周濠の周堤側壁面が確認された。周濠の深さは検出面から約1.3mに及ぶ。断面図ではトレンチ東側は周濠底面の墳丘への立ち上がりが確認できる。ここを下端とすると，周濠底面幅は9mとなる。

7トレンチの周堤壁面下部にも「粘土」と記されている薄い堆積層9がある。5，6トレンチにもあった乳白色粘土層と同等のものと推測する。粘土層を覆うように薄く砂層8が堆積する。6トレンチの周堤壁面堆積砂層ほどの厚みはないが，この砂層も底面平坦部までは堆積

していない。

7トレンチでも底面から周堤壁面まで厚さ20～30cmの黒色泥炭層7が形成される。泥炭層中に樹木の遺骸が多く確認された。当時の調査者の所見でこれらは後に墳丘に植生した樹木が流れ込んだものと考えられ，松ではないかと推定されている。

土層7を全面的に覆う形でV層が堆積する。その後灰褐色粘質土層6，黒褐色粘質土層5が形成される。

7トレンチは周濠のさらに外側の確認を行っており，断面図が記録されている。以下西側のトレンチの概要については，トレンチ東側（墳丘側）端をO mの起点として西側に測った距離を用いて報告するものとする。

トレンチの調査床面は砂層となっている。その色調などは混ざっていないが，砂丘形成層でⅨ～Ⅺ層に相当すると考えられる。砂丘形成層は西側に向けて緩やかな下り勾配を基本とするが，23.5～24.1 mの地点（以下地点ア）と，26.6～27 mの地点（以下地点イ）と2ヶ所で，急に落ち込んで段状を形成している。さらにその上層に堆積する層も不自然な堆積の様相を呈している。ここでは，これについて着目して以下のとおり，分析を加える。

まず，砂丘形成層は地点アから地点イまでの間，平坦面となっている。この平坦面を覆うように黒色粘質土層b1が堆積する。また地点イで砂丘形成層が落ち込むところの下端にも黒色粘質土層b2が堆積する。地点イの砂丘形成層の落ち込む傾斜面には黒色粘質土層は堆積していない。土層b1と土層b2は実測原図では「H」と表現している。この「H」が何を指すのかは不明であるが，少なくとも土層b1とb2は同じものと判断できる。

23.6 m地点から28.4 m地点で土層b2を覆うように砂層aが堆積する。砂丘形成層が東側から流れ込んだものなのかどうかは，削平を受けているため不明である。ただこの砂層aの下層には黒色粘質土が堆積しているので，二次的に堆積した砂層である。また，注意したいのは地点アの24 m地点では成形したような傾斜があって，わずか約20 cm程度であるが，明瞭な段差がある。上記段の下端から26.4 mまではほぼ平坦面を形成するが，地点イのところで段差面を被覆するように堆積する。地点イの傾斜が落ちた27 m地点から，28.4 mのところまで再び平坦に堆積するが，28.4 m地点からで再び西側に急に落ち込んでいる。

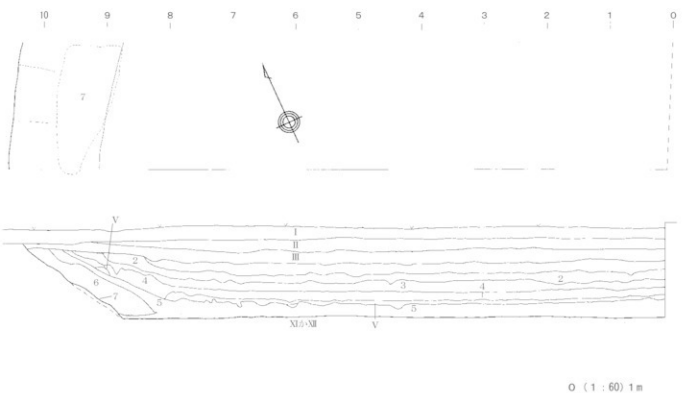
以上の分析をまとめると，砂丘形成層は地点アと地点イで急激な段差があり，25 mから26.8 m区間は平坦になっている。さらに，上層の黒色粘質土層b1，b2，砂層aの堆積によって，より鮮明な階段状の地形が造られている。これが，自然の作用でこのような造形ができるかどうかは今後検討の必要がある。例えば自然作用の可能性を考えるならば，汐入川の氾濫や河道変化によって横瀬古墳西側の環境が変化する過程で，段階的に水による侵食を受け，階段状の落ち込みを形成していったという想定もできる。しかしながら，土層断面図では侵食による攪乱した層が確認されないこと，軽石などの粒子の粗い鉱物を含んだ層の記録がないことから，その可能性も低いと考える。そこで周堤西側を緩やかな階段状に人為的に造った可能性を考えた。砂層aによって周堤壁表面を整えている点は疑問が残るが，本報告書ではこの層までを含めて周堤の一部として報告する。

砂層aが落ち込んだところから黒褐色粘質土層10が堆積する。これは西側へ向けて継続的に堆積しているので，自然堆積層と考えられる。実測原図ではこれにも「H」の表記がされており，土層b1，b2と同質のものと判断したと思われるが，土層10と土層b2の間には砂層aが堆積していることから，堆積の時間差は想定できる。つまり，土層b1，土層b2は古墳築造段階で，周堤を形成するために盛った土であり，土層10は古墳築造以降に形成された粘質土層と言える。この層の上面は西側に向けてほぼ水平に堆積する。

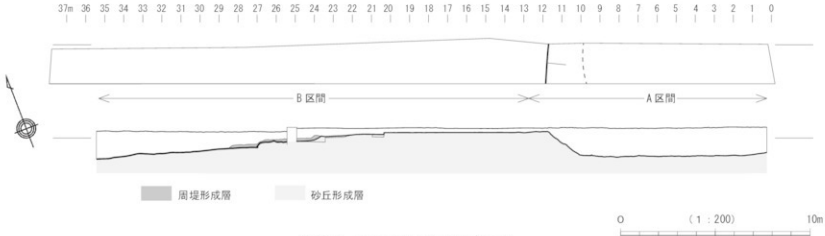
土層10の上層には29.4 m地点から西側に向けて堆積する灰褐色粘質土層cが存在する。この層には鉄分が含まれている。土層cと土層10との間には灰白色粘質土dがブロック状に堆積する。土層cは29.4 m地点から東側には堆積しない。また，29.4 m地点から32.5 m地点までは盛り上がった状態で堆積している。この層が西側に向けて継続的に堆積する点では，自然堆積層であろう。しかし粘性のある土が，水の作用とともに形成するものであるとすれば，下層の土層10の上面が水平であるにも関わらず，灰褐色粘質土が部分的に盛り上がった状態に堆積するということが，自然のメカニズムであり得るのかは検証の余地がある。

一方，人為的に盛り上げた可能性も考えてみた。例えば本来は灰褐色粘質土層cは約10 cm程度の厚さで自然に堆積していたが，何らかの意図があって29.4 m地点から東側に堆積していた土層c西側に寄せ集めて，盛り上げたという想定である。土層cの盛り上がっている箇所の31.2 mから32 m地点には土層c上に黒色粘質土が堆積している。これにも「H」の表記がしているので，黒色粘質土b1，b2，及び黒色粘質土10と類似すると思われる。この層を黒色粘質土層b3とする。土層断面図では，この土層b3が土層cの上に堆積することによって，盛り上げた土を整形しているようにも見える。ただし，これが遺構であるとするなら，古墳築造後に構築されたものということになり，古墳の外堤とは考えにくい。トレンチの断面図から推測したものであるため，これが遺構なのかどうか，遺構であるとすればいつ時期のどのような目的のものかは不明である。今後のために原因から想定した所見を以上のとおり報告しておく。

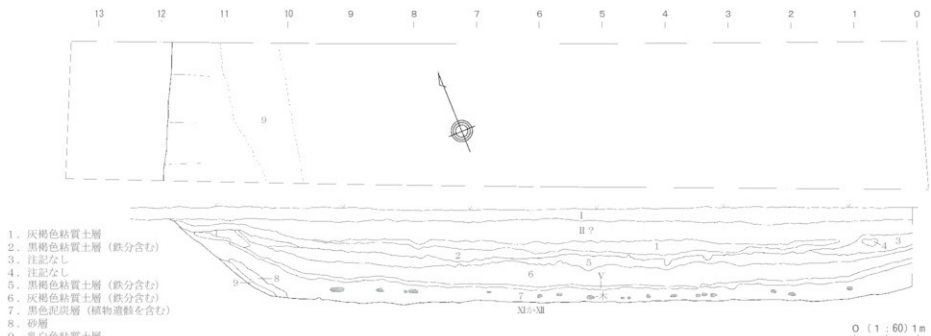
第 23 図　6，7 トレンチ配置図



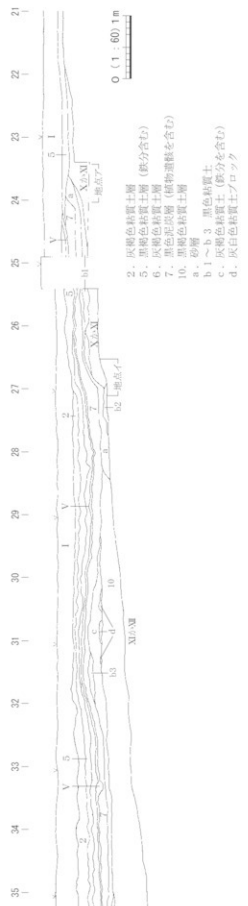
第 24 図　6 トレンチ平面図・北壁面土層断面図



第 25 図　7トレンチ平面・断面概要図



第 26 図　7トレンチＡ区間平面図・北壁面土層断面図



第27図　7トレンチB区間北壁面土層断面図

8．8トレンチの概要（第28・29図）

8トレンチは後円部北，町道内に設定されたトレンチである。トレンチは遺構検出に伴い、拡張しながら調査を行っているため，トレンチの平面形が歪であるが，述べ延長は36 mである。

発掘調査の原図ではトレンチを拡張する事に南側（墳丘側）からA～C区の3つにトレンチを細分している。本報告書もこれに準じてA～C区の3区画ごとに報告する。ただし，ここでは土層堆積状況が分かりやすいように，南側（墳丘側）端部から北へ8．5 m地点までをA区，8．5 m地点から23 m地点をB区，23 m地点からトレンチ北側端部までをC区として報告する。

①A区（第30図）

トレンチ南側（墳丘側）端部から北側へ約4 mのところまではトレンチ幅1 m，約4 mのところから北側はトレンチ幅1．7 mである。もともとは，トレンチ幅1．7 mの範囲は長さ7．5 mで設定されたトレンチであるが，北側端で遺構プランが確認されたので，B区へとトレンチを拡張したと思われる。

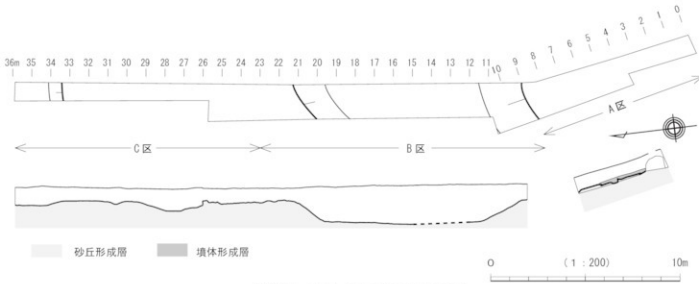
A区は，もともと墳端部であった箇所で，後世に削平を受け，道路として整備された範囲である。そのため，土層断面図では，後世の堆積と，古墳築造期以前の堆積とを検討する必要がある。

まず，表土層の褐色土層1 aは道路直下の層で硬化している。その下層にある軽石混ざりの褐色土層2及び砂・軽石混ざり灰褐色土層3は，8トレンチ全体に広がっている。土層3の下層にある層は原図で「黄色砂層（鉄分を含む）粘質」と表記している層が堆積する。砂層 a とする。砂と粘土の中間のシルト層とも読み取れるが，色調が黄色を呈するシルト層は横瀬古墳の確認調査では確認されていない。そのように考えると黄色砂層に粘性のある土が含まれているということであろうか。粘土がブロック状に点在する黄色砂層であれば，墳丘築造に伴う盛土の一部という見方もできる。この層には鉄分が多く含まれる。

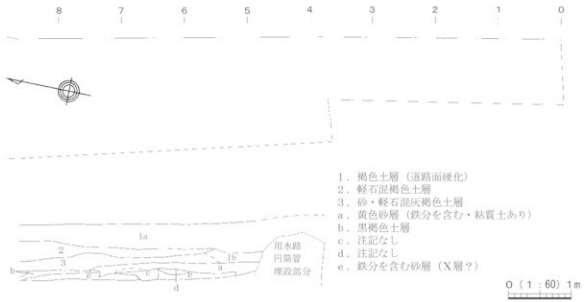
砂層 a の下層は黒褐色土層 b，及び土層 c，土層 d が堆積する。土層 c，土層 d については特に土の注釈は記されていない。黒褐色土層 b はIX層を示している可能性もある。そのように考えると砂層 e はX層の可能性がある。

A区では遺物が1点出土しているが，土層3で確認されていることから，後世の墳端削平以降に入り込んだものと考えられる。

第 28 図　8 トレンチ配置図



第 29 図　8 トレンチ平面・断面概要図



第 30 図　8 トレンチＡ区平面図・東壁面土層断面図

②B区（第31図）

B区は北側にトレンチを拡張して設定されたものである。トレンチ幅は1.8～1.9mである。平面ではⅨ層面で幅11.8mの遺構プランを検出した。

遺構は検出面からの深さが1.1～1.2m，検出面での幅11.8m，底面の幅が約8.5mである。周濠と考えられる。従って実際の墳端は現在の墳端より，北へ約11mのところにある。

周濠底面には厚さ30cm程度の黒色粘質土層14が堆積する。土層14にはヨシ，松かさ，木片が含まれる。墳端壁面を覆うように黒色土と鉄分を含む砂が堆積している（砂層13）。この層をさらに覆うように砂混ざりの黒褐色土層・黒色土（土層11,12）が堆積している。同じように周堤壁面も黒色土や泥を含む砂層（砂層15,16,13）が堆積する。これらは，土層14の形成期に墳丘及び周堤側から流れ込んだと思われる。

周濠両壁面に堆積する砂と黒色土の混土及び周濠底面に堆積する植物遺体を含む黒色粘質土層の上層に，「火山灰と思われる茶がかった灰色層」と表記されているのは，おそらくV層の紫コラ層であろう。これには追記して砂や植物繊維を含むという注釈が書かれているが，濠内に水が残っている段階に降灰して水中に沈着した紫コラである可能性もある。V層上層は南側には灰色粘質土層（土層9,10）が堆積する。土層9にはブロック状の砂，植物の繊維が含まれる。土層9形成時期に周濠の墳丘側半分に部分的に黒色粘土を含む白色砂層（砂層8）が堆積する。

周濠内では遺物が7点出土している。もっとも底面に近いものでも，底面から30cm高いところの植物遺骸を含む黒色粘質土層中で出土しており，他はV層形成段階以降の層で出土している。いずれも周濠埋没過程で流れ込んだものである。

③C区（第32図）

ここでは8トレンチ北部分の長さ13mの範囲をC区として報告する。C区は，先ほど報告したB区からさらにトレンチを拡張した部分を含んでおり，その拡張したトレンチは幅1m，長さ10mである。

その拡張部分の南側に幅3m，深さ50cm程度の凹みが確認された。埋土は砂や鉄分を含む黒色粘質土で，土層断面の記録で砂が横方向に筋状に堆積している点で，水性堆積による埋土と推測する。この凹みは壁面や床面が明瞭でないため，調査時の記録では「旧河川敷」と表記している。実際は河川敷というより，自然流路と考えるが，平面では周濠に沿っているようにも見える。ただし，外濠とした場合周堤の幅が極端に狭くなるので，周堤が削平された後に形成された可能性が高い。

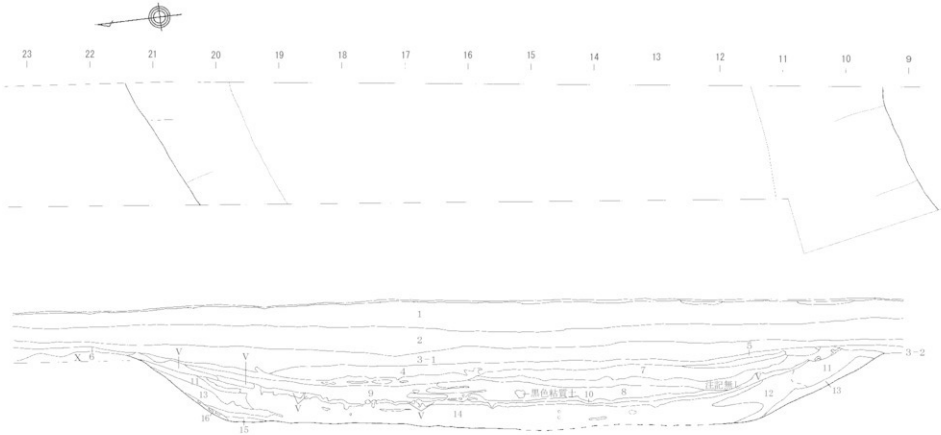
C区の北端にはもう一ヶ所深さ20cm程度の浅い凹みがある。これは自然地形の落ち込みのようにも見える。粘土や鉄分を含む白砂層22が堆積している。恐らく水性堆積と思われる。浅いため，自然流路の一部とも思われるが，後に報告する外濠の想定ラインがちょうどこの位置に相当する。外濠掘り込みの一部かもしれない。

C区については，25.5m地点からトレンチ北端までの区間に限っては，当時の実測者が異なる。トレンチ内の土層の堆積状況について各堆積層の注釈が詳細に記録されていないため，情報量に乏しい。そのうえトレンチ南端から25.5mまでの土層断面図と整合しないところがある。

B区の土層堆積状況と照らし合わせながらC区の土層堆積について分析を試みる。まずC区の南部分のトレンチ最下部の層は「白色砂」と記されているが，Ⅻ層に相当すると考えられる。25.5m地点からは北端部までは恐らくトレンチ底面の層の記述は無いが，砂丘形成層上面まで掘り下げたと想定する。

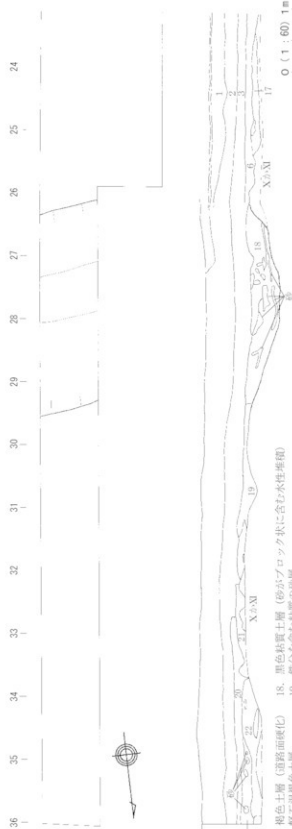
C区南部ではⅫ層上に黒褐色砂質土層（土層6）がある。Ⅻ層と土層6との間に黒色粘質土層（土層17）が堆積しているため，黒褐色砂質土層はⅨ層とは言えないだろう。また，土層6は，B区においてV層堆積の段階と同時期かまたはそれ以降の堆積層であることが示されているので，このことからもⅨ層ではない。

C区の南端で白砂層上面から埴輪片が出土した。しかし，水の流入による作用が働いた堆積状況も考えると，出土地点に埴輪が据えられているとは必ずしも言えない。ただし，A区からC区までの間で，このトレンチにおいて須恵器や埴輪片が複数個体出土したことについては，注意しておく必要がある。



1．褐色土層（道路面硬化）
2．軽石混褐色土層
3．砂・軽石混灰褐色土層
4．砂混ざり黒褐色土層
5．黄色砂層
6．黒褐色砂質土層
7．黒色粘質土層（砂ブロック状に含む）
8．白色砂層（部分的に黒色粘質土混ざる）
9．灰色粘質土（繊維混入・砂ブロック状混ざる）
10．灰色粘質土
11．砂混ざり黒褐色土層（酸化鉄含む）
12．砂混ざり黒色土
13．やや黒色土混ざり砂層
14．黒色粘質土層（植物遺体を含む）
15．黒色土
16．砂混ざり泥質層

第31図　8トレンチB区平面図・東壁面土層断面図



第32図　8トレンチC区平面図・東壁面土層断面図

【昭和52，53年確認トレンチ出土遺物　第33図1～11】

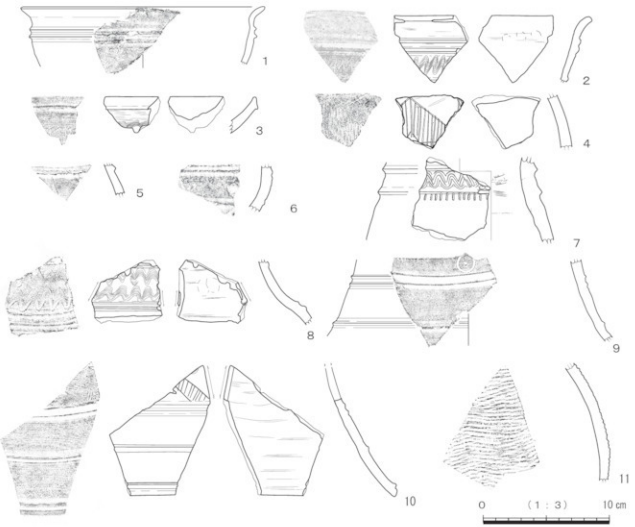
トレンチ内で出土した遺物については，「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」（鹿児島県教育委員会1984）で当時調査に携わわいた中村耕治氏によって報告されている。報告をしている遺物はいずれも須恵器である。

1から10は器台である。1・2は台部の口縁部から胴部である。1は口縁部が「く」字型に外側へ屈曲する。胴部はやや膨らみ脚部側へと窄まる。口縁部の下側に断面三角形の突帯が2条巡らされている。突帯の下部には櫛描波状文が施されている。2は口縁部が外側に外反する。胴部はあまり膨らみを持たず直線的に脚部へと窄まる。口縁部下側に2条の突帯を巡らす。突帯の下に櫛描波状文が施される。3も口縁部である。胴部から大きく外向し，口縁端部の外器面はナデ調整によって面が整えられている。口唇部は鋭く上方に突き出したように整えられる。口縁部下は回転ナデ調整がなされ，下部に細やかな櫛描波状文が施される。

4・5・6は胴部である。4，5には鋸歯文が施される。6は回転ナデによる浅い凹線が2条あり，下部に櫛描波状文が施文される。7～10は脚部である。7は2条の突帯が施され，突帯間に櫛描波状文を施す。下突帯の下部には櫛状工具による刺突列点文が施されており，原体の幅や櫛目の数・大きさから櫛描波状文の施文具と同じものを用いていると推測する。8は脚下部である。下端部に向けて大きく外反する。上下に断面三角形の突帯が施される。下の突帯は2条確認できる。上下の突帯間に2段の櫛描波状文が施される。左右2ヶ所に方形もしくは三角形の透孔の一部が確認できる

9は上部2条，下部に1条の断面三角形の突帯が巡らされている。上部突帯の上方にコンパス様の施文具による点円文と鋸歯文が施される。10も脚下部である。3箇所に断面三角形の突帯が巡る。上部の突帯は2条，最下部の突帯は端部に施される。上部の突帯上方にヘラ描きによる鋸歯文と思われる施文の一部が確認できる。上方の右側に透孔の一部が確認できる。

11は壺形土器の胴部である。外器面は平行タタキ，内器面はヘラ磨きが施される。



第 33 図　昭和 52，53 年確認トレンチ出土須恵器　※2・3・4・7・8・10 は再実測，他は再トレース

第 4 表　昭和 52，53 年確認トレンチ出土須恵器観察表　※1・5・6・9 は実測原図のみ確認。

挿図番号	掲載番号	出土位置	時代	器種	部位	法量（cm） 器高	口径	底径	その他	色調 外	色調 内	胎土	器面文様 外面	器面文様 内面	備考
33	1	4T C区	古墳	器台	口縁	-	19	-	-	-	-	-	突帯2条／櫛描波状文	ナデ	注記「横瀬 2CT」
	2	7T	古墳	器台	口縁	-	-	-	-	黒	黒	褐灰 白色石含	回転ナデによる突帯2条／櫛描波状文	回転ナデ・指オサエ	注記「横瀬 4-1T」
	3	7T	古墳	器台	口縁	-	-	-	-	灰	黄灰	灰黄褐 白色石含	口縁：ナデ／口縁下：回転ナデ／櫛描波状文	ナデ	注記「横瀬 4-1T」
	4	7T	古墳	器台	胴	-	-	-	-	灰	褐灰	褐灰	ヘラ描きによる刻線文	ナデ	注記「横瀬 4-1T」
	5	7T	古墳	器台	胴	-	-	-	-	-	-	-	回転ナデ／突帯文／山形刻線文	ナデ	注記「横瀬 4-1T」
	6	7T	古墳	器台	胴	-	-	-	-	-	-	-	回転ナデによる突帯文 櫛描波状文	ナデ	注記「横瀬 4-1T」
	7	5T	古墳	器台	脚	-	-	-	-	黄灰	灰	褐灰 灰白色石多く含む	突帯間：櫛描波状文／2段目突帯下：櫛状工具刺突文	ナデ	注記「横瀬 4-2T」 粘土継ぎ目明瞭
	8	4T C区	古墳	器台	脚	-	-	-	-	灰	灰	褐灰 白色石	突帯3条／突帯間：櫛描波状文2段	回転ナデ／指オサエ	注記「横瀬 2C トレンチ」
	9	4T	古墳	器台	脚	-	-	-	-	灰	灰	褐灰 白色石	回転ナデによる突帯3条／点円文／鋸歯文	回転ナデ	注記「横瀬 2トレンチ3」
	10	4T	古墳	器台	脚	-	-	-	-	灰	灰	褐 白色石	回転ナデによる突帯3条／点円文／鋸歯文	回転ナデ	注記「横瀬 2トレンチNo.2」
	11	8T B区	古墳	壺	胴	-	-	-	-	灰白	灰白	灰白 白色石	平行タタキ	ヘラミガキ	注記「横瀬 1B トレンチ」

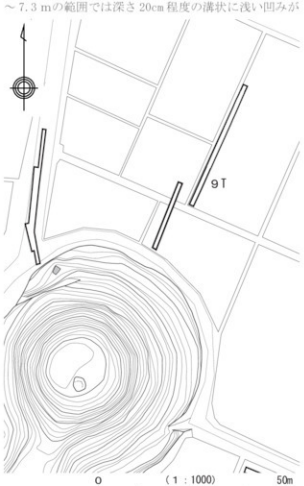
１．９トレンチの概要（第 34・35 図）

後円部北側に設定された幅 1.3 m，長さ 35 mのトレンチである。平成 23 年に確認調査を行った。このトレンチは平成 22 年に実施した地中レーダー探査の結果を踏まえてトレンチを設定した。地中レーダー探査で外濠ではないかと想定される反応が確認されているほか，さらに北側に異常反応があったため，外濠想定箇所よりもさらに北側に調査範囲を延ばした。

比較的トレンチが長いため，９トレンチの南端部を０m起点として，０～９mの区間を「A区」，９～ 23 m区間を「B区」，23 m～トレンチ北端までを「C区」として，報告する

①A区（第 36 図）

トレンチの南側，つまり周堤の想定される範囲の表土直下は明褐色軽石を含む明黄褐色砂質層（Ⅲ層に相当する）が薄く堆積し，その下層にⅥ層が存在する。状況から一定の削平を受けていると思われる。トレンチ南端部から５mのところでは，明黄褐色砂質層１を埋土とする浅い凹みが帯状にある。さらに，トレンチ南端部から６～ 7.3 mの範囲では深さ 20㎝程度の溝状に浅い凹みがあった。この埋土には明黄褐色と白砂による水性堆積層２が確認されているため，自然流路と判断した。



第 34 図　９トレンチ配置図

②B区（第 37 図）

トレンチ南端部から 10.3 mから 15.4 mの区間で幅 4.1 m，検出面からの深さ１mの掘り込みが確認された。これは地中レーダー探査で外濠を想定していた箇所と一致する。掘り込みは外濠と判断した。以下第１節で報告した「周濠」は以後「内濠」と呼ぶ。

掘り込みの断面形状は，周堤壁面が直線的に立ち上がる。特に壁面中位から下端まではきれいに整形された壁面を呈する。周堤壁面の立ち上がりの傾斜は強く，下端は壁面と底面の境が明瞭である。一方床面から北側の壁面へは緩やかに立ち上がっている。外濠はⅪ層まで掘り込まれている。トレンチ周堤壁面はⅦ層から掘り込まれている。周堤壁面は床面から１mの高さまで残存する。一方北側の壁面上端は不明瞭で，外濠から北側の土層堆積からは外堤の痕跡は認められない。

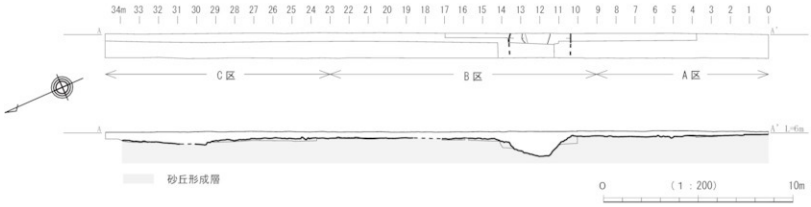
外濠底面は黒色粘質土と灰白色砂が斑状に混在する層 16 が堆積する。晴天が続くような時期でもこの層からは水が染み出してくる程，水分を多く含む層である。この層の上には周堤壁面に沿うように灰白砂を中心とする水性堆積層 15 が堆積する。この層は周堤側から流れ込んだものであろうと思われる。さらにこの上層には同じように周堤側から流れ込んだような水性堆積による砂層 14 が堆積する。黒褐色砂，灰白色砂，白色砂などの砂層が細かく折り重なるように堆積している。

この層の上層北部は北壁面側からの黒褐色土 13，黒色粘質土 11 が堆積する。壁面崩壊によるⅧ，Ⅷ層の流入と考えられる。さらにその上層は灰白色砂，明黄褐色砂，黄灰色砂がブロック状に混在する灰白色砂層 12，この北側上層に明黄褐色砂，黄灰色砂を含む黒色土層 10 が堆積する。これも水性堆積の様相を持つ。

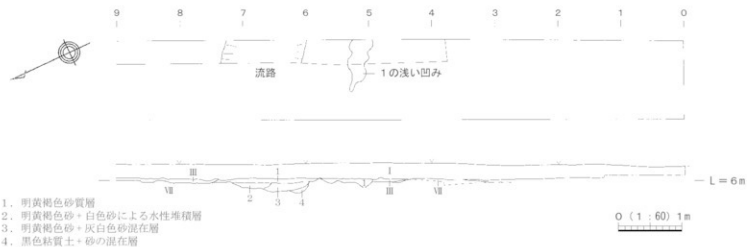
この上層は１～３㎜の淡黄色の砂層８が堆積する。比較的粒子が整っており，飛砂による堆積のようにも思われる。粘性のある黒褐色土のブロックが点在する。

外濠上部の埋土は複雑で，粒子の整ったにぶい黄色砂層が堆積する部分もあるが，全体として黒色土を基本として，黒褐色砂，灰白色砂，淡黄色砂を含む混ざりのある砂質土が断続的に堆積する。この層中でⅤ層の紫コラの堆積層も存在する。

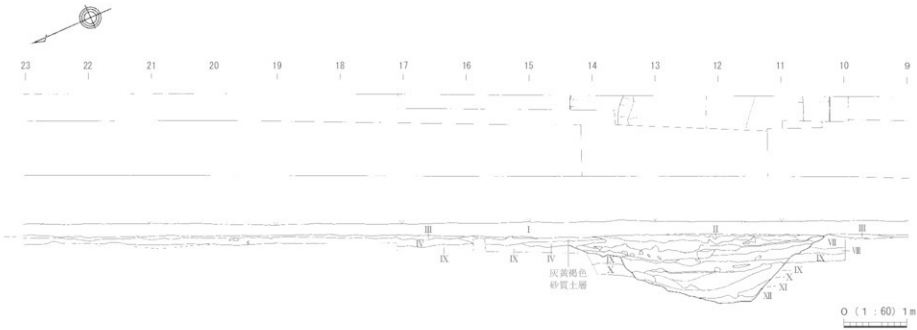
一方，外濠から北側は，表土の直下にある明黄褐色軽石を含む灰黄褐色土層（Ⅲ層に相当）で，水田の基盤層となっており，周堤側の表土下層とは土質は異なるものの，明黄褐色軽石を含むことや，色調が類似していることからほぼ同時期の形成と考える。この層の下はⅥ層が形成される。ところどころにこの上部に紫コラ層が存在する。



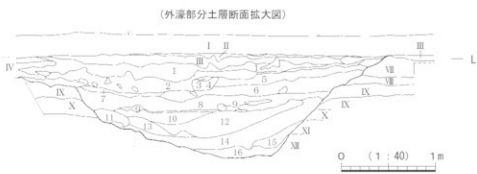
第 35 図　9 トレンチ平面・断面概要図



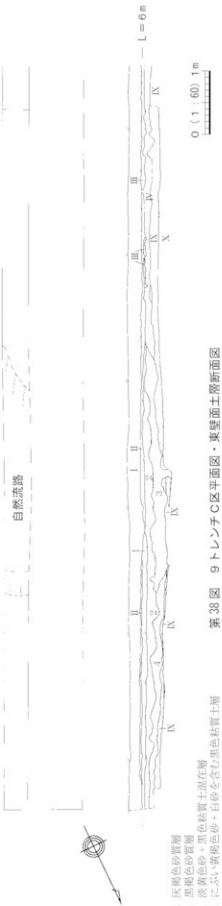
第 36 図　9 トレンチＡ区平面図・東壁面土層断面図



1．白色砂が点在する黒色土層
2．にぶい黄色褐砂＋黒色砂＋白色砂混在層
3．褐灰色砂ブロック
4．灰白色砂ブロック1㎜大均一
5．黒色砂＋白色砂＋淡黄色砂混在層
6．にぶい黄砂層1㎜大均一
7．白色砂＋黒色土＋にぶい黄橙色砂水性堆積層
8．淡黄色砂1～3㎜大均一
9．水粘性のある黒褐色土層
10．明黄褐砂＋淡黄色砂＋灰白色砂を含む黒色土層（水性堆積）
11．黒色粘質土
12．明黄褐色砂・黄灰砂が斑状に混在する灰白色砂
13．黒褐色土
14．砂の水性堆積層
15．灰白色砂
16．黒色粘質土と灰白色砂の斑状堆積層



第37図　9トレンチB区平面図・東壁面土層断面図



第38図　9トレンチC区平面図・東壁面土層断面図

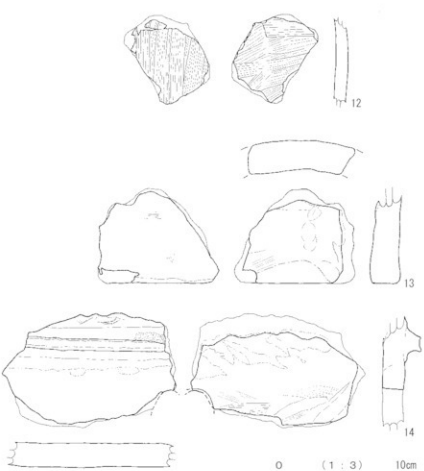
③C区（第38図）

27.4m地点から31.3m地点の区間は北側は水性堆積の層が広がっており，自然流路がある。地中レーダー探査で外濠の北側にあった異常反応はこの自然流路の位置に相当する。

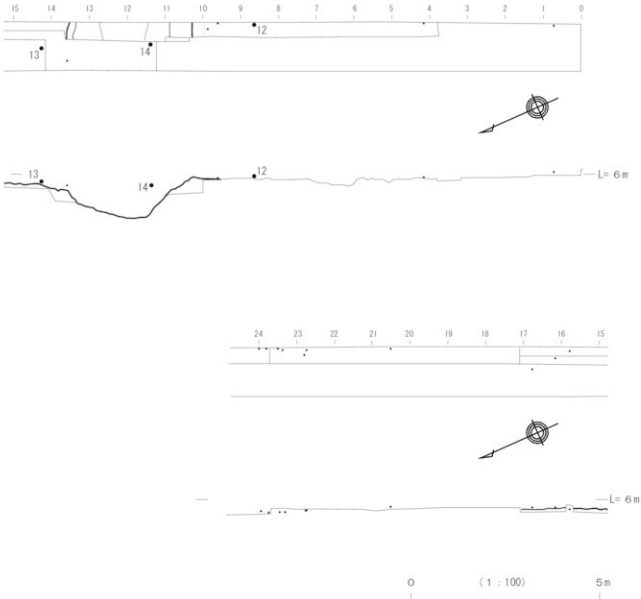
【9トレンチ出土遺物　第39図　12～14】

9トレンチでは，数点の土器，埴輪編が出土している。すべて表土直下の明黄褐色軽石を含む灰黄褐色土層，砂層で出土しており，流動的な出土状況である。しかしながら，出土位置は外濠周辺と，23m～24m区間に集中する傾向にある。

12は胴部である。器種は不明である。内外器面にハケメ調整痕が明瞭に残る。1～3mm格の赤橙色，灰褐色の礫を多く含む。13は円筒埴輪の底部と思われる。内外器面はナデ調整が施される。14は器壁が厚く，埴輪の一種と思われるが，断面形が扁平であることから，円筒埴輪ではなく，形象埴輪の可能性がある。コの字の突帯が貼り付けられ。突帯端部はナデにより浅く凹む。外器面は横方向のナデ調整で表面をきれいに整えている。突帯の下方に透孔の一部が確認できる。



第39図　9トレンチ出土遺物



第 40 図　9 トレンチ遺物出土状況

第 5 表　9 トレンチ出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土位置	時代	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	その他	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土 石英	長石	角閃石	雲母	輝石	その他	器面調整 外面	器面調整 内面	備考
39	12	Ⅲ	古墳	甕	胴	−	−	−	−	良	明黄褐	にぶい黄褐	△					1〜3mmの礫	縦方向ハケメ	横方向ハケメ	注記：YKS4T Ⅲ層No. 3
	13	Ⅲ	古墳	円筒埴輪	底	−	−	−	−	良	にぶい橙	橙	◎	◎				黒色石 褐色石	ハケメ後ナデ消し	ハケメ後ナデ消し	注記：YKS4T Ⅲ層No. 19
	14	Ⅱ	古墳	形象埴輪	不明	−	−	−	−	良	にぶい橙	にぶい黄褐	○	◎				軽石 灰黄褐色石	横方向ナデ	横方向板ナデ・斜め方向指ナデ	注記：YKS4T Ⅲ層No. 6

2．10トレンチの概要（第41～43図）

後円部東側に設定された幅1.5m，長さ18.5mのトレンチである。平成22年に15m調査を行い，外濠らしき痕跡を確認したので，引き続き平成23年に外濠らしき痕跡を含めて，西側に3.5m拡張する形で7.5mのトレンチを設定し，再調査を行ったものである。以下，トレンチ西側（墳丘側）端を起点0mとして東側への距離を用いてトレンチの概要を報告するものとする。

10トレンチの西側端部約1.2mの区間は，Ⅸ層が墳丘側に向けて緩やかに下り勾配となっている。内濠の上端と考えられる。周堤西壁面に沿うようには暗褐色砂層5が堆積する。上層は黒褐色砂質土層4，暗褐色砂質土層3が堆積する。

3.5m～12mの区間，X層上面に堆積する層はにぶい褐色砂質土層であるが，これは東側に向けて黒褐色へと色調が変化していく。Ⅸ層に相当する層と考えられる。さらにこの上層にはⅥ層が存在する。Ⅵ層以下は砂丘形成層である。

10.5m地点でⅥ層が東側に向けて薄く堆積し，11.8m地点で，Ⅵ層から明瞭に掘り込んだ段差が確認された。掘り込みの深さは検出面から約60cmである。この掘り込みが埋没する段階で，後世に新たに掘られた遺構の埋土では明瞭なV層（紫コラ層）が堆積しており，この遺構は少なくとも874年以前の遺構である。従って掘り込みは周堤壁面を構成する可能性が高いと判断した。

先に述べた10.5m地点からⅥ層が東側に薄く傾斜していくく傾斜面も周堤壁面とも考えられるが，周堤から掘り込みに向けて土砂が流れ込んでいることから，傾斜面は周堤壁面が浸食されたものと考えた。

次年度にこの掘り込みの東側の立ち上がりを確認するためにトレンチを延長する形で再度調査を行った。しかし，東側の立ち上がりは確認されなかった。

土層断面から砂丘を形成するX層が東側に下り勾配を呈していることが分かった。この範囲の砂丘形成層は西から東へ低く傾斜しているということである。周堤東側壁面は，砂丘の傾斜地を削りこんで整形していたことが判明した。

掘り込みは周堤側から流れ込んだ砂によって埋没を受けていた。掘り込みのあるところは，淡黄色砂を主とする水性堆積層16，暗褐色砂・黒褐色土・黄褐色砂による斑状堆積15による周堤側からの砂の供給が目立つ。15m地点から東側トレンチ東側端部まではX層上層約30cmは砂層（砂層6，9，11，13）が堆積するが，それより上層になると，灰黄褐色粘質土層5が堆積するようになる。17.5mから18.1m区間でも後世の遺構らしき掘り込みが確認されたが，874年以降のものである。

旧表土層，Ⅲ層で埴輪片，土器片が採集された。いずれも周堤壁面が埋没した後の層で確認されたもので，流れ込んだものである。

【10トレンチ出土遺物　第44図15・16】

15・16は埴輪片である。15の厚さは3cm程度である。端部の外器面側は突帯状を呈しているように思われるため，口縁部としている。突帯らしき部分にわずかに布目圧痕らしきものが確認できるが，外詳細不明である。内器面の口縁端部は横方向に指ナデを施している。

16は胴部である。透孔の一部が確認できる。埴輪片の下部は接合部で剥離しており，内器面にも粘土帯の接合部が確認できる。この部位における粘土帯の幅は3～3.5cmである。内器面側上の粘土帯を下方向へ粘土を延ばし，外器面側は下の粘土帯を上方に延ばしたような形で接合をしていることが分かる。内外器面ともナデ調整が施される。

3．11トレンチの概要（第41・42・45図）

10トレンチから東側の地形変化と土層の堆積状況を確認するため，11トレンチ，12トレンチを設定した。

11トレンチはトレンチ床面はX層上面である。11トレンチではX層上面はほぼ水平である。X層上層に水分を含んだ黒色砂質土層6が薄く堆積する個所があるが，概ねⅨ層上面に堆積するのは，黒褐色砂質層5である。この層は砂と粘質土を含む水性堆積層である。中に紫コラではないかと思われるブロックが一箇所確認できた。

土層6の上層から，粘質土の層（土層2～4）が断続的に堆積する。水平に堆積しているので，これらの層が形成する段階で，一帯はラグーン化が形成された可能性がある。

このラグーン化が進んだのは10トレンチの遺構に伴う紫コラ堆積から推測すると，少なくとも874年よりは後の時代と言える。

4．12トレンチの概要（第41・42・46図）

12トレンチについては，トレンチ西側（墳丘側）端を起点0mとして東側への距離を用いてトレンチの概要を報告するものとする。

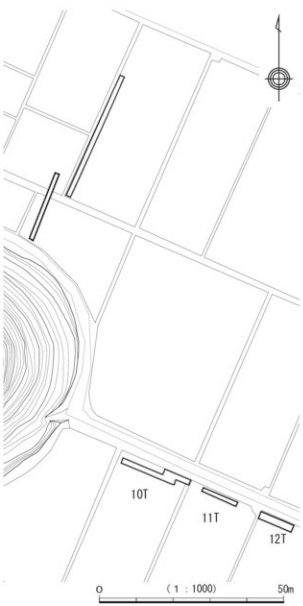
トレンチのサブトレンチ底はX層である。11トレンチで確認したX層上面より約40cm高いので，恐らく11トレンチから12トレンチの区間で砂丘面が東側へと緩やかに上がっているものと推定できる。

Ⅸ層は橙色砂質層である。基本土層ではⅨ層は黒褐色を呈するのであるが，この層は4～5mの間で突然黒褐色に色調が変わる。同じくこの上層のⅥ層も，トレンチ中央部では灰黄褐色を呈するが，4～5mの間で突然色調が黒褐色になる。一見掘り込んだ遺構の断面にも見えるが，いずれの層も土質や含有する鉱物に差は無く，掘り込んだ形跡はない。

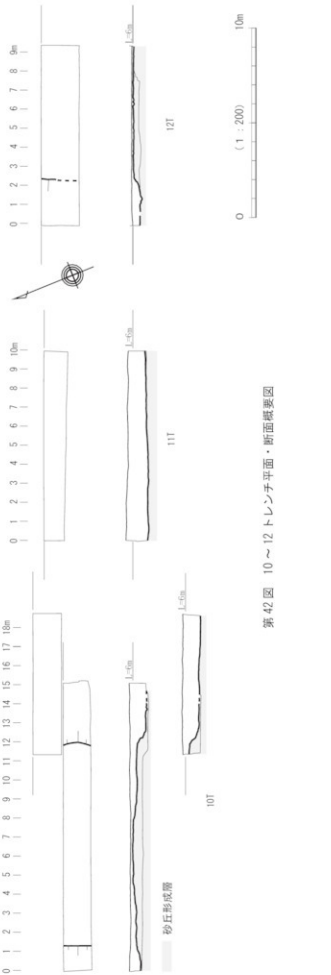
ちなみにここでⅥ層としている層は，第４章で説明したとおりⅢ層と酷似するため，Ⅰ層直下で出土すると判別が困難である。Ⅸ層との間に削平された痕跡などがないため，調査ではⅥ層と判断した。

1.8～2.5mの区間で掘り込みが確認された。これはⅥ層から掘り込まれている。調査時は古墳築造に伴う掘り込みかと推測した。しかし埋土の上層もまた明黄褐色軽石を含む黒褐色が含まれており，これをⅢ層とすべきか，あるいはⅥ層の流れ込みと考えるか判断が難しい。仮に古墳築造段階に，周堤以東の低地を自然の「外濠」として意識していたとすれば，砂丘形成層が東側に上り勾配である箇所を整形していた可能性も考えられる。

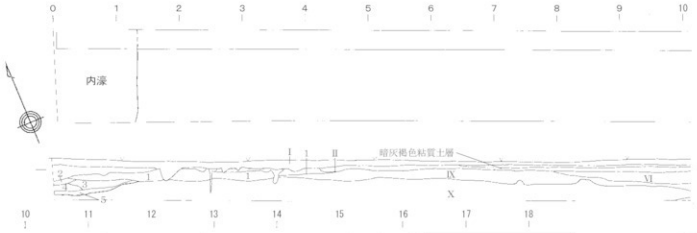
この掘り込みついては時期を特定する決め手が得られなかった。



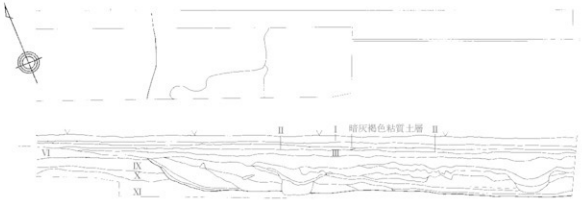
第41図　10～12トレンチ配置図



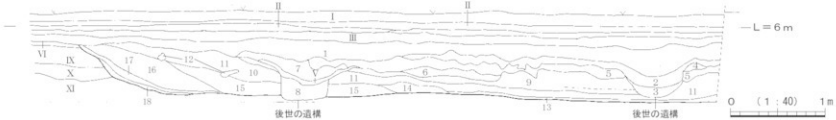
第42図　10～12トレンチ平面・断面概要図



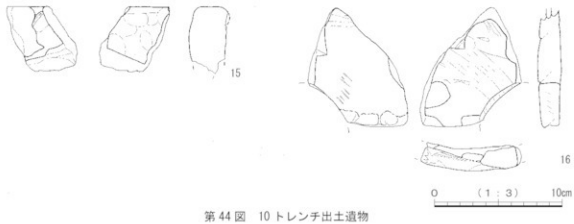
10 トレンチ西側土層
1．橙色砂層（水田の影響による酸化）
2．褐灰色砂質土層（硬化）
3．暗褐色砂質土層
4．黒褐色砂質土層
5．暗褐色砂層



10 トレンチ東側土層
1．明黄褐色軽石混黒褐色土層（近現代層）
2．黒色土と灰黄褐色粘質土の混在層（後世遺構２埋土）
3．褐色灰色土層（後世遺構２埋土）
4．褐灰色粘質土層
5．灰黄褐色粘質土層
6．白色砂＋明黄褐色砂＋黒褐色土の水性堆積層
7．灰黄褐色シルト層（後世遺構１埋土）
8．黒褐色砂質土を主とする白砂混ざり水性堆積層（後世遺構１埋土）
9．灰褐色砂質土層
10．黒褐色砂質土層
11．浅黄色砂層
12．黒色土ブロック
13．黒色シルト層
14．にぶい黄褐色砂質土層
15．暗褐色砂＋黒褐色砂＋黄色褐色砂による斑状堆積層
16．淡黄色砂＋黄色砂の水性堆積層
17．灰白砂層
18．暗灰黄色砂質土層



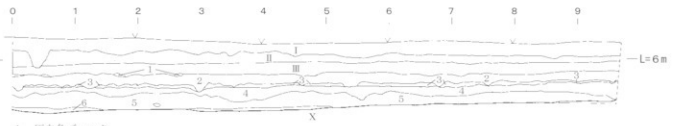
第 43 図　10 トレンチ平面図・北壁面土層断面図



第 44 図　10 トレンチ出土遺物

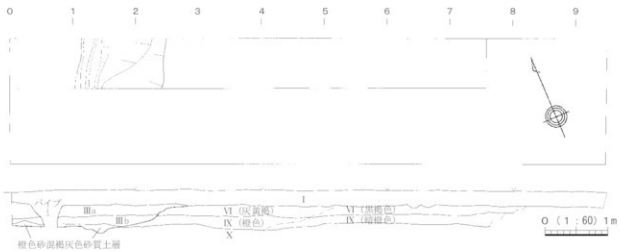
第 6 表　10 トレンチ出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土位置	時代	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	その他	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土 石英	長石	角閃石	雲母	輝石	その他	器面調整 外面	器面調整 内面	備考
44	15	Ⅱ	古墳	円筒埴輪	口縁	−	−	−	−	良	にぶい橙	橙	△				△	白色石	ナデ	ナデ 指オサエ	注記：YKS5T 一括
	16	Ⅱ	古墳	円筒埴輪	胴	−	−	−	−	良	にぶい橙	橙	◎	◎				黒色石 褐色石	ハケメ後ナデ消し	ハケメ後ナデ消し	注記：YKS5T2011 925



1．灰白色ブロック
2．黒褐色粘質土層
3．褐灰色粘質土層（4 より明）
4．褐灰色粘質土層（3 より暗）
5．黒褐色砂質土層（砂質と粘質土の水性堆積層）
6．水分を含む黒色砂質層

第 45 図　11 トレンチ北壁面土層断面図



第 46 図　12 トレンチ平面図・北壁面土層断面図

5．13 トレンチの概要（第 47・48 図）

13 トレンチは前方部南側に設定した幅 1 m，長さ 15 mのトレンチである。このトレンチでは，検出面での幅 4 m，検出面からの深さ約 1 mの掘り込みが確認された。この掘り込みは，地中レーダー探査で異常個所のあった範囲と一致する。外濠と考えられる。

外濠の壁面及び底面はⅩ～Ⅻ層となっており，周堤壁面は階段状を呈する。南側壁面は底面から大きく立ち上がり，壁面の下端は明瞭である。底面から高さ約 50cm のところから，外側に外反しながら上端へと立ち上がる。

底面の北側を中心に灰白色砂を含む黒褐色砂質土層 21 が堆積する。この層は，階段状に掘り込んだ底面から 1 段目の段にも堆積し，段差をスロープ状に埋めるように堆積する。底面から 2 段目に堆積する層は黒褐色砂質土層 23 である。これも段差をスロープ状に埋めるように堆積している。この層は最上段にも堆積している。この土層 23 の表面を覆うように黒褐色土・褐色土・明黄褐色軽石を含む砂質土層 22 が堆積する。

黒褐色砂質土層 23 がⅨ層の土質，色調と類似する。9 トレンチでは，外濠はⅦ～Ⅻ層を削り込んでいることが確認されているので，基本的にⅨ層は周堤上部に存在する層であり，埋土内では形成されない。そのため土層 22 はⅨ層ではないが，周堤側から流れ込んだⅨ層の土と考えられる。

周堤壁面から外濠底面および，南側壁面の中腹までをにぶい黄橙色砂層 19 が堆積する。砂層 19 堆積後は砂質層の土砂（砂層 16～18）が堆積し，これら層の上層は黒色粘質土層 13・16 で，これを覆うようにⅤ層（紫コラ）が堆積する。なお，このⅤ層は周堤部分では確認できず，外濠の埋土内と，外濠から南側のトレンチに広がっていた。このことから，周堤部分は削平によってⅤ層堆積面は失われているが，外濠から南側はⅤ層が残存しているのは外堤が無かった可能性を示す。

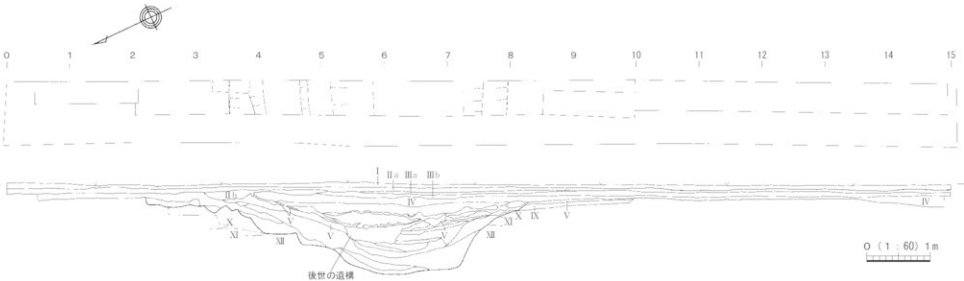
Ⅴ層堆積後は砂層と粘質土層が堆積する。この段階で後世の遺構が掘り込まれる。遺構の埋土は水性堆積を呈していた。この遺構は水路などの水に関連する遺構と言える。Ⅴ層を掘り抜いているので，874 年以降に構築された遺構である。

【13 トレンチ出土遺物　第 49 図　17】

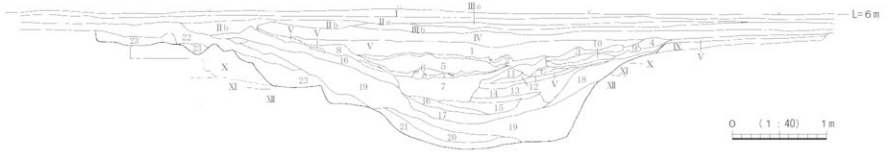
17 は 8 トレンチの I 層内で採取したものである。瓦質土器の捏ね鉢の口縁部である。

内外器面とも横方向にナデ調整が施される。

第 47 図　13 トレンチ配置図



(外濠部分土層断面図拡大部)



1．黒色粘質土層
2．褐灰色粘質土層
3．褐灰色粘質土＋黄橙色砂の混在層
4．黒色土層（明赤褐色砂＋黄黄褐色軽石含む）
5．灰黄褐色砂水生堆積層（後世遺構埋土）
6．褐灰粘質土層
7．灰黄褐色砂水生堆積層（後世遺構埋土）
8．褐灰色砂質土＋灰白色砂の混在層
9．黒色粘質土層
10．灰褐色粘質土層
11．黒色粘質土＋灰黄褐色砂の水生堆積層
12．褐灰粘質土層
13．黒色粘質土層
14．褐灰土ブロック混黒色粘質土層
15．黒色粘質土層
16．黒褐色シルト層
17．黒色砂質土層
18．灰黄褐色砂質土層
19．にぶい黄橙色砂層
20．褐灰色砂層
21．灰白色砂混黒褐色砂質層
22．黒褐色土＋褐色土＋明黄褐色軽石を含む砂質土層
23．黒褐色砂質土

第 48 図　13 トレンチ平面図・東壁面土層断面図

第49図　13トレンチ出土遺物

第7表　13トレンチ出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土位置	時代	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	その他	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土 石英	長石	角閃石	雲母	礫石	その他	器面調整 外面	器面調整 内面	備考
49	17	Ⅱ	中世	瓦質土器	口縁	－	－	－	－	良	にぶい黄橙	橙	△				△		ナデ	ナデ	注記：YKS8T2011912

6．14トレンチの概要（第50・51図）

14トレンチは，前方部南西側の町有地内に設定した幅1．5m，長さ13mのトレンチである。地表面から深さ80cmの深さは，町有地の整備による盛り土で，下部層は灰白色砂，上層はシラス，黒色土，褐色土などによる混ざった土となっていた。この盛り土を除去すると，褐灰色粘質土層が15cmの厚さで水平に堆積しており，恐らくこれが埋立て前の旧水田層である。Ⅱ層である。この下層明黄褐色の軽石を多く含む黄色褐色砂質層で，硬化した層である。明褐色軽石を含む点でⅢ層と判断したが，下層はX層となっており，Ⅵ層がⅡ層によってグライ化した可能性も考えたが，トレンチ北側でV層よりも上層に確認されているのでⅢ層とした。トレンチ調査で確認した最下層は灰白色砂層でⅫ層である。

14トレンチでは，墳丘に近いトレンチ北端を0m起点として，南側への距離を用いて報告する。

遺構の検出は，旧水田層を掘り下げたⅢ層上面で試みた。トレンチの南半分ではⅢが現れるものの，北半分は黒色砂質土，黄色褐色砂質土，灰褐色砂質土などが複雑に混在した層が平面に現れた。

そのうち，3mから6．5mの区間で灰褐色砂質土層1及び粗い灰白色砂層2を埋土とするプランが確認できたので，これを精査し掘り上げた。

上層は灰褐色砂質土層1が10～20cm程度堆積しており，主に粗い灰白色砂が埋土の大部分を占めていた。粗い灰白色砂層2にはにぶい黄褐色砂や褐灰色粘質土を含んでおり，水性堆積層であった。上面形はやや複雑な形を呈しており，基本的には幅3m程度である。また，この遺構の北側壁面上部は，固くしまった黒色土層3が帯状に盛られていた。床面へと窄まり，床面幅はトレンチ東壁面近くで幅30cm，西壁面近くで幅1m程になる。深さは検出面から60～80cm程度である。

この遺構の床面近くで遺物が出土した。多くが中世の陶磁器類であったため，この遺構は中世の遺構で，埋土の内容から，水路のような役割をしている遺構の可能性が高い。以下このプランを「14T 1号遺構」と呼ぶこととする。

14T 1号遺構の北側には褐灰色砂質土と灰白色砂などが混ざる水性堆積層4を埋土とするプランが検出された。深さ最大20cm程度の凹みで，わずかな段差があるようにも見えるが，壁面と断定するには不明瞭である。概してトレンチ東壁面側に向けて緩やかに深くなっていく形状である。これについては浅く凹んだところに灰褐色砂が入り込んだだけなのか，人為的に掘り込んだものか判断が難しい。しかし，このプランの北側にはV層である紫コラの堆積が確認されているにも関わらず，埋土または床面にはV層の堆積が無かった。明らかにV層を削っていた。このプランの南側の立ち上がりは，14T中世遺構の北側壁上部の硬化した黒色土層3が盛られており，未確認である。14T 1号遺構よりは古い段階のプランである。このプランについては「14T 不明プラン」と呼ぶことにする。

トレンチの北端部にもプランが確認されている。平面形状は不明である。このプランについてはサブトレンチで掘り込みの断面を確認することで，性格をつかもうと思った。

まず，平面の状況から，V層を掘り下げているので時代は874年以後の遺構である。サブトレンチ断面では

検出面から深さ10㎝程度のところまで黄褐色砂と黒色砂質土が混ざり合う層が堆積する。この層は水の作用によって撹拌されているが，概ねⅢ層に相当すると考えられる。その下層は褐灰色粘質土と灰黄色砂層などが水性堆積する層７で，堆積厚さは深いところで20㎝から30㎝である。さらにこの下層には10㎝程褐灰色砂層８が堆積する。この深さまでの壁面は検出面から緩やかに傾斜する。しかし，褐灰色砂層下にも黒褐色砂質土層９が存在しており，この層の堆積するところから遺構の壁面は垂直に落ち込む。

結果的にこの遺構の下層からは地下水が湧き出し，遺構の床面まで確認できなかった。水性堆積を呈するところからも，水路あるいは溜池などの水に関連する遺構の可能性がある。この遺構を「14T２号遺構」と呼ぶことにする。

14トレンチにおいては横瀬古墳の外濠と断定できる痕跡を見出すことはできなかったが，14Ｔ不明プランと14T２号遺構との間に約50㎝幅でＶ層が残存する。この部分だけ後世の遺構に削られずに残ったものである。この層直下に堆積するのは黒色砂質土層14，黒色粘質土層13であり，これらの堆積厚さは約20㎝である。これらの下層はⅫ層上面である。トレンチ東壁面の土層断面図では，14T１号遺構と14T不明プランとの間にⅨ・Ⅹ層が残存するが，14T不明プランと14T２号遺構との間にはⅨ・Ⅹ層が存在していないということは，この紫コラが残存する範囲も掘り込まれた遺構の一部の可能性がある。それを示すわずかな手がかりとして，床面からのわずかな立ち上がりが14T２号遺構に断ち切られずに残っている部分があった。そのため，この範囲も遺構として捉え，以後「14T３号遺構」と呼ぶことにする。

14T３号遺構は874年以前の遺構である。そのため横瀬古墳築造時期の遺構とみても矛盾は無い。しかし，これまで確認した外濠と比較して，極めて浅い。いずれにしても全体像が不明のため，14トレンチからの情報だけでは外濠と断言できない。ちなみに周辺の地中レーダー探査や13トレンチの結果から，外濠の位置はちょうど14T３号遺構の辺りが相当する。

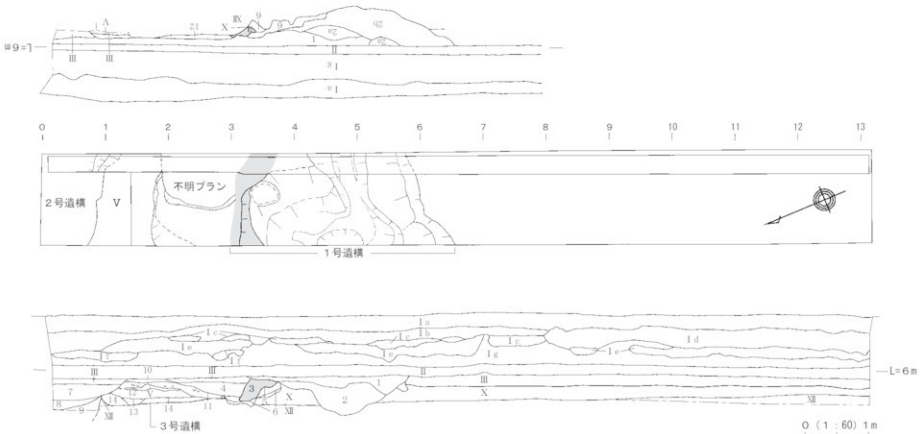
【14トレンチ出土遺物　第52図　18～24】

18～24はいずれも14T１号遺構から出土した遺物である。中世の遺物が６点，古墳時代の遺物と考えられる埴輪片，土器片が９点出土している。18は小片ではあるが，朝顔形埴輪あるいは壺形埴輪の口縁部下の屈曲部の可能性がある。肩頭部から上部に向けて外向し，口縁部に向けて内側へ屈曲する箇所である。屈曲部には外器面に断面三角形の突帯を貼付けている。外器面は横方向の工具ナデ，内器面は摩滅しているが，指頭圧痕を残す。

19は青磁碗の口縁部である。口縁端部は丸く整形され，外器面には簡略化された連弁文が施される。20は青磁碗の底部である。畳付の部分はきれいに面取りがなされ，施釉しており，丁寧に仕上げている。

21は青花碗の口縁部である。口縁下には圏線，その下には文様が描かれている。22は青花皿の口縁部である。口縁端部は肥厚し，丸みをつけて整形している。口縁下に圏線が描かれている。23と24は青花皿の底部である。いずれも高台は削り出しである。畳付には釉を掻きとっている。いずれも見込みは二本の圏線が描かれる。24は「玉取獅子」と思われる文様の一部が確認される。

第50図　14トレンチ配置図

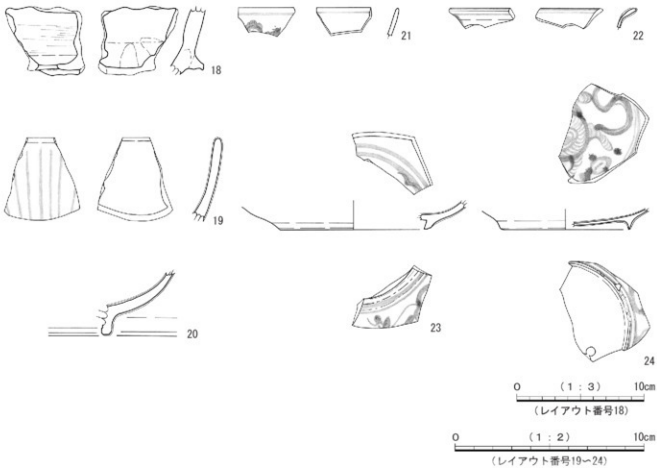


Ⅰa．にぶい黄褐色シラス層埋土層
Ⅰb．褐灰シラス＋黒色土の混土層
Ⅰc．黒色土層
Ⅰd．黒色土＋褐灰シラス＋にぶい黄褐色シラス混土層
Ⅰe．褐灰色砂＋褐灰色シルト混土層
Ⅰf．褐灰色シルト層
Ⅰg．灰白色砂・褐灰色砂による埋土層

1．灰褐色砂質土層（1号遺構埋土）
2．粗い灰白色砂層（1号遺構埋土）
3．硬化した黒色土帯状堆積層（1号遺構北部分）
4．褐灰砂質土＋灰白色砂などの水性堆積層（不明プラン埋土）
5．褐灰色シルト層（不明プラン埋土）
6．褐灰砂質水性堆積層（不明プラン埋土）

7．褐灰色粘質土＋灰黄色砂層の水性堆積
8．褐灰色砂水性堆積層（2号遺構埋土）
9．黒褐色砂質土層（2号遺構埋土）
10．黄褐色土
11．黒色土を主とした灰褐色砂＋柴コラ片を含む水性堆積層
12．黒色土層
13．黒褐色砂質土層
14．黒褐色粘質土層

第51図　14トレンチ平面図・東・西壁面土層断面図



第52図　14トレンチ1号遺構出土遺物

第8表　14トレンチ1号遺構出土埴輪観察表

挿図番号	掲載番号	出土位置	時代	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	その他	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土 石英	長石	角閃石	雲母	輝石	その他	器面調整 外面	器面調整 内面	備考
52	18	1号遺構埋土	古墳	朝顔形埴輪	口縁下部	-	-	-	-	良	にぶい橙	にぶい橙	○	◎	△			褐色石	横方向ナデ	摩滅 指頭圧痕有り	注記：YKS3T プラ 2010919-9

第9表　14トレンチ1号遺構出土青磁・青花観察表

挿図番号	掲載番号	出土位置	時代	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	その他	釉調	胎土	器面文様 外面	器面文様 内面	備考
52	19	1号遺構埋土	中世	青磁碗	口縁～胴	-	-	-	-	明オリーブ灰	灰白色	細連弁文		16C代
	20	1号遺構埋土	中世	青磁碗	底	-	-	-	-	明緑灰	灰色			畳付丁寧に整形 高台内釉剥ぎ 15C代
	21	1号遺構埋土	中世	青花碗	口縁	-	-	-	-	明緑灰	灰白色	帯線一条文様	帯線一条	
	22	1号遺構埋土	中世	青花皿	口縁	-	-	-	-	明緑灰	灰白色	帯線一条文様	帯線一条	
	23	1号遺構埋土	中世	青花皿	底	-	-	7.8	-	明緑灰	灰白色	高台脇帯線二条 唐草文様	見込み外縁に圏線二条文様	畳付釉剥ぎ 15C末～16C中頃
	24	1号遺構埋土	中世	青花皿	底	-	-	6.6	-	明緑灰	灰白色	高台脇帯線二条文様	見込み外縁に圏線二条「玉取獅子」文様	畳付釉剥ぎ 15C末～16C中頃

7．15トレンチの概要（第53～55図）

15トレンチは後円部西側に設定した幅1.5m，長さ18mのトレンチである。ここでは，トレンチの東端部を0m起点とし，そこから西側への距離を用いて報告をする。

このトレンチにおける砂丘形成層は西側に向けて緩やかに下り勾配を呈していることが分かった。まずXI層は2m地点から緩やかに西側に下がる。XI層上層にはX層が堆積する。X層は2m地点から堆積が認められ，徐々に西側に向けて堆積厚を増していく。厚みを呈する段階で，上層はより黒く，下層は黄灰色に近くなる。X層上面は7m地点まで水平であるが，7m地点から西側へと緩やかに下がる。15.4m地点で，急激に落ち込む様相が確認できたが，地下水が湧き出したため，落ち込みの深さは不明である。X層上面は黄褐色軽石を含む明褐色砂質土層で，耕作地の基盤層化している。III層に相当する。III層は東側から西側に傾斜する砂丘層を削平した後に堆積した層である。この層は，8m地点まで水平に堆積するが8m地点から西側へ下降し，8.7m地点で堆積が途切れ，これ以西は後世の削平を受けているため確認できない。

9mから14mの区間は後世の掘り込みに伴う埋土によって複雑な堆積層（土層3～9）となっている。掘り込みは，X層の上部まで及んでいる。特に9mからトレンチ西端部まで，土壌の入れ替えを行ったのか，地表面から50cmの深さまで新しい層が厚く堆積している。13.4m地点からIX層上面に黒色粘質土a1が堆積している。この層の上部は近代の層に削平されているが，トレンチ北壁面の断面で確認できる範囲では，15.4m地点から西側に向けて低く傾斜しており，その傾斜角度も砂丘層の傾斜と比較して大きい。ちょうど先述したIX層の落ち込み箇所を被覆するように落ち込んでいる。黒色粘質土層a1がどこまで落ち込むのかは地下水が湧き出るため確認できなかった。

黒色粘質土層a1が落ち込んでいるところに堆積する層は，黒色の粘質土，にぶい黄褐色粘質土を主とする水性堆積層（土層11）であるが，間にV層である紫コラ層が落ち込みに沿うような状態で確認された。そのため，黒色粘質土a1の落ち込みは874年以前には形成されていたと考えられる。

黒色粘質土層a1は9トレンチでもIX層上に自然堆積しており，基本土層のVI層とも考えたが，15トレンチにおける黒色粘質土を観察すると，砂粒を含み，ところによって灰白色砂がブロック状に含んでいる。このことから，人工的に盛った土ではないかと考えた。さらには，10トレンチのように，砂丘層の緩やかな傾斜面を削って周堤壁面を造るのではなく，砂丘層を少し削った上で，その上に土を盛り上げて周堤の壁面を整形したのではないかと想定した。このトレンチで言えば，15.4m地点でIX層が急に落ち込むのは，自然によるものではなく壁の形状を造るために削ったもので，最後にこの削った部分に砂を混ぜた黒色粘質土を盛り付け，最終的な整形を行ったという想定である。

上記の想定に基づいて，トレンチ南壁面の堆積状況を調べるため，12m地点から西側にサブトレンチを設定した。

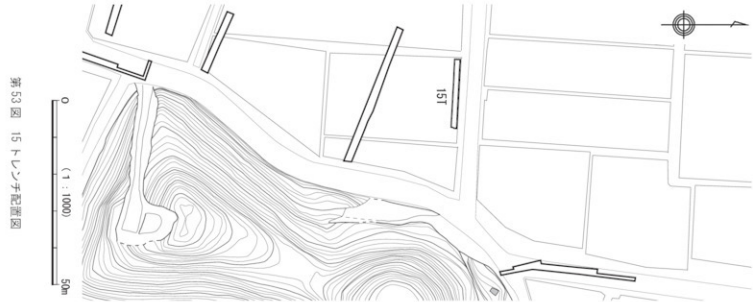
12m地点ではすでにIX層は西側へと低く傾斜していた。ここでのIX層は水分を多く含んでいた。IX層を覆うように褐灰色砂質土が堆積しており，この層は上面が傾斜しているのに対して，13.2m地点まで平坦面を形成し，13.2m地点から，西側へ急に低く傾斜する。この褐色砂質層は灰白色砂のブロックが含まれている。土質・色調に違いがあるが，先述した堆積層a1に相当するものと考えた。そのように考えると，先ほど述べた想定にあてはめると，周堤西側壁面を構成する盛土で，13.2mから西側への傾斜は周堤壁ということになる。この層を「堆積層a2」と呼ぶことにする。

堆積層a2が西側に落ち込む13m地点の堆積状況に注目すると，堆積層a2上層には黒褐色粘質土と砂が混在する水性堆積層14，その上層には褐色粘質土層13が堆積する。これらは北側断面図における土層11の下層に想定されるが，「土層13」「堆積層14」は北側断面で存在しない。さらにその上層はにぶい黄褐色の粘土を含む黒色粘質土層12となっており，これは土層a2の平坦部から被覆している。想定した堆積層a1とa2の落ち込みの上端を平面図上で結んでみると，トレンチの平面図に示すような形となる。周堤西側壁面の位置に2m程のずれが生じ，墳丘の平面ラインに対して平行にはならない。すなわちこのトレンチ周辺では周堤幅が極端に変わる形となる。今回の調査ではこの点について解決できなかったが，今後のために考えられる以下の推定を所見として加えておく。

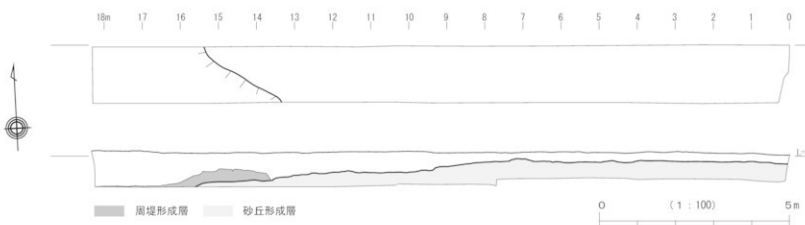
(1) 必ずしも周堤幅が均一になるように整えたとは限らず，15トレンチの部分で周堤の平面形が変則的に造られた可能性がある。

(2) 15トレンチ周辺では周堤築造後に西側からの浸食によって周堤の平面形が変わった可能性がある。

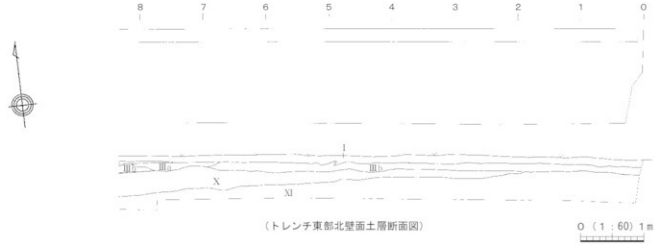
いずれにせよ，7トレンチの西側でも見られた砂丘形成層の西側への急激な落ち込みと，その部分に被覆する黒色土と同様に15トレンチでも砂丘形成層の西側への急激な落ち込みとそこに被覆する堆積層a1，a2が存在する。7トレンチと15トレンチの黒色土が類似するものかどうかは比較する資料は得られないが，築造当時，周堤西側の壁面を整形する試みがあった可能性について検討する必要がある。

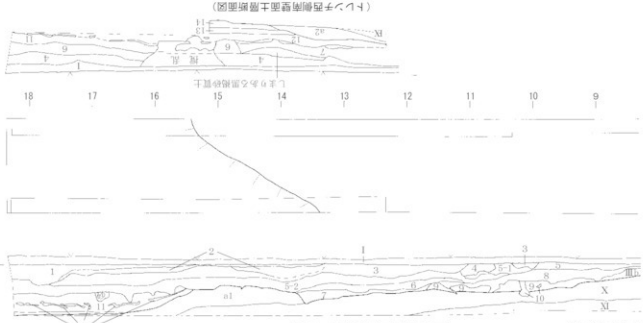


第53図　15トレンチ配置図



第54図　15トレンチ平面・断面概要図





15トレンチ北壁面土層

1．にぶい黄褐色土
2．黒色土＋黄褐色砂質土の混土層
3．白色軽石混褐灰色土層
4．にぶい黄褐色砂質土層
5．白色軽石混黄灰色土層
6．白色軽石混褐灰砂質水性堆積層
7．白色軽石混黒色土＋褐灰色砂の混土層
8．黒色シルト層＋灰褐色粘質土＋白色砂の水性堆積層
9．灰黄褐色砂質土層
10．褐灰色粘質土層
11．黒色粘質土を主とする水性堆積層
a1．灰白色砂ブロック・粒子を含む黒色粘質土層

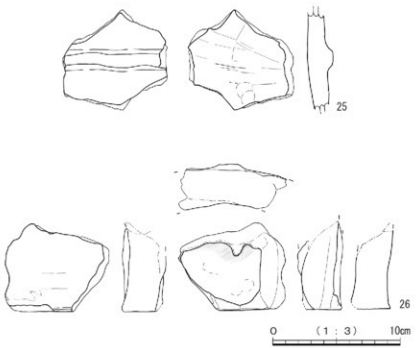
第 55 図　15 トレンチ平面図・北南壁面土層断面図

【15 トレンチ出土遺物　第 56 図　25・26】

15 トレンチにおける出土遺物はすべてⅠ層中で出土したものである。

25 は円筒埴輪の胴部と思われる。断面台形の突帯が付される。外器面は摩滅している。内器面は横方向のナデ調整が施される。

26 は円筒埴輪の底部である。底部は 2 枚以上の粘土板をつなぎ合わせて，円筒状の形に整えて作られる。破損面にはその接合部の剥離面が確認できる。その接合部外器面には，外から重ねた別の粘土の貼り付け痕がある。貼り付けた粘土帯つなぎ目を補強したものと考えられる。内器面側にも粘土の剥離した痕跡が見られる。上部の粘土帯をつなぎ合わせる時に生じた上部粘土帯の一部と考えるが，破損面が摩滅しているため確証を得ない。外器面は横方向のナデ調整が施される。



第 56 図　15 トレンチ出土遺物

第 10 表　15 トレンチ出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土位置	時代	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	その他	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土 石英	長石	角閃石	雲母	輝石	その他	器面調整 外面	器面調整 内面	備考
56	25	Ⅰ	古墳	円筒埴輪	胴	－	－	－	－	良	にぶい黄褐	黄褐	○	◎	○		○		摩滅	工具ナデ・指オサエ	注記：YKS2T Ⅰ層 2010.9.3
	26	Ⅰ	古墳	円筒埴輪	底	－	－	－	－	良	明黄褐	明黄褐	◎	○	◎				横方向工具ナデ後ナデ	指オサエ？摩滅	注記：YKS2T Ⅰ層 2010.9.3

【参考文献】
・鹿児島県教育委員会 1984『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報』
鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 29

第６章　地中レーダー探査の概要

南九地質株式会社

第１節　測定方法及び解析方法

１．地中レーダー探査概要

地中レーダー探査とは，電磁波の「波動」としての性質を利用して，地中の構造を把握する探査手法である。電磁波（パルス波）を地表から地中に向けて放射すると，地層境界，空洞，埋設物などの電気的性質が変化する部分が電磁波の反射面となり，電磁波の反射が生じる。この反射波を捕えることにより，地下浅部の地盤構造や空洞，埋設物などを非破壊的に探査する方法である。

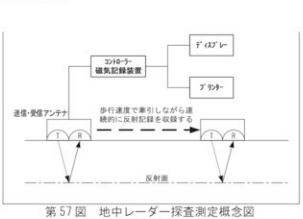
２．測定方法

地中レーダーシステムの基本構成を第 57 図に示す。測定システムは，測定器本体，アンテナ（電磁波の送受信を行う），コントロールケーブル（測定器本体とアンテナ間の信号伝送を行なう）から成る。

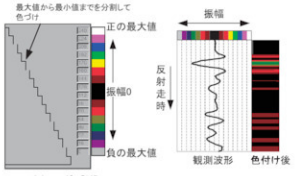
地表面に設置されたアンテナから地中に電磁波パルスが放射され，反射した電磁波が受信アンテナにより受信される。受信信号は，アンテナ部分で増幅，サンプリングによる周波数変換が行われたのち，測定器本体に送られる。測定器本体では，反射位相を識別し易くするための信号処理が行われ，記録の表示，データ収録が行なわれる。

実際の測定は，送信・受信アンテナが組み込まれたアンテナを測定員がゆっくりと歩行しながら，地中からの反射波を連続的に磁気記録として収録する。第 11 表に測定に用いた機器の仕様を示す。

地中レーダーは電磁波（パルス波）を地中に放射し，地中からの反射波を捕えて，その振幅の強弱を時系列データとして収録する。第 58 図に示すように，実際の測定画面上または測定記録では，振幅の強弱に応じて色付けを行い，カラーもしくは白黒の濃淡記録として表示・出力される。



第 57 図　地中レーダー探査測定概念図



第 58 図　地中レーダー波形記録の表示方法

第 11 表　地中レーダー探査　使用機器一覧表

項　目	製品名	仕　　様	製作所
データ収録装置	SIR －3000	・適用アンテナ：GSSI 社製アンテナ各種 ・入力チャンネル数：１チャンネル ・データ記録 内部メモリ：512MB フラッシュメモリカード コンパクトフラッシュポート：2GB までのコンパクトフラッシュメモリ ・プロセッサ 32 ビット Intel 社ストロングアーム RISC プロセッサ，206MHz ・ディスプレイ エンハンス 8.4 インチ TFT，分解能 800 × 600，カラー 64k ・データフォーマット：RADAN (.dzt) ・サンプルサイズ：８ビット or １６ビット選択 ・スキャン当りサンプル数：256，1024，2048，4096，8192 ・オペレーションコンセント：時間送り，サーベイホイール，ポイント収集 ・タイムレンジ：０～ 8000nsec フルスケール，ユーザー選択可 ・ゲイン：１～５ポイント，(−20 ～ 80dB) ・フィルター：垂直：ローパス，ハイパス　水平：スタッキング，バックグラウンドリムーバル ・寸法重量：31.5cm × 22cm × 10.5cm（4.1kg） ・動作温度：−10℃～ 40℃ ・バッテリー：DC10.8V	ＧＳＳＩ（米国）
アンテナ	Mode15103	発信周波数：400MHz　（45 × 45 × 17cm：8.6kg）	ＧＳＳＩ

3．解析方法

測定データの解析，および印刷出力は，地中レーダーデータの解析処理ソフトウェアである「RADAN for Windows」(GSSI 社製）を使用して行った。一般的な解析のフローを第 59 図に示す。また，解析の詳細説明を以下に述べる。

(1) データ転送

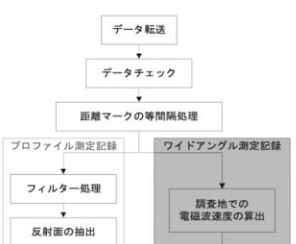
現場で収録された測定記録は，測定器内のハードディスクまたは磁気テープに保存される。現場での測定が終了した後，室内においてデータをパーソナルコンピュータ上に転送する。

(2) データチェック

測定データ上で距離程マークが抜けているところや，データのつながり，測定記録の振幅などをチェックする。

(3) 距離マークの等間隔処理

現地での測定は，１秒間にスキャンする数（デジタル記録として磁気テープに収録する数）を一定にして，測定員が歩きながらアンテナを牽引するため，各区間におけるデータ収録数が異なる。このため，測定時には１ｍ間隔で距離程を示すマーク信号を波形記録とともに磁気記録中に収録する。収録された距離マークの間隔は，アンテナの牽引速度により多少のばらつきがあるため，マーク間の波形の数（スキャン数）を一定にする処理を施して，マーク間隔を等間隔にする。



第 59 図　地中レーダー探査データ解析フロー

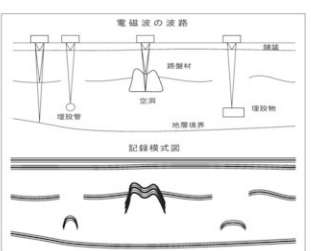
(4) プロファイル測定記録の解析

データチェック時に，記録のノイズレベル，反射面の振幅の状態によっては，各種フィルター処理を行い，より反射面の抽出が行い易い記録を作成する。主に使用されるフィルターとしては，Background removal（または背景除去処理）（測線方向につながっているノイズの除去）、バンドパスフィルター，TVG（時間レンジに応じた振幅の増幅）等である。

(5) 反射面の抽出

データ処理結果に対し解釈を行うが，反射波には波のリンギングがあるので，３，４波を１組として“連続した反射波”＝“境界または反射面”と考えて記録を見ていく。典型的な構造に対する反射パターンを念頭に置いて、この反射波の連続性，あるいは異常部（アノマリーと呼ぶ）に着目して，地下構造を推定する。第 60 図に道路下における電磁波の波路と記録模式図を示す。

地中に地下式横穴墓等の様に，空洞を伴う遺構が存在する場合の反射波は，一般的に上に凸型の反射波形状（双曲線）となり，振幅強度も周辺より強くなる特徴を示す。また，溝状遺構は連続した反射面が凹地の形状を示す。異常箇所の抽出にあたっては，地中レーダー探査記録より上記特徴に着目し，異常箇所の抽出を行う。



第 60 図　道路下における電磁波の波路と記録模式図

第２節　測量配置

地中レーダー探査の測線は，横瀬古墳の周囲に想定されている周溝の全体的な位置関係を把握できるように，古墳を取り囲むように１測線～ 12 測線まで配置した。測線箇所は許認可の関係より，主に町道，農道，畑の畦である。第 61 図に測線配置図を示す。

測定にあたっては，上記した主測線と平行な補助測線を配置し，データの解釈精度の向上に努めた。なお，８測線以降については、現地判断により測線を追加したものである。

第 61 図　地中レーダー探査側線配置図

第３節　調査結果

地中レーダー探査記録は，第 12 表及び第 63・64・65 図に整理した。第 62 図には代表的な記録例を示す。

調査の結果，第 62 図の記録例に示すように，多くの測線で横瀬古墳の内濠，外堤，外濠に起因すると考えられる異常箇所が検出された。これらの異常箇所を整理して第 12 表に示すと共に，第 63 図に異常箇所平面図として示した。

第 12 表および第 63 図に示すように，前方部南側および後円部北側の測線においては，内濠，外濠の位置が明瞭に検出されている。また後円部北側の９測線と 10 測線においては，想定されている外濠の更に北側に，溝状遺構と想定される異常箇所が検出された。これに対して，横瀬古墳の東西側に配置した測線については，内濠と外堤の位置は比較的明瞭に検出されているが，外濠の位置については特定することが困難であった。地中レーダ探査の記録では，古墳の東西側は窪地（凹地）の形状を示していることから，外濠は自然地形の窪地を外濠として利用していた可能性が考えられる。また外堤の外側（落ち込み部）では，振幅の強い反射波がみられる等の特徴を示している。

上記した様に，横瀬古墳の南北側では明らかに二重の濠が存在しているが，東西側については人工的な外濠は無く，自然地形の窪地を外濠として利用していた可能性が考えられる。また，古墳西側の町道沿いに配置した６測線については，内濠と考えられる落ち込み部（6-2 測線では距離程８～ 14m）に，非常に振幅の強い上に凸型の双曲線の形状を示す反射波がみられ，他測線の内濠にみられる反射波パターンと異なる形態である。一般的に，この反射パターンは，地中に空洞が存在する場合に見られるパターンであり，以下に示すことが考えられる。

1）内濠の底の堆積物が地下水の移動により流出し，空洞化が生じている。

2）内濠の底に空隙の多い，例えば軽石やボラ等が厚く堆積している。

3）横瀬古墳に近接する別の古墳の遺構に起因する反射波である。

上記した６測線の内濠付近の異常は，6-2 測線の距離程 16 ～ 18m 付近にみられる異常反射波（地盤の緩みパターン）とも関連していると考えられる。また，第 65 図に示すように，平成 22 年 12 月に実施した記録では，横瀬古墳と西側の水路の間にも落ち込みが想定されることから，別の周溝が現在の町道付近に位置する可能性も考えられる。

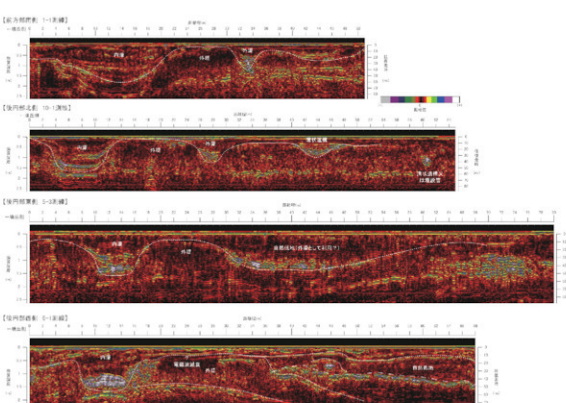
上記したように，地中レーダー探査の結果，横瀬古墳の周溝の位置を概ね把握でき，前方部の北側や後円部の南側では明らかに二重の濠を持つ可能性が非常に高いことが判明した。今回検出された異常箇所は，これまでのトレンチ調査や空中写真による遺構判読結果と良く一致した結果となり，既存の遺構平面図は横瀬古墳の周溝分布を精度良く反映しているものと言える。

第 12 表　地中レーダー探査結果一覧表（1）

測線箇所	測線名	内濠			外堤			外濠			備　考
		始点 (m)	終点 (m)	幅 (m)	始点 (m)	終点 (m)	幅 (m)	始点 (m)	終点 (m)	幅 (m)	
後方部南側	1-1 測線	4	22	18	22	31	9	31	35	4	内濠、外堤、外濠とも非常に明瞭である。
	1-2 測線	4	22	18	22	31	9	31	35	4	内濠、外堤、外濠とも非常に明瞭である。
	1-3 測線				0	10	10	10	14	4	外濠の位置は、非常に明瞭である。
	1-4 測線							10	13	3	外濠の位置は、非常に明瞭である。
後方部東側	2-1 測線	0	24	24	24	35	11	35	46	11	内濠、外堤は非常に明瞭である。　39m 付近に反射波面の落ち込みがみられることから外濠と想定したが，当地点の近傍にはポンプ小屋があるなど，人的な掘り込みの可能性も考えられる。また，33m 若しくは 45m 付近より東側は，自然的な低地となっている。
	2-2 測線	0	24	24	24	35	11	35	45	10	
後方部西側	3-1 測線	0	12	12	12	31	19				内濠、外堤は非常に明瞭である。　外堤西側の 30m 付近より西側は，自然的な低地となっており、外濠の特定は難しい。
	3-2 測線	0	11	11	11	31	20				
前方部北側	4-1 測線	11	23	12	23	26	3	26	29	3	内濠は非常に明瞭。　27m 付近に強い反射波がみられることから外濠と想定したが，信頼度は低い。23m より北側は、全体的に緩い尾根地形を示す。
	4-2 測線										顕著な異常は見られない。
前方部東側	5-1 測線	6	19	13	19	30	11				内濠、周堤までは非常に明瞭である。
	5-2 測線	6	19	13	19	28	9				周堤の東側、30 ～ 60m 区間は自然的な窪地となっており、外濠の位置は不明である。
	5-3 測線	8	18	10	18	29	11				但し、31 ～ 36m 付近に強い反射波が存在する等の異常がみられる。

地中レーダー探査結果一覧表（2）

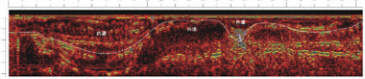
測線箇所	測線名	内濠			外堤			外濠			備　考
		始点 (m)	終点 (m)	幅 (m)	始点 (m)	終点 (m)	幅 (m)	始点 (m)	終点 (m)	幅 (m)	
前方部西側	6-1 測線	5	15	10	15	32	17				内濠、周堤までは非常に明瞭。　周堤西側、32m 付近より西側は自然的な低地地形を示しており、外濠の位置は不明である。36 ～ 38m 付近の可能性も考えられる。　また、内濠の反射波の形状が、上に凸型の双曲線の形状を示していることや、内濠の西側に緩み領域を示唆するような乱反射波が卓越することから、単なる掘り込みでは無く、空洞に関連するような遺構の可能性も考える必要がある。
	6-2 測線	7	18	11	18	36	18				
後方部西側	7-1 測線										減衰が大きく、顕著な異常はみられないが、7-2 測線の 5 ～ 8.5m 区間がやや異常であり、遺構の可能性がある。
	7-2 測線										
前方部北側	8-1 測線	6	20	14							内濠までは非常に明瞭である。
	8-2 測線										8-1 測線の 20m ～ 8-3 測線の 16m まで外堤の可能性がある。外濠は不明瞭であるが、8-1 測線の 28m 付近又は 8-2 測線の 9m 付近の可能性が考えられる。また、8-3 測線でみると、16m 地点より北側は自然的な低地と考えられる。
	8-3 測線										
前方部北側	9-1 測線	4	13	9	13	25	12	25	29	4	内濠、外堤、外濠とも非常に明瞭である。この他に、外濠の北側 41 ～ 47m 地点に明瞭な溝状遺構が確認できる。
	9-2 測線	3	13	10	13	25	12	25	29	4	
前方部北側	10-1 測線							11	14	3	外濠の位置は非常に明瞭である。この他に、外濠の北側 16 ～ 21m 地点に明瞭な溝状遺構が確認できる。
	10-2 測線							11	14	3	
後方部南側	11-1 測線							6	10	4	外濠の位置は非常に明瞭である。
	11-2 測線							6	10	4	
後方部南側	12 測線							6	13	7	不明瞭ではあるが、6 ～ 13m 区間に異常がみられ、外濠に起因する可能性が考えられる。



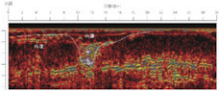
第 62 図　地中レーダー探査断面図代表例

第 63 図　地中レーダー探査異常個所平面図

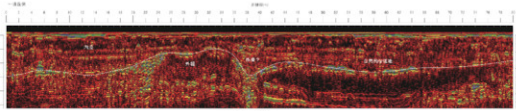
【1-1 側線】



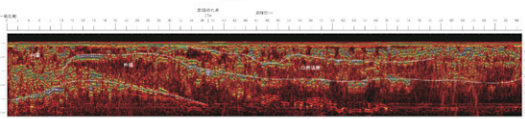
【1-4 側線】



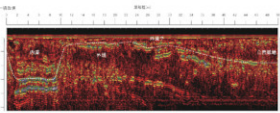
【2-2 側線】



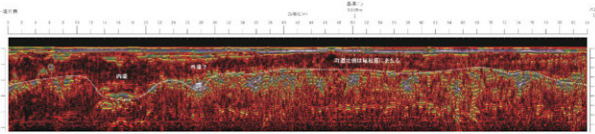
【3-1 側線】



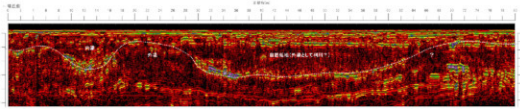
【3-2 側線】



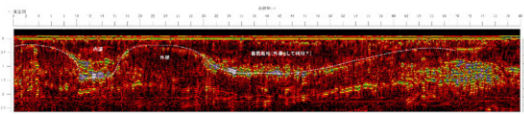
【4-1 側線】



【5-1 側線】

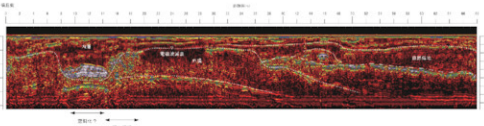


【5-3 側線】

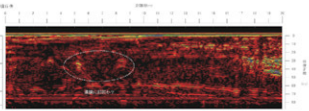


第 64 図　地中レーダー探査異常個所断面図（側線１～６）

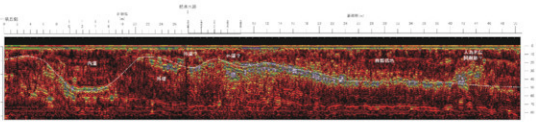
【6-2 側線】



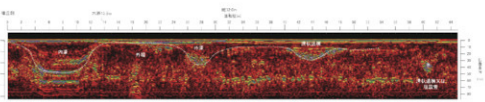
【7-2 側線】



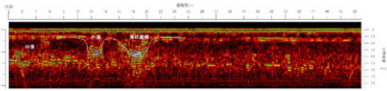
【8-2 側線】



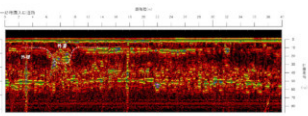
【9-2 側線】



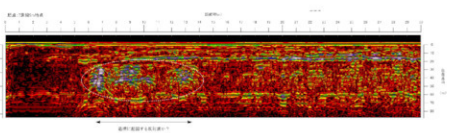
【10-1 側線】



【11-1 側線】



【12 側線】



第 65 図　地中レーダー探査異常個所断面図（側線 6 ～ 12）

第７章　土壌サンプリングの概要

第１節　サンプリング方法

１．サンプリング地点の設定

サンプリング地点の設定については，地中レーダー探査で反応の分析が不明瞭なところで，確認調査が及ばなかった箇所を選定し，その箇所は前方部南東側，前方部西側，後円部西側とした。

詳細な地点は，地中レーダー探査の側線起点を０ｍとして，そこから地中レーダー探査の異常が認められた範囲内に沿って地点を設定した。

２．使用した機材

(1) 使用機材

サンプリングは，南九地質株式会社製土壌サンプラーを用いて実施した。土壌サンプラーは，小型の油圧パイプロハンマーによりサンプラーを土中に押し込み，１ｍの長さの土壌を採取するものである。

(2) サンプラーの構造

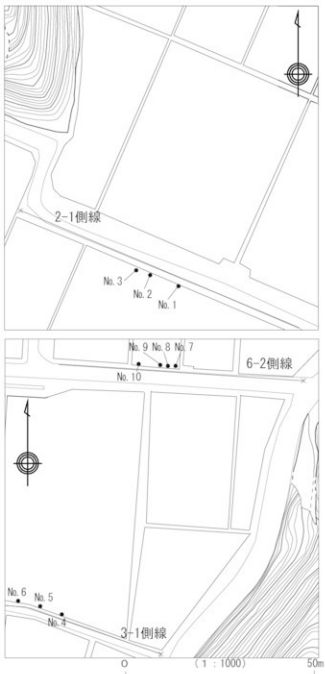
サンプルチューブの内面に厚さ０.２mmの博肉シートを内蔵し，先端にコアキャッチャーを取り付けて，試料の脱落を防止する仕組みとなっている。

第 13 表　土壌サンプラー基本仕様

品名	数量	外形寸法（mm）	重量（kg）	機能
パイプロハンマー	1	φ 400 × H540	26	打撃数：1,000bpm
油圧発生ユニット	1	590 × 430 × H606	42	発生油圧：最大 10Mpa
引抜装置	1	φ 490 × H800	49	ストローク：約 250mm 自動
シートサンプラー（30 型）	1	φ 38 × L1,235	3	採取試料長：１m，径 28mm
シート	1	t0.2 × 92 × 1,010	25	引張強度：約 130Mpa
閉鎖ロッド	1	φ 26 × L1,080	1	サンプラー先端を閉塞する
貫入ロッド	1	φ 39 × L1,000	2.6	サンプラーを貫入する
回収ロッド	1	φ 16 × L1,000	0.6	閉塞ロッドを回収する

３．サンプリング方法と土壌分析

地中レーダー探査の側線起点を０ｍとして，そこから採取地点の距離を割り出した。サンプリングは２ｍを基本とした。土壌サンプルの採取作業は南九地質株式会社が行い，サンプリングした土壌の分析，記録は鹿児島大学の永迫俊郎氏の指導のもとで，大崎町教育委員会で分析，記録作業を行った。



第 66 図　土壌サンプリング箇所配置図

第 14 表　土壌サンプリング箇所一覧表

採取地点No.	位置 地中レーダー側線名	位置 側線起点からの距離（m）	深度（m）（採取試料長）
No. 1	2-1 側線	46	2
No. 2	2-1 側線	38	2
No. 3	2-1 側線	34	2
No. 4	3-1 側線	28	2
No. 5	3-1 側線	34	2
No. 6	3-1 側線	40	2
No. 7	6-2 側線	34	2
No. 8	6-2 側線	36	2
No. 9	6-2 側線	38	2
No. 10	6-2 側線	44	2

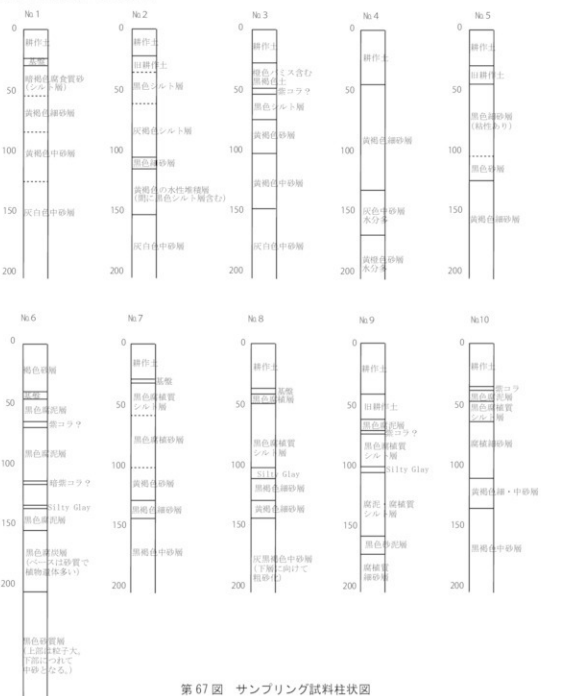
第２節　分析結果

№２と№３との間は４ｍであるが，№３から№２にかけて黄色褐色砂層（Ｘ層）と黄褐色中砂層（Ⅺ層）はなくなり，代わりにシルト層，黒色細砂層が入り込む。Ｘ・Ⅺ層を削って堀り込まれている可能性がある。№２から№１にかけての７ｍの間でＸ・Ⅺ層が現れる。前方部南西部の№１から№３の間は間地になっていたことが分かる。外濠の可能性がある。

前方部西側は，№４から№６にかけての試料から，砂丘層が西へ下がっていく様相が分かる。№６の試料では紫コラから約 50cm 下で暗紫コラと思われる火山灰が確認された。約 1,900 年前までは，横瀬砂州西側の後背湿地は№６地点では地表面から約 1.2 ｍの深さのところまでは腐泥層が堆積していたと考える。

№５から№６への砂丘層の下り傾斜は大きい印象を受ける。

後円部西側は，№７から№８区間は，砂丘層が緩やかに下るが，№８から№９の６ｍ間で，砂丘層が急激に落ちるようである。念のため№７と８の間に№10 を設定したが，やはり，黄色褐色細砂（Ｘ層相当）のレベルは極端に下がっているわけではなさそうである。ただ，№７から№８の砂丘層上部には黒色腐食層が約１～1.2ｍの厚さで堆積しており，すでに東側よりも砂丘層の西側への下っている箇所にあると言える。かつ№10 では黒色腐泥層上層に紫コラが確認されているので古墳築造時には，№７から８にかけて少なくとも砂丘層の西側への下りがあったと言える。



第 67 図　サンプリング試料柱状図

第８章　平成 27 年４月 30 日墳丘面滑落に伴う調査記録

第１節　墳丘面滑落の経緯

平成 27 年４月 30 日，午前中に大隅半島南部は短時間の集中的な豪雨に見舞われた。この豪雨で横瀬古墳の一部が滑落し，至急滑落箇所の現地確認を行った。

滑落した個所は前方部北西側にあたり，幅３m・高さ３mの墳丘表面が西側のアスファルト面に向かって滑るように滑落した状態であった。滑落した土砂には，古墳を形成している土や遺物等が含まれている可能性があるため，一時墳丘脇に保管した。

天候回復後，滑落した土の観察を実施した。滑落した土は大部分がシラスであった。また、滑落により露出した墳丘面は，古墳の盛土にシラスが使用されている形跡はなかった。そのため滑落土砂のシラスは，墳丘を形成する盛土ではなく，後世行った道路の整備時に，墳丘側面を覆うようにシラスを積み成形した土であると判断した。この部分の土壌が墳丘よりも緩く滑落したものと思われる。

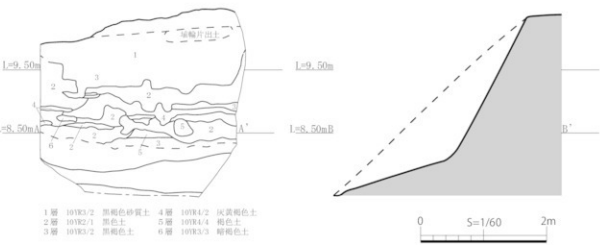
第 68 図　墳丘滑落位置図

第２節　滑落面からみえる古墳の造成状況

墳体が滑落により，露出した墳丘面で前方部の造成状況が観察できた。土層を確認できた範囲は滑落した部分だけであるが，過去古墳本体の発掘調査が行われたことがなく，今回の土層確認は横瀬古墳の造成を考える上で貴重な情報を得ることができるものと判断し，土層の観察や写真撮影及び実測図による記録作業を実施した。土層の観察結果については，以下のとおりである。

古墳を構成する土層は，おおよそ５層に分類される。まず上層（１層）は黒褐色砂質層で，墳丘に部分的に掘り込まれた部分の埋土である。表層に複数点の埴輪片が断面に現れていた。そのため，１層も築造時の盛土である。なお滑落した土で採集した埴輪片にも砂が多く付着しており，１層中にあった可能性がある。

写真８　墳丘滑落直後の写真



第 69 図　墳丘面土層図・横断図

2層以降は黒色土・灰褐色土・褐色土がみられ，しまりのある層であった。特に灰褐色土と褐色土がブロック状に堆積していた。また灰褐色土と褐色土がブロック状に堆積しているのに対し，黒色土はやや水平に堆積している様相であった。なお灰褐色土や褐色土には，明黄褐色を帯びる粒子が混入し粘性も他の層に比べて強い傾向にあった。層が入り混じっている様相は盛土しながら締め固めていく過程から以上の堆積になったと思われる。最下層の黒褐色土は，黒褐色土とは異なり，砂は含まれているが，同じくしまりのある層であった。

以上の観察結果を踏まえ，今回観察した土層から想定される古墳の造成についていくつかまとめてみたいと思う。

まず埴輪片についてであるが，表層と滑落した土からのみ観察され滑落した土から埴輪片の底部が多くみられたことから，滑落した面の表層は古墳造成時から大きな改変が行われておらず，埴輪が古墳表面に並べられていたことが想像できる。また滑落した箇所は古墳段築の二段目が想定される場所にあたり，二段目にも埴輪が存在していた可能性がでてきた。底部の埴輪片は磨耗している形跡はなく規格も大きいものが確認できた。

滑落部分の観察では墳体の大部分は黒色土を主とした盛土を用いている可能性が伺える。実際に盛土に用いられている黒色土がどこから持ち込まれたものなのかは今後も検証すべき課題であるが，今回の観察で盛土に用いた黒色土には，沖積地に見られるような鉄分を含む箇所も見られ，台地上に自然堆積している黒色土とは異なる印象であった。詳細な分析が必要であるが，遠方から持ち込んだと言うよりは，古墳の近辺の泥炭層などを利用した可能性がある。

1層は墳丘の掘り込みの埋土であることは先述したとおりであるが，他の盛土に用いられている層より極端にしまりが弱く，乾燥時はほぼ砂であった。墳丘表面で用いるには不向きな土質である。墳丘の掘り込みは何のためのものか，そしてなぜ砂質土を埋土としたのか不明である。この1層に集中的に雨水が浸透し，今回の滑落を引き起こしたと考えられる。

第3節　滑落した土から採集した埴輪片

27は円筒埴輪の口縁部で，外器面は弧を描くようにハケメが施され，ハケメを消すように横方向によるナデ調整がみられる。内器面は指頭圧痕がわずかに見られるが，全面がナデ消されている。28～30は円筒埴輪の胴部である。28は断面ヨ字形の突帯を貼り付ける。外器面は丁寧なナデ調整が施されている。内器面は粘土つなぎ目を消すように丁寧なナデが施されているが，工具を当てた痕跡が見られる。突帯端部はやや工具を用いて平坦に成形されている。

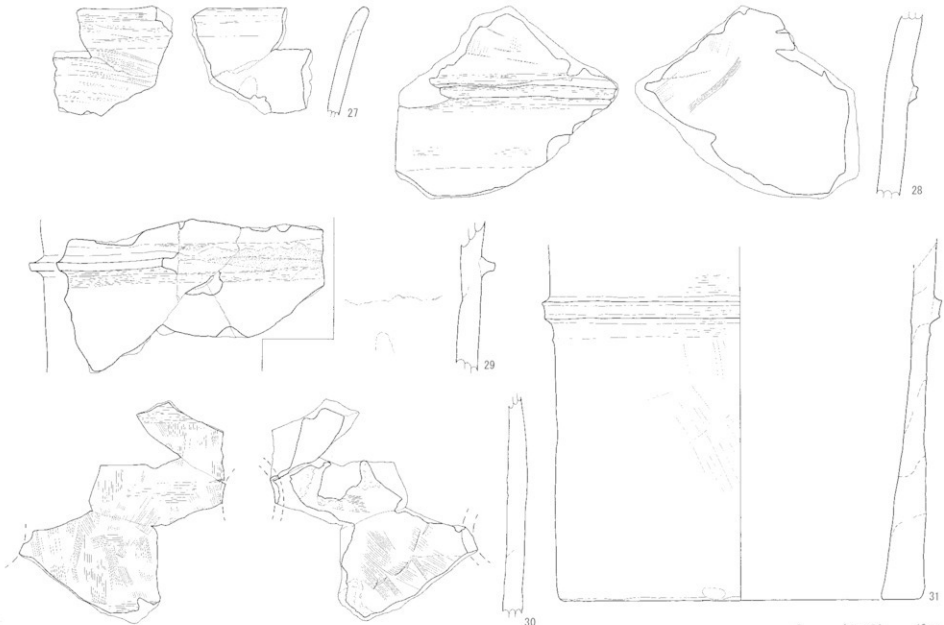
29には断面台形の突帯が貼り付けられる。部分的に突帯が剥離しており，貼付け部分は浅くV字形の凹みを施し，きれいに整えている。30は2ヶ所に透かしの痕跡が残る。

31～35は円筒埴輪の底部である。31は底部から数えて1段目の突帯がみられる。外器面はハケメがわずかに観察できるが丁寧にナデ消されている。内器面も粘土つなぎ目を消すように丁寧なナデが施されている。突帯の上面は工具によって押し込まれ窪んだ形状を呈する。33の外器面は横方向に向かって丁寧にナデが施されている。内器面は，粘土つなぎ目を指先を用いてやや縦方向にナデ消している。また，底部からの粘土体幅は約8cmで底面には粘土板を繋ぎ合わせた部分が残っている。

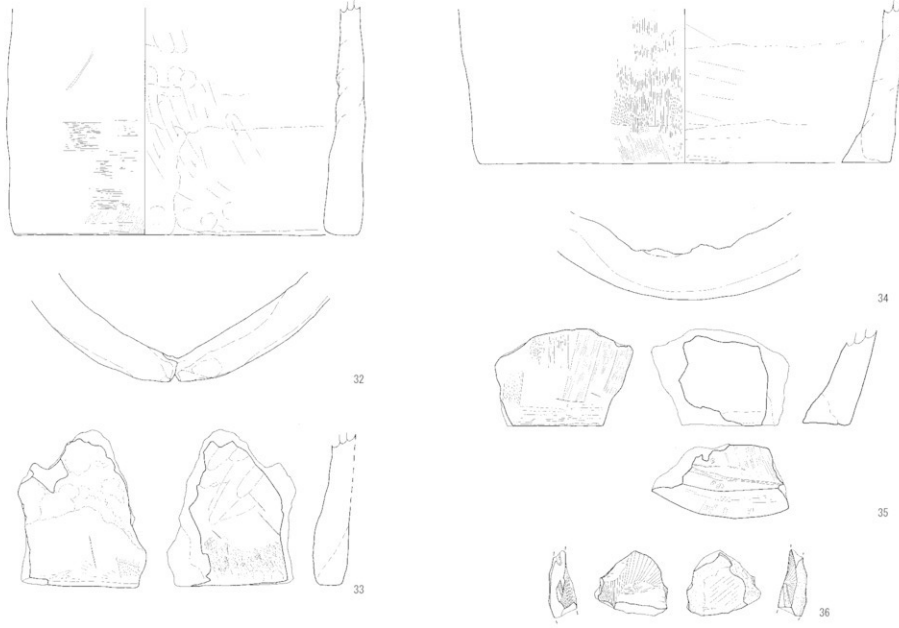
33は外器面の半分は剥落しているものの，底部から胴部に向かってナデが施されている。内器面は丁寧なナデが施され，工具を当てた痕跡が顕著にみられる。34・35の外器面は底部から胴部に向かって丁寧なナデが施されている。縦方向の板ナデ調整痕も顕著に見られる。内器面は底部から胴部に向かってナデが施されている。いずれも最下部内器面側だけに粘土帯が貼り付いており，断面形では内器面側に鋭く突き出したような形で底面を整えている。底面には粘土接合部が残る。

36は形象埴輪の一部と思われるが，形態及び部位は不明である。従って図面の上下表裏は実態と異なる可能性もあるが，便宜上，器厚の大きい方を基部と判断し，下側に配置した図面を作成した。外器面は，ナデの後多条刻線文が施されている。内器面は，ハケメが施されている。両側面にはわずかに凹線が見られる。右側面の残存部分に鋭い稜線が確認できる。基部の欠損面は本体部から欠けた印象を受ける。

以上，剥落した土から採集した埴輪片の観察の所見として，①内外器面ともに，ハケメや粘土接合痕を消すようにナデが施されているが，内器面には粘土接合痕が残る傾向がある。②土台と次の粘土体の接合は，土台を外面から覆うようにつなぎ接合している。③外面は工具によるナデが施され，内面は工具か指先のナデ調整に分かれる。3の内面調整の違いは何を指しているのかは今後の検討課題となる。なお，27の胎土は，神領古墳から出土している埴輪の胎土に酷似していることから，埴輪製作における工人や製作場を考察するに重要な資料といえる。最後に，36の形象埴輪は残存部分が少なくどの形象埴輪の部位にあたるか不明ではあるが，墳丘上面での祭祀状況を指す重要な遺物であると認識でき，この形象埴輪片についても留意しておきたい。



第 70 図　墳丘面滑落部採集遺物①



第 71 図　墳丘面滑落部採集遺物②

第 15 表　墳丘面滑落部採集埴輪観察表

挿図番号	掲載番号	時代	器種	部位	法量 (cm) 器高	口径	底径	その他	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土 石英	長石	角閃石	雲母	輝石	その他	器面調整 外面	器面調整 内面	備考
70	27	古墳	円筒埴輪	口縁	–	–	–	–	良	灰黄褐	にぶい黄褐	○	◎				1～3mmの灰色礫	横方向板ナデ	横方向ナデ・指ナデ	注記：YKS 20150807
	28	古墳	円筒埴輪	胴	–	–	–	–	良	橙	にぶい橙	○	△				1～5mmの灰色礫	横方向板ナデ・ナデ	板ナデ？摩滅	注記：YKS 20150430
	29	古墳	円筒埴輪	胴	–	–	–	突帯下 34.6	良	橙	にぶい橙	○	◎				黒褐石 暗褐石	ナデ・突帯下板ナデ	ナデ・指ナデ	注記：YKS 20150430
	30	古墳	円筒埴輪	胴	–	–	–		良	にぶい橙	灰褐	◎	○	△				縦方向板ナデ後横方向ナデ	斜め方向ヘラナデ	注記：YKS 20150617 20150629 透孔 2 ヶ所
	31	古墳	円筒埴輪	胴～底	–	–	28		良	橙	にぶい黄橙	◎	◎	△				胴：縦方向工具ナデ 底：縦方向工具ナデ・ナデ	ナデ	注記：YKS 20150430 20150617 20151118
71	32	古墳	円筒埴輪	底	–	–	27		良	橙	にぶい橙	○	◎	△	○			横方向工具ナデ	縦方向指ナデ・オサエ	注記：YKS 20150430 20150617 20151118
	33	古墳	円筒埴輪	底	–	–	–		良	橙	橙	△	○				1～3mmの灰色礫	板ナデ	指ナデ・板ナデ・指オサエ	注記：YKS 20150430
	34	古墳	円筒埴輪	底	–	–	32.5		良	にぶい橙	灰橙	◎	○	△	△			縦方向ハケメ後ナデ	横方向指ナデ	注記：YKS 20150617
	35	古墳	円筒埴輪	底	–	–	–		良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○			白色礫	縦方向板ナデ・最下部横方向ミガキ	ナデ？摩滅	注記：YKS 20150617
	36	古墳	形象埴輪	不明	–	–	–		良	橙	にぶい黄橙	◎	○					工具ナデ・多条刻線文	ハケメ	注記：YKS 20150430

第９章　総括

第１節　横瀬古墳に関する過去の記録と調査

文政７年（1824 年）に編纂された『大崎名勝誌』に横瀬古墳のことが記されている。大崎名勝誌には横瀬古墳について，「山上太き石棺有之候得共年號月日書記無之何故某之墓と相知不申候古き焼物瓦類今に崩出候」と記されている。これが現存する文献の中で最も古い横瀬古墳の記述である。内容から，江戸時代後期には石棺が露出していたこと，「古き焼物，瓦類」，恐らくは土師器・須恵器，墳輪等が墳丘に散在していたと推測する。

天保 14 年（1843 年）に薩摩藩が編纂した『三国名勝図会』では，横瀬古墳を「大塚山」と表現している。三国名勝図会には，大崎名勝誌の記述に加えて，大崎地頭館からの方角・道のりのほか，「周廻三丁許の林叢」という内容で大塚山の当時の状況を伝えている。明治時代にも，『薩隅日地理纂考』（1871 年），『日向地誌』（1884 年）で同じような記述が見られる。

大正５年（1916 年），郷土史家　瀬之口傳九郎は『考古学雑誌』第６巻第 12 号横瀬古墳の様相を以下のように記している。

① 前方部幅は約 32 間（約 58 m），くびれ部幅約 28 間（約 50 m），後円部径約 40 間（約 72 m），墳長は 60 間（109 m），後円部高さ８間程（約 14 m）。前方部は後円部より低い。後円部はもともと高かったが，以前に発掘されて頂上が平地になっており，石棺が露出している。

② 陪塚は持たない。濠は無いが，前方部から十数間（20 m程）離れた所は，高さ１間（1.8 m）程の段をなしているのは，濠跡のように見える。

③ 石棺は後円部の頂上に蓋石（蓋石？）が露出しており，堅穴であるが，規模は割合に小さい。

さらに瀬之口は，大正 12 年（1923 年）にも横瀬古墳について述べており，古墳の規模を前方部幅 36 間（65 m），くびれ部幅 21 間（38 m），後円部径 36 間（65 m），後円部高さ６間（10 m）と修正した。主軸は南５度東，円筒埴輪は少なくとも二重に巡ると記述している。

また，古墳外側の開墾の時に「土馬土鳥等」が出土し，これらを一箇所に埋めたが，場所を忘れてしまったという地主の証言や，付近に幾多の古墳があったが，今は耕作地となってしまったという地元高齢者の証言も紹介している。「土馬土鳥」とは，馬や鳥の形をした埴輪と考えられる。「小丘」を古墳であるとするなら，もともと横瀬古墳周辺に陪塚があった可能性もある。しかし大正５年段階ではすでに失われていたようだ。

山崎五十槻が大正 15 年（1926 年）に報告している『史蹟名勝天然記念物調査報告』第１輯（鹿児島県）では，初めて「横瀬古墳」の名称が用いられている。瀬之口の報告と同じような内容であるが，「今一箇所東南約三十余間の所に遺存するも果して之が陪塚なるや否やは其原形を失するを以て今日塚と断ずること能わず」という新たな情報が付け加えられている。つまり横瀬古墳より東南に 50 ～ 60 m離れたところに，１つだけ古墳らしき塚を確認しつつも，山崎の所見では原形を失っていて古墳と断定はできなかったようである。

さらに山崎は，「石室の蓋石が３寸（約９cm）程開いていたため，明治 24・25（1891・1892 年）頃，大崎町の薬種商が坑内及び棺内の副葬品を持ち出したが，後日祟りを恐れて元のように戻したと伝えられている。それが事実かどうかはっきりしない。」「今に副葬品として玉類刀剣，鏡鑑等を出したるを聞かず」と加えている。

盗掘については，昭和 26 年（1951 年）にも救仁郷断二が『大崎町史』でも述べており，盗掘されたのは明治 35 年（1902 年）で，出土品は腐食した直刀と鏡，勾玉類で，石棺の中は朱塗りであったという盗掘者から直接聞いた話が記している。

木村幹夫は昭和 10 年（1935 年）に『考古学雑誌』第 25 巻第５号「大隅に於ける前方後円墳に就て」で横瀬古墳など６つの古墳を紹介している。６つの古墳の中では最も整美に近く，古い段階のものとし，宮崎県の前方後円墳と比べて「墮落的形式」を認めるとして新たな位置づけをしている。

先述した救仁郷断二は，『大崎町史』で，墳丘の高さについては瀬之口と同じ数値を示しており，全長を 85 間（154 m）と報告している。また救仁郷が調査・鉄筆を行っている段階では，墳丘上に多数散在していた埴輪片はほとんど無くなっていたようである。明治 20 年（1887 年）までは埴輪片が無数にあって，それらの中には円筒形のものばかりでなく，人面のものも混ざっていたと記している。

これまでの文献の内容をまとめると，まず墳丘にはもともと埴輪片が多く散在しており，円筒埴輪だけでなく，動物埴輪，人物埴輪が存在していたことが分かる。しかも，円筒埴輪列が２重に巡ることが確認できる程，円筒埴輪が露出していたか，その破片だまりが帯状をなしていたと推測できる。

地元住民の証言がほとんどだが，少なくとも古墳周辺に小さな塚があったようだ。これを陪塚とみるかどうかは知る手立てはない。薩摩川内市新田神社の宝物殿に収蔵されている壺形土器には，「大崎町横瀬大塚山古墳西方の陪塚の出土品」という内容が墨字で書かれている（池畑 1987）。この壺形土器が横瀬古墳の年代と一致することからも，横瀬古墳の周囲に陪塚があった可能性も考えておく必要がある。

第２節　調査のまとめ

１．内濠

昭和 52，53 年度の調査で横瀬古墳周囲に内濠が巡る

ことが分かっていたが，今回地中レーダー探査を行ったことで，内濠の存在がより鮮明になったと言える。

墳丘の西側，後円部北側の内濠の底面幅は8～9mと程度と推定され，ほぼ墳丘形に沿っている。前方部南側は底面幅は約11mで墳丘西側及び北側よりやや広い。墳丘くびれ部東側の内濠は底面幅で約20mとなっており，内濠の幅が広がる傾向にある。ただし第5章でも報告したとおり，トレンチ東端部の土層断面図では内濠底面から周堤への立ち上がりが不明瞭であるため，検討が必要である。墳丘東側の内濠に関しては，墳丘側壁面の立ち上がりが緩やかで，他のトレンチで確認された内濠とは異なり，底面と墳端壁面の境界が分かりない程である。

いずれも内濠のおよそ下半分埋土は，粘質土となっており，内濠内は湿地状態，あるいは泥湿地であったと考えられる。特に前方部南側，墳丘西側，後円部北側は最下層は植物遺骸を含む泥炭層となっており，墳丘西側，南側は特に粘質土の堆積が厚く，長い期間水の影響を受けていたと考えられる。ただ，水を引き込んだと考えるよりは砂丘層の中の地下水による可能性が高いと考える。平成22，23年度の調査ではⅫ層の下部は帯水層となっており，まとまった雨が降ると，地下水が上昇し，不飽和状態だったⅨ～Ⅺ層も飽和状態になることが分かった。

壁面部分に砂の堆積が認められる。いずれも堆積状況から墳丘，周堤から流れ込んだ可能性があるが，断面の形状，埋土の堆積内容から墳丘あるいは周堤壁面の形状を大きく損ねている印象は薄い。

2．周堤

確認調査の成果及び地中レーダー探査の成果を参考に周堤の幅を割り出してみると，後円部北側周堤の幅（内濠周堤壁面下端と外濠周堤壁面下端の距離）は推定約16m，前方部南側の周堤の幅は推定約17mである。前方部東側は推定約14mである。墳丘東側の周堤東側壁面は砂丘が東側へと下り勾配になっている斜面を整形して，壁面を整えている。この壁面の下端までを周堤と考えると，後円部東側の周堤幅は15m以上は想定できる。

これに対して墳丘西側は砂丘層が西側へと下がる地形を平坦に整えるため盛土をしている可能性を第5章で指摘したが，その場合，周堤下端を明瞭にする資料を得られなかったので周堤幅は不明である。残存する周堤の西側上端までの幅は約15～18mであるので，周堤の実際の幅はこれより広がる。

内濠，特に外濠については周堤側からの砂の流入が目立つ。ただ，現在残存している周堤壁が滑落した印象はなく，むしろ周堤の上部に被覆していた土砂（砂丘形成層の上部に被覆させた土砂）が流れ込んでいるのではないかと想定する。ただし，現存する周堤の上部に実際土砂が盛られていたのか，盛られていたとすれば，どれくらいの厚さで，どのような土砂を，どのように盛っていたのかは，ほとんど耕作地として削平されているので分からない。ただ，内濠，外濠の周堤側から流れ込んでいる土砂は，砂を主体としていることから，濠を作るときに砂丘形成層を掘り下げた砂を盛り上げて，周堤の上部を整形したと想定するのであるが，砂だけに築造後の風雨によって濠に流れ込みやすいという疑問点も残る。

3．外濠

明らかに外濠が造られているのは，後円部北側と，前方部南側である。外濠の造営は横瀬砂州と西側の後背湿地及び東側の低地といった地理的環境と密接に関わる。

横瀬古墳は南北に延びる古砂丘の尾根に沿って築造されている。外濠は横瀬古墳の「内」と「外」を区画する役割をしているのであるとすれば，古砂丘上で「内」と「外」を区画する必要があるのは古砂丘の尾根が連続する北と南である。そのため周堤側とは反対側の方も壁面が構成される。ちなみに，墳丘北側の9トレンチの外濠の断面形は，周堤壁面の方は急傾斜となっており，壁面もきれいに整えられている。一方周堤壁面と反対側の壁面は立ち上がりが緩やかで，底面と壁面の境が不明瞭である。墳丘南側の13トレンチは，9トレンチとは異なり，周堤壁側が緩やかで，その反対側の壁面は傾斜が強く，壁面をきれいに整えている。

なお，13トレンチにおいては周堤壁面は階段状に掘り込みがされている。しかし，この階段状に掘り込まれた壁面を埋める黒褐色砂質土層，明黄褐色軽石混黒褐色・褐色土が，自然堆積ではなく意図的に盛って，周堤壁面を最終的に整えた可能性があるものとすれば，周堤壁面も傾斜面をきれいに整えていると考える。

東側は周堤から外側は自然低地となっている。外濠は造営されていないが，自然低地が古墳の内と外を区画する役割を担っていたと考える。その場合，先述したように周堤東側壁面は整形していることが分かったが，自然低地が再び東側に向けて上り勾配になっていくところで，「外濠」の東側壁面を整えていたかについては検討の余地がある。12トレンチではトレンチ西側端で砂丘形成層を掘り込んだ形跡が確認されている。しかしトレンチの概要でも報告したとおり，検出面である明黄褐色軽石を含む灰黄褐色土が，Ⅰ層直下にあるため，Ⅲ層に相当するのか，Ⅶ層に相当するのかが不明であるため，今回の調査では分からなかった。

墳丘西側は周堤から西側は砂丘層が下り勾配となっており，築造時期もすでに泥湿地の状態であったと推測する。この泥湿地が内と外を区画する役割をしていたと考える。この泥湿地は永吉台地麓部まで続くので，実質外濠の形態は存在し得ないと考えるが，ただ一つ，7トレンチ西部分で確認された，29.4～32.5m地点にある灰褐色粘質土の盛り上がりは，検討が必要である。併せて

地中レーダー探査でも3-1側線で周堤の西側に盛土のような存在を示していることも留意しておきたい。

墳丘北側と南側の外濠の埋土は内濠の埋土と異なり，底面から砂の堆積が厚く，粘質土は形成されていない。つまり外濠は溜池状ではなく，むしろ砂の水性堆積が見られることから，時として流動的な水の流れを伴っていたと考えられる。底面は内濠の底面とほぼ同じ高さであり，外濠の底面は帯水層にある。内濠内の水位が高ければ，同じように外濠の水位も上がるはずであるが，外濠の場合は，濠内に水を溜めることなく，排出されていたと推測される。

13トレンチにおける外濠埋没段階で後世に掘られた遺構の埋土は水性堆積を呈する。10トレンチも外濠とは言えないが，やはり周堤下端の埋没段階に掘られた遺構の埋土は水性堆積である。外濠が存在していたのではないかと想定した14トレンチに至っては，外濠を破壊して後世の遺構が造られているが，これらも埋土は水性堆積である。これらは，外濠が埋没しきっていない溝状の凹地を利用して水路をつくっていたと想像できる。外濠が造られた段階から，水が流れやすい環境が整備されおり，後世にこれを改修しながら水路として利用していたと考えられる。

4．墳丘

横瀬古墳は古砂丘を利用して築造されたとは考えられていたが，そもそも古墳のベースとなる砂丘は古墳内部にどれだけ存在するのかは，墳丘そのものの発掘調査を実施することがないため，その実態は不明であった。

4トレンチA区と8トレンチB，C区は墳端が削平した部分であるが，地山層として確実と言えるのはX層である。その上層は地山層を削平した後に盛られた層が堆積するが，8トレンチのX層上面の盛土が築造当時のものの可能性が高いと考える。

第8章でも報告したが，現在指定範囲となっている墳丘はほぼ黒色土を主とした盛土で構成されている。可能性として本来の砂丘の尾根もそこまで大きな高さだったわけではなく，半ば砂丘の尾根部分も緩やかな凸状態で，東西に比較的緩やかに低く傾斜するようなものであったのかもしれない。このような砂丘面に内濠，周堤，外濠の範囲を描き，墳丘は周辺の神積地で採取した黒色粘質土，褐色粘質土などを盛って築造していったと推測した。

5．横瀬古墳の規模

今回新たな調査成果に加え，昭和52，53年の確認調査の成果を改めて整理し，横瀬古墳の復元を行った場合は第72図のとおりとなる。またこれまでの調査記録をもとにして横瀬古墳の規模を数値化したものが第15表である。

加えて平成22，23年の確認調査及び地中レーダ探査によって得られた成果に基づき，横瀬古墳の旧地形を復元すると，第73図のようになる。

第3節　今後の課題

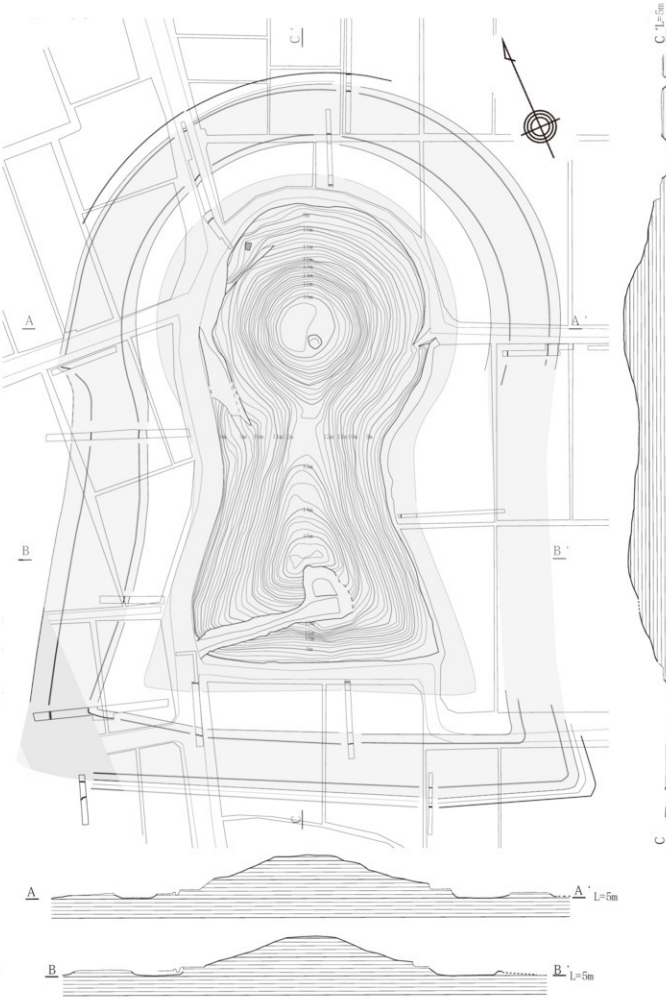
横瀬古墳の築造についてまだまだ不明な点が多く，今後のために留意すべき課題として，以下の内容を述べておく。

周濠は砂層に掘り込まれているが，いかに濠の形態を保持していくか，そしていかに地下水の影響を受けずに濠を築造するのか，墳丘の土をどこからどのように運んだのかなどが検討課題である。その他，鹿児島県教育委員会の周濠確認調査では，周濠埋土内に葺石と思われる遺物は確認されておらず，古墳上にも葺石らしき石はほとんど見当たりらない。そのため葺石があった可能性が低いと考えられる。その場合，葺石が無い状態で墳形を今日まで保持しているということになるが，実際に葺石が無いのかどうかも含めて検討が必要である。

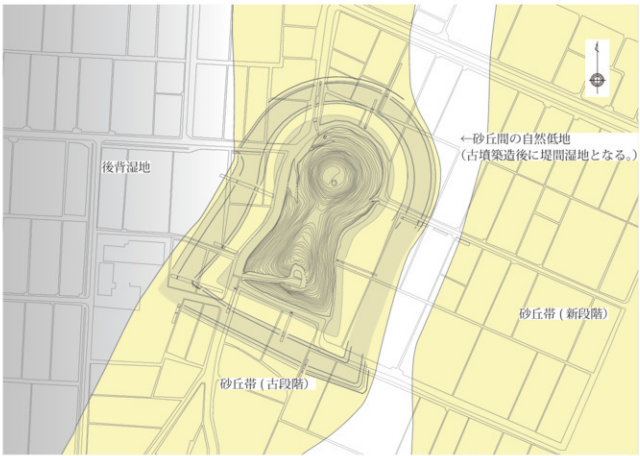
また横瀬古墳は現在の段階で少なくとも二段築成と推定されるが，実は三段築成で墳端部が道路によって削平されたことによって最下段が失われたのではないかとも考えられる。また，くびれ部に造出が存在していたのかどうかもまだ分かっていない。西側くびれ部にはわずかに平坦面があり，東側のくびれ部の地形と異なっていることから，この平坦面が造出の基部になるのではないかという見方もある。

第16表　横瀬古墳計測表

項目	推定計測値	備考
総長	192 m	南北の外濠の掘り込み上端間。
墳長	137 m	内濠墳丘側壁面の下端間。
前方部最大幅	88 m	内濠墳丘側壁面の下端間。ただし，東側前方部端の範囲は想定。
くびれ部幅	58 m	内濠墳丘側壁面の下端間。
後円部径（東西幅）	80 m	内濠墳丘側壁面の下端間。ただし，東側後円部端の範囲は地中レーダー探査結果からの想定。
前方部内濠幅	7～11 m	内濠墳丘側壁面の下端間と周堤墳丘側壁面の下端間＝底面幅。ただし，東側前方部端の範囲は想定。
後円部内濠幅	6～8 m	内濠墳丘側壁面の下端間と周堤墳丘側壁面の下端間＝底面幅。ただし，東側後円部端の範囲は地中レーダー探査結果からの想定。
くびれ部西側内濠幅	12 m	内濠墳丘側壁面の下端間と周堤墳丘側壁面の下端間＝底面幅。ただし，東側後円部端の範囲は地中レーダー探査結果からの想定。。
くびれ部東側内濠幅	20 m？	鹿児島県教育委員会の報告書を参考。ただし検討の余地あり。
前方部外濠幅	2.5 m	周堤壁面の下端から外濠外側壁面の上端間。
後円部外濠幅	3.5 m	周堤壁面の下端から外濠外側壁面の上端間。



第 72 図　横瀬古墳復元想定図



第 73 図　横瀬古墳周辺地理的環境想定図

【参考文献】

・池畑耕一　1987「南九州における横瀬古墳群の特殊性」『黎明館調査研究報告　第 1 集』鹿児島県歴史資料センター黎明館

・内村憲和　2012「特別ドキュメント　横瀬古墳の被葬者に迫る―横瀬古墳発掘調査の成果から」『広報おおさき』11 月号

・鹿児島県教育委員会　1984『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 29

樺山資雄他 編纂 1871／原口虎雄・田実男・前床重治 1971『薩隅日地理纂考』 鹿児島地方史学会 P666

・木村幹夫　1935「大隅に於ける前方後円墳に就て」『考古学雑誌』第 25 巻第 5 号　日本考古學會

・救仁郷朽二　1951『大崎町史』

・五代秀堯・橋口兼柄編纂 1843／原口虎雄監修・高野和人編集 1982「三國名勝圖會 第之五十九」『三國名勝圖會 全五巻第四巻』図書出版 青潮社 P990

・瀬之口傅九郎　1916「大隅国大崎村甕形古墳及び其墳物に就て」『考古学雑誌』第 6 巻第 12 号　日本考古學會

・瀬之口傅九郎　1923「大隅に於ける古墳の分布及び其概観」『考古学雑誌』第 13 巻第 5 号　日本考古學會

・中村耕治他　1990「大隅地方の古墳調査－墳丘測量を中心として－ (1) 曽於郡大崎町　横瀬古墳」『鹿児島考古』第 23 号　鹿児島県考古学会

・橋本達也　2008「横瀬古墳のすがた　－ソイルマーク・クロップマークから－」『News letter №19』鹿児島大学総合研究博物館

・山崎五十麿　1926『史蹟名勝天然記念物調査報告』第 1 輯　鹿児島県

・山下良八他　1824『大崎名勝誌』

図　版

①9 トレンチ
②9 トレンチ外濠
③9 トレンチ外濠埋土堆積状況
④9 トレンチ北部分自然流路
⑤10 トレンチ

① 10 トレンチ北壁面土層断面状況（平成 22 年度）
② 10 トレンチ北壁面土層断面状況（平成 23 年度）
③ 10 トレンチ周堤東側壁面掘り込み断面
④ 10 トレンチ墳丘築造期後の後世遺構断面
⑤ 11 トレンチ
⑥ 12 トレンチ
⑦ 12 トレンチ西部分掘り込み

①13 トレンチ／②13 トレンチ外濠／③13 トレンチ外濠埋土堆積状況
④14 トレンチ１号遺構／⑤14 トレンチ北部分遺構群／⑥14 トレンチ２号遺構検出状況

① 15 トレンチ
② 15 トレンチ北壁面土層断面及び
砂丘形成層面地形
③ 15 トレンチ
周堤に側壁面箇所（土層断面より）

報道発表

現地見学会

平成 22・23 年度確認調査トレンチ出土遺物

平成 27 年墳丘面滑落に伴う採集遺物① ※33は天地逆

31

32

34

32 底部粘土帯接合状況

34 底部粘土帯接合状況

平成27年墳丘面滑落に伴う採集遺物②

大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（9）

町内遺跡発掘調査等事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

横瀬古墳

2016年3月

発　行　大崎町教育委員会
〒899-7305　鹿児島県曽於郡大崎町假宿1029番地
印　刷　西文社印刷株式会社　志布志支店
〒899-7103　鹿児島県志布志市志布志町志布志2丁目16番21号